22 -2 835/サ/

英文法を哲学する

佐藤良明――著

CamScannerでスキャン

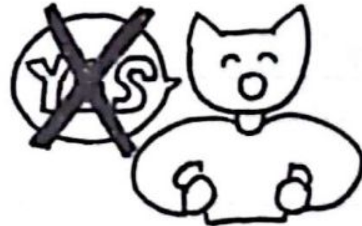
Contents

第0章 はじめに

0-1 英文法は空手の型のようなもの。…… 10
0-2 用語に惑わされず、英語そのものをかぶること。…… 14
0-3 翻訳は、魔法のようにでき上がる。…… 17
0-4 文は入れ子構造をしている。…… 21
0-5 「寄せ集める」と「組み上げる」は同じではない。…… 26



CamScannerでスキャン



第1章 英語文は真実を綴るので、その窮屈さから逃げる方法がいろいろ用意されていること。

1-1 英語のYesは「はい」ではない。…… 30

1-2 英語はガツンと否定する。…… 33

1-3 英語の記述は命題に収まろうとする。…… 36

1-4 事実でない想いは、直説法では語らない。…… 40

1-5 助動詞は現実の不確かさに文を合わせる。…… 44

1-6 willは現在形である。…… 48

1-7 なぜwillが未来形に抜擢されたか。…… 52

1-8 would, could, might, shouldを人は好む。…… 55

1-9 後悔とは、済んだことを仮想法で思うこと。…… 58

1-10 Doは事実をたたき込む。…… 60

CamScannerでスキャン

Contents

第2章 英語は日本語とまるで違った相貌をしていること。

2-1 英語文は日本語文とつくりが違う。 …… 66

2-2 日本語に「人称代名詞」はない。 …… 69

2-3 SVOは強い力でつながれている。 …… 72

2-4 英語文は構造に収まりたがる。 …… 75

2-5 日本語は、背骨を持つ代わりに根を下ろす。 …… 79

2-6 「ここはどこ?」は英語にならない。 …… 83

2-7 英語のような日本語も、結局英語に似ていない。 …… 86

2-8 日本語には〈内なるワタシ〉がいる。 …… 89

2-9 英語空間は記号を動かすゲームのようだ。 …… 92

2-10 SVOのどこに来るかで品詞が決まる。 …… 96





第3章 5つの文型の背後に、2種類の結合が見えること。

3-1 自動詞も、他動詞に負けず文を伸ばす。…… 100

3-2 WhereとWhatは大きく違う。…… 105

3-3 文は補語だけで自立する。…… 110

3-4 am/are/isはbeとは違う。…… 113

3-5 beの領分とdoの領分がある。…… 116

3-6 「英語の5文型」を疑う。…… 119

3-7 SVOとCは協調しつつせめぎ合う。…… 124

3-8 日本語は、構文の拘束がとても弱い。…… 128

3-9 英語は屈折をやめて背骨を強くした。…… 131

3-10 {主語付きの出来事}もOにする。…… 134

CamScannerでスキャン

Contents

第4章 文の形成を、名詞を発芽する動詞のはたらきに求めること。

4-1 英語の動詞は自・他の間を行き来する。 …… 138
4-2 1つの動詞が「文型」を横切って使われる。 …… 142
4-3 補語か付加詞か、that is NOT the question. …… 145
4-4 7文型は必要ない。 …… 148
4-5 be動詞を失うことで枝になる。 …… 151
4-6 補語は主語を着脱する。 …… 154
4-7 文構造は生きている。 …… 157
4-8 部分から、また全体が生まれてくる。 …… 161
4-9 時のよどみを英語にする。 …… 165



CamScannerでスキャン



第5章 英語に時制は2つだけ、3つの時相をマスターしよう。

5-1 出来事は時を進み、時から抜ける。…… 172

5-2 継続と完了のアスペクトを感じ取る。…… 176

5-3 「いる」と「ある」がbeとhaveに対応する。…… 179

5-4 英語のテンスは「現在」と「過去」の2つだけ。…… 183

5-5 受け身になる動詞とならない動詞がある。…… 187

5-6 haveはdoに似せてbeをかたる。…… 191

5-7 haveは主語を要する動詞ではなかった。…… 194

5-8 完了と継続以外にも、時相はあるだろう。…… 197

5-9 「TO不定詞」は未来を向く。…… 201

5-10 TO不定詞の「未然」の相を開拓する。…… 205

CamScannerでスキャン

第6章 コトバに上達するとは、意識を無意識へとつなぐこと。

6-1 見つめ合わず、一緒に同じ方を見る。…… 210
6-2 自然は否定を知らない。…… 214
6-3 コトバは夢にも根ざしている。…… 218
6-4 叙実以前に感嘆がある。…… 220
6-5 日本語は、主観的な思いの積み上げを許容する。…… 223
6-6 1語文にも、文構造と法がある。…… 227
6-7 隠喩は深い真実だ。…… 230
6-8 隠喩法は言語研究を推進する。…… 234

おわりに …… 237



CamScannerでスキャン

第0章

はじめに



CamScannerでスキャン

英文法は空手の型のようなもの。



「ご機嫌いかがですか、佐藤良明です。これからみなさんを、魅惑の英文法へとご案内いたしましょう……」

魅惑の？　ええ、マジに。文法は優美な姿をしているんですよ。どんなコトバであれ、自然に根をもつかぎり、その文法は美しい。小難しくて口うるさいものではありません。

私は中学の頃から英語に浸るのが好きで、英語を読み、英語を聴き、振り返ってみれば、好きなものを翻訳したり、解説したり、自由に教材を編んだり、そんなやり方で、ここまで生きてきました。

あらためまして。私は1950年生まれ、もう爺さんです。なにしろ英語の勉強を始めたのが、イギリスでビートルズ・ブームが始まった年。以来、ポップ音楽・ポップカルチャーと英語とは、私の中で同義語でありつづけています。最初の専任校で教壇に立ったのがすでに40ウン年前。振り返ると、楽しいことをたくさんさせてもらってきました（「ジュークボックス英会話」という番組に「リズム万作」の名で出ていたのは、えーと、16年も前のことか）。そうそう、「ビートルズ de 英文法」という、歌う英語コースが無料でネット視聴可能ですので、よろしければ覗いてみてください。

私が英文法の授業に手を出すようになったのは、60代も半ばになって、放送大学の初級英語科目の制作をピンチヒッターとしてお引き受けしてからのことです。その中で、自分が長年、無意識につかんできた英語の感覚と、世で行われている英語の教え方とが、だいぶズレていることを、改めて実感させられました。

CamScannerでスキャン

高校のとき1年間の留学生活に恵まれ、アメリカのハイスクールで「英語で考える」ことを強いられました。まわりに日本人は一人もいないし、日本への通信手段も、実質上手紙しかない。ラジオはAM放送、カセットテープがようやく出現しつつあったという1960年代のことです。足下から日本語を取り去られ、とにかく英語を繰り出さなくてはやっていけない環境で私は、自転車に乗れない子供が自転車に乗せられたような毎日を送ることになりました。

自転車は右足と左足で交互に漕ぐことで前に進みます。周囲を見て、ハンドルを操縦しなくてはいけないのはもちろんですが、とにかく漕がないと倒れてしまう。ただ英語という乗り物は日本語と漕ぎ方が違う。その漕ぎ方こそが「文法」なのだという感覚を、知らず知らずのうちに私は授かったのだろうと思います。

自転車の比喩を持ち出したのは、最近、阿部公彦(まさひこ)さんの英語教育論で、英語と日本語の身体性の違いについて「自転車に乗るか、ブランコに乗るかほどの違いがある。力のいれ具合や身体の動き方がまるで異なる」と述べているのに出会ったからでもあります[*1]。

ここで阿部さんは強弱や高低のアクセントなど「音の文法」の話をしているのですが、私が深く頷いたのは、日本語をしゃべるときと英語をしゃべるときの感覚の違いは、2つの乗り物——というか「漕ぎ物」——の違いのようだと感じたことを思い出したからです。私が言うのは統語感覚(言葉のつなぎ方)のことです。日本語は、ブランコのように大きなフレームの中で漕いでいるので、固有のリズムさえつかめば途中で漕ぐのをやめても文になる。ところが英語はSを出しVを出し、多くの場合OやCも出さないと文が立たずに倒れてしまう……。

いきなり比喩が先走ってしまいました。いま申し上げていることの意味は、以後の章で、時間をかけて、じんわり説明していきたいと思います。この本は、英文法の中でも「構文」に関して特別な注意と関心を払います。

＊1　「『すばらしい英語学習』の落とし穴」(『現代思想』2020年4月号)。阿部公彦『病んだ言葉、癒やす言葉、生きる言葉』(2021)所収。

CamScannerでスキャン

英語を学ぶなら、英語を倒さずに漕ぎ続けないといけない——その感覚だけはなんとか身につけ、日本に帰ってきたところ（もう高3の2学期でした）、何とも残念なことに、級友たちは、「でる単」と称する単語リストを片っ端から覚えようとしているのです。

- 英文とは、所詮単語の集まりだから、単語を覚えた者が入試に勝つ。
- 間違えるとバツがつく英語のルールを英文法という。

こうした、醜い前提のもとで営まれている入試のための英語に級友たちが叩き込まれているのに接して、悲しくなりました。

時代が動いて、「文法」と「訳読」がやり玉に挙げられるようになりました。「文法」は「コミュニケーション」の役に立たないとして、日常会話の[illegible]になるものも、重箱の隅を突くようなモノも、一括して軽視される。さらには、文法ばかり教えられているから英語を話せるようにならないのだという被害者意識さえ生まれ、会話教材のCMがそれを煽っている始末です。

英語学習のルールを変えたい。これは私が一生抱いてきた野望です。何度か闘い、全部負けました（ファースト・シーンズを担当した『リトル・チャロ』は、まだときどき放映されるので、「負けた」と言っては、見て学んでくださった方に申し訳ないですけど、あれを学習優先のプログラムに押し上げられなかったのは私の敗北です）。そんな折、かつて私の学生だった永井薫さんに、本を一冊書く場を提供していただきました。魂を奮い立たせて、もう一度リングに立ちます。

振り返ってみたとき、一番記憶が鮮やかなのは、1990年代の東大駒場キャンパス。ほぼ8年にわたって、当時の学生たちに聞き取れる、できるだけ文学以外の教養につながるような、英語の映像を自作する企画の現場を任されました。3600人ほどの学生（同学年全員）が、同じ時間に教員集団自作のビデオ教材で、読解テキストに関連した内容を英語で聞き取るという、何とも不思議な教育イベントでした（ご関心の向きには『これが東大の授業ですか。』[2004] という授業のドキュメント本があります）。

リスニングを重視したのは、それが英語体験の基本だから。言語が運ぶ

CamScannerでスキャン

情報は、文頭からリズムやうねりを伴ってやってくる。英語はやはり声がないといけません。活字を読むときも、英語に慣れた人は、文頭からリズムやうねりを伴って読んでいます。

その意味で、「1000時間ヒアリング・マラソン」というコンセプトでアルクを創業された平本照麿氏には、以前から敬意を抱いてきました。受験参考書と、TOEIC対策と、「手間をかけずに楽々上達」を売り物にした会話教材ばかりが目立つこの国の英語市場に、確かな上達のヴィジョンと秩序に沿うディシプリンを持ち込んで結果を出した功績は特筆すべきものがあります。

意味を運ぶ文章は、基本的なパターンを繰り返して動いています。英語のパターンは動態です。時間の中で起こる運動であり、その動的パターンこそ「文法」なのです。どうやったら英語で立ち続け、動き続けていられるか。それには英語の構造を、すなわち文法を、内面化することが必要です。

むしろ「型」と言ったらいいでしょうか。自転車の喩(たと)えからは降りて、今度は空手の「型」を考えてみてください。あの型を繰り返し練習することで、自分が強くなる。英語も同じです。**自分を英語の型にはめていく。それはたくさんの知識を一つずつ手にして、英語を「征服」していくというのとは違います。むしろ英語という動的秩序に、自分をどう収めていくか。何を得るかだけではなく、何をなくしていくかという問題でもあります。**英語の中へ少しでも潜入するには、今の自分の思考の構えをどう崩し、どう改めたらいいのか。

それがこの本のテーマです。

CamScannerでスキャン

0-2

用語に惑わされず、英語そのものをかぶること。

「脱亜入欧」という言葉を、若いみなさんは聞いたことがあるでしょうか。私も歴史の授業で習っただけですが、そのフィーリングは実感できます。舶来品の高級な雰囲気。洋楽にこもる魅惑のリズム。それに比べて「イヨーッ、ペペンペン」とやる亜（アジア）のお座敷音楽の滑稽さ。青い目、高い鼻。ガイジンさんの振る舞いが、いちいちワンダフルに見えた時代があったのです。

英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語を学び、その思想に染まり、また西洋の実学をものにすることが、出世のための必須要件と考えられた時代。くだけた日本語に外国語を落とし込んで、そのフィーリングを感じるなどという発想は、教育現場にありませんでした。

日本語は非論理的だという、それこそ非論理的な考えが、教育界にもまかり通っていたのです。「英語の読解授業によって、実用的な力は身につかないかもしれないが、もっと重要なのは論理的思考を身につけることだ」と先生が語るのを、私自身も聞いたことがあります。

このように、英語に向かって日本国民（少なくとも進学志望者層）がこぞって背伸びをしていた時代に定着した文法用語には、今から見ると「これでいいのか」と思えるようなものも多々あります。たとえばsubjectを「主語」と呼ぶのはよいとして、objectを「目的語」と呼ぶのはどうなのでしょう。英語で「目的地」は目的語ではなくtoやforの付いた副詞句で表すのが普通ですし、また「行為の目的」はいわゆる「不定詞の目的用法」で表すのが普通です。

CamScannerでスキャン

次のうち目的語はどれか

i) I accidentally broke the glass.
ii) The train is headed for Osaka.
iii) I went to the park to see her.



ii)の文は「目的地」を語っていますし、iii)の文は「お目当ての」彼女との出会いについて語っています。しかし、それらが「目的語」にならず、i)の壊したくなかったのに壊してしまったものが「目的語」と呼ばれる。これはconfusingですよね。混乱を招きます。

「補語」という言葉も正確に理解されていない概念の一つです。実は「主語」も、正確に理解されているとは言えません。主語は「行為の主体」なのでしょうか。「単なるトピック」なのでしょうか。It hurts. My eyes can't see.(痛い。僕の目が見えない)というときのitや、何も見ていないmy eyesは、何なのでしょうか?

これらはきわめて重要な概念です。主語(S)と目的語(O)とが動詞(V)に絡み、それにまた「補語」(C)が絡んで織りなすパターンに習熟すること。それこそが英語に慣れるということの意味です。

学校の生徒が頭を悩ます文法用語の数々は、英語に対し、学問として取り組むネイティブ中心の学者たちが100年も200年も前に命名し、近代日本の学者たちがそれらを翻訳して受容したものです。それらのうちには、本当に重要な概念もありますし、単に煩わしいだけのものもあります。仮に私たちが日本語を学ぶとして、細々とした文法書と向かいあうところを想像してみてください。「大きな」は「大きい」と違って「連体詞」、「静かだ」は「形容動詞」、などと分類しても、そのような枝葉の知識は身になりません。でも一方で、太くて曲がらない、幹のような規則があります。形容詞のあるものは「い」で終わるという感覚。名詞っぽい観念には「な」や「の」が付いて形容詞になるという感覚。ネイティブの場合、無意識に沈んでしまっている規則の集まり。まず、それら(だけ)を、ざっくり捉える学習が必要です。

CamScannerでスキャン

一度立ち止まって考え直すことで、英文法は真に役に立つものに生まれ変わるのではないか。たとえば、「時制」として、今も教えられている(?)ような12もの違ったカテゴリーが必要でしょうか。私たちの思考モードを12に切り分けるのは、不可能に近いことです。「未来完了進行形」なんて言われても、うまくイメージできません。

学者たちの言説ではなく、英語そのものの形に目を向けましょう。文自体が明らかにしているのは、動詞句の始まりに時制の印(tense)が付くという点、それだけです。それによって、英語の時制は「現在」と「過去」の2種類に振り分けられます。

現在時制(動詞句のテンスは現在)	過去時制(動詞句のテンスは過去)
Dad will wake us up.	Dad would wake us up.
He cooks breakfast.	He cooked breakfast.
I don't like eggs.	I didn't like eggs.
I haven't eaten them.	I hadn't eaten them.

I cook.とI am cooking.の違いはどこにあるのか。両方とも(cookもamも)時制は「現在」。違いはI cook. がI eat. と同じ形式(SV)なのに、I am cooking. がI am a cook.やI am cooked.と同じ形式(S[be]C)の表現だという点にあります。

その先の議論は、第5章をご覧ください。英語に時制は2つだけ。それ以外に、ingやedの付いた「分詞」について、その「時相(アスペクト)」を考えていく。これは、現代の文法学の正統に沿った考え方です。

その正統に、本書はもう一つの「時相」を加えることを提案します。「すでに」の完了と、「いま」の進行、2つの相に加えて「これから」のことも「未然」の相にまとめて説明いたします。どうぞお楽しみに。

CamScannerでスキャン

0-3

翻訳は、魔法のようにでき上がる。

私も教員人生が長いので、こういう本を書き出すと、過去のいろいろなシーンがフラッシュバックしてきます。

新米教師として着任したのが東京外国語大学。血気盛んだった私は、ある日の授業で、こんな問題を出したことがあります。いきなりですが、みなさんもどうぞ。

文脈　母親と二人暮らしの女子生徒が、今日もまた始まった母親の愚痴を聞かされている。それに付き合って慰めの言葉も掛けてあげたのに、チーンと鼻をかむ音にかき消されて聞こえないらしい。その時少女の心に、突き上げるような思いが起こる――

That's right. Blow the nose. You look great. It's all red.

設問1　上の英文をこう訳した人がいます。「そうです。鼻をかみなさい。あなたは偉大に見える。真っ赤ですもの」。この人が英文を読み取れなかったのは、どんな前提が邪魔をしていたのかについて考えなさい。

設問2　あなたの言葉で英文を訳しなさい。

設問2からいきましょう。ベストの解答をご紹介します――

CamScannerでスキャン

「いいじゃない、ハナかんでれば。真っ赤な鼻して、ステキよ」。　……①

ワオ。その通りです。That's right. の皮肉な肯定。Blow the nose. の感じを伝える「……でれば」の言い切り。look great という褒め言葉を、日本語の褒め言葉に変換してなお攻撃的な語感を残す処理もできている。

胸のうちのモヤモヤが一気に言葉をまとったスピード感も、原文のリズムを外していない。

「そうです。鼻をかみなさい。あなたは偉大に見える。真っ赤ですもの」。
……②

はどこが違うのか。「文脈が十分に把握できていない」とか、「少女が母親をなじる言葉づかいではない」とか、いろいろ言うことはできますが、要するに、英語の形式と日本語の形式の対応に慣れていないということです。以下の前提が、きっと邪魔しているのでしょう。

(1) 英語は4つの文から成っている。その区切りは動かせない。正確な翻訳のためには、その4つを一つ一つ日本語にしていくのがよい。
(2) 主語も述語も、訳し落としがないようにしないといけない。
(3) 文の意味をつくるのは単語であるから、それぞれの単語の意味をきちんと日本語に移さないといけない。
(4) くだけた表現では、That's とか It's とか、「あれは」「それは」と訳さずに省略した方がよい場合もあるけれど、その際も論理的なつながりは示すべきである。You look great. と言えるのは「真っ赤である」からだ。その関係を「ですもの」で表現しよう。

これらの前提がどうしてダメなのか。それを、きちんと言うことはとても難しいのです。

一体どうやって、前ページの英文が、①の日本語に「翻(ひるがえ)る」のでしょう？不思議です。まるで魔法のよう。辞書に頼っても、文法書に頼っても、こういう日本語は引き出せない。私たち自身が、日々言語を操っている、その魔

法のような能力を信頼するしかありません。[*2]

そんなスキルを人はどのように習得するのでしょう。同時通訳を楽々とこなしている人を見ていると、算術の暗算を高速でこなしているように思えるときがあります。その「魔法」を、どう理論づけたらいいのか。

一概に習得（learning）といっても、レベルの違いがあることに注目しましょう。

(1) かけ算「九九」を暗唱できる。
(2)「九九」の知識に基づく計算法を学んだので、
　紙と鉛筆があれば、3桁×3桁のかけ算もできる。
(3) 3桁のかけ算なら、暗算でできる。

これを英語の習得に置き換えていうと、多分こんな能力と等価になります。

(1) は、それぞれの英単語に対応する日本語が言えるようになったレベル。
(2) は、文法項目を学んで、文全体を日本語に訳せるようになったレベル。
(3) は、長文をすらすら読めたり、英語の講義を耳から理解できるレベル。

算術でも英語でも、(1) から (3) まで、ある程度長い時間をかけて「習熟」という過程が進行します。「習熟」とは、心の深いところで「慣れ」による変化がおき、その変化が新しい自分の一部に組み込まれる過程を言います。

人はなぜ「暗算」ができるようになるのか。数字の組み合わせは、無限にあるようで実は有限であり、その有限の組み合わせに慣れることで「省略」するコツをつかんでいくからでしょう。この場合「省略」とは、意識せずにすむことを無意識に委ねることを言います。ポイント・ポイントさえ意識すれば、あとは脳が自然に計算を仕切ってくれる――そのような処理を「暗算」というのではないでしょうか。

＊2　このエピソードは、月刊誌『翻訳の世界』（1986年4月号／バベル出版）に掲載された。

CamScannerでスキャン

暗算とは、美しい日本語ですよね。英語に直訳すれば、dark computation. 意識されていたことが暗黙知に置き換わり、無意識の暗がりで、正確で安定した演算が行われる。別に神秘的なことではありません。生命体にとってありふれた現象です。逃げるネズミに飛びかかるネコは、着地のときに相手がどこまで進んでいるかを「暗算」して、ジャンプの具合を調節しています。

優美にピアノを奏でる能力も、英語に即時に反応できる能力も、同様の暗黙知に支えられているのだと思います。自分の思うことが、暗黙の演算で英語になって出てくるまでに、何を、どのように習得したらいいのか、考えることに意味がありそうです。

CamScannerでスキャン

0-4

文は入れ子構造をしている。

本論に進む前に若干の用語の整理をしておきましょう。以下は、学校で習いました。

文　sentence：大文字で始めピリオドで終える、文章の一区切り。
節　clause：文を構成する要素のうち、主述の構造を持つもの。
句　phrase：文や節を構成する要素のうち、主述の構造を持たないもの。
語　word：スペースで区切られる文の単位。辞書の見出しになる。

ただし話は単純ではありません。「文」にもいろいろあります。

単文（1つの節から成るもの）

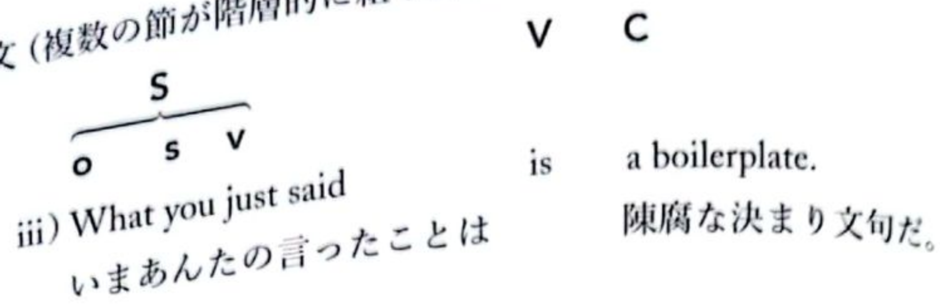
	S	V	O
i）	The president of a company	must stand	such pain.
	会社の社長は	耐えねばならん	そういう苦しみに。

重文（2つ以上の節を寄せ集めたもの）

	S	V	C		S	V	C
ii）	The pain	is	severe	and	I	'm	an old man.
	痛みはきつく				私は老いた人間だ。		

CamScannerでスキャン

複文（複数の節が階層的に組み合わさったもの）



i）の主語は5つの単語がつくる「句」です。冠詞を含む2つの名詞がofで繋がった形をしていますが、全体で1つのN（名詞）になっていることに注意してください。

これに対し、iii）の主語は、主語（you）と動詞句（just said）を持ち、それに目的語whatが付いた「節」の形になっています。

svoの要素を持った「節」が、osvの語順になって、これ全体で1つのN（名詞性を帯びたもの）になっている。Nになると、主語になれるので、大きなSVOを構成する。このように、SVO（主語—動詞—目的語）の構造は、積み上げが可能です。

◎「節」全体が品詞化し、より高次のレベルの「句」を構成する

ここで「句」とは、構文を組み上げる、品詞化した単位——名詞句N、副詞句adv、形容詞句adjのいずれか——を言います。句と節を、それぞれ単独に定義するのではなく、**「節を組み上げるものは句である」**という関係において見ていくのです。さっきまで節だったものが突然「句」と呼ばれるのを聞くと面食らうかもしれませんが、文構造はそういうものだと割り切ってください。

実は「語」と「句」の関係も一筋縄ではいきません。「句」にも構造があります。

単語になった句	a hotplate
名詞が結合した句	moss green
形容詞付きの句	a hot plate; a dark moss green color

CamScannerでスキャン

前置詞句付きの句　a place in the sun; a boy from Brazil
節をしたがえた句　the man who knew too much

「句」とは何か、単独で定義しようとしないで、「句」を常に、「節」の構成要素とみなし、句全体で、N、V、adv（副詞句）、adj（形容詞句）といった品詞性を帯びるのだと考えていきましょう。そういう考えに立てば、語と句を呼び変える必要もなくなる。「**1語から成る句を語と呼ぶ**」と決めればいいわけです。

文という概念も実は自明のものではありません。たとえば次のような発話も「文」と見てよいのでしょうか？

1語から成るもの　"Hungry?" "Very."
1句から成るもの　"Anything else?" "Not now."
従属節だけのもの　"If you don't mind."

コミュニケーションの視点からすると、発話は、言葉になって表出する部分と文脈に沈む部分があって、両方がかみ合って効率的な意思伝達が行われる。ですから前述の「文」も、その機能をまっとうしている限りは、断片でなく、メッセージの全体として受け入れることが望ましいと思います。このように考えましょう。

◎文の構成要素も、そのまま文に成りうる。

もう一点、先ほどの「節を組み上げるものは句である」という理解から、次の公理が導かれます。

◎節と句の間には段差がある。

その段差を作るものが「構文」(syntax) です。それは典型的に、Vを介し

CamScannerでスキャン

てNがつながる形をしています。

N——V———N

iv) You are a rude man.

v) I don't like the way [N——V——N]

you said it.

言い方 ← 君が僕にそれを言った

ややこしい言い方になりましたが、ここではv)の文の構造が理解されれば十分です。句(the way)が節(you said it)を従えて、その全体が1つの名詞句になっているところ。**句が節を含む**ことも普通に起こります。日本語でもそうでしょう。

[きのう母とデパートに行ったときに買ってもらった]服

これ全体で1つの名詞句です。中に節が含まれています。また、この後に「を着る」を付けると、また節になり、それに「の」を付けて句に戻せば、「が」を付けて、こんな文の主語[*3]にもなります。

主語 [きのう母とデパートに行って買ってもらった]服を
—着る—の

格助詞 が

述語 楽しみだ。

このように「節」は、日本語でも英語でも構文の中にもぐりこんでしまえる性質を持っています。

そして、構文内のある位置を占めるとき、句も節も1つの品詞性を帯びる

*3 「が」に先行する部分を「主語」と見なすかどうかも大きな問題だが、日本語にとって主語とは何か、という話には立ち入らないでおきましょう。

のです。副詞節（adv）、形容詞節（または関係節＝adj）、名詞節（N）の例を挙げておきましょう。

　　V　　　　adv
vi) Come back　when you grow up.　（成長したら戻っておいで。）

　　N　　　adj
vii) the town　where I was born　（僕が生まれた町）

　　N　V　　N
viii) I　know　why he did it.
（僕は知っている、彼がなぜそれをしたのか。）

　英語を身につけるということは、文の大きなブロックの構成に反応できる能力を獲得することに他なりません。

まとめ

（これは本書を通じての理解の目標です）

- **節と句とはレベルが違う。**
  その段差をつなぐものが「構文」の諸規則である。
- **構文とは、品詞化したパーツが、**
  いかに全体を構成するかを示すものである。
- **節は容易に句に含まれる。**
- **句は語である**
  （または語を寄せ集めたり、組み上げたりしたものである）。
- **文は節である**
  （または節を寄せ集めたり、組み上げたりしたものである）。

CamScannerでスキャン

0-5

「寄せ集める」と「組み上げる」は同じではない。

前項で示した「重文」と「複文」の違いとは、要素が寄り集まって、単に加算の関係を成すだけの場合と、それが組み上がって別な何かを構成する場合との対照です。構文論では、階層的な構造に焦点を合わせます。つまり、単に砂糖と塩を混ぜたような「混合物」は、脇にのけて考えます。

複数の語が「句」になるときも、「寄せ集め」と「組み入れ」の対照が見られます。

Okayama, Japan

というフレーズは、単にワードを重ねただけ。一方、

from Okayama

というふうに前置詞を名詞の前に置くと、事態が変わります。from Okayamaは、名詞として安定していられない。何かに組み込まれないといられない。

a man from Okayama

と言えば、名詞を修飾する形容詞句になって安定します。

He came from Okayama.

という文では副詞句として、文の中に安定した位置を得ます。

前置詞を付けることで名詞が新たな品詞性を帯び、そのことで構造に組み上げられる——そんな、英語文の基本的な動きを追っていきましょう。

本書は、英語の構造をきちんと解明することを通して、英語という、日本語とは形の違う意味伝達の世界と交わることを目指します。

第1章では、「直説法」による叙実という、日本語にはない「真実のモー

CamScannerでスキャン

ド」について学びます。肯定も否定もキッパリしているコミュニケーションのありかた。もちろん真実だけでは、角が立つ。その角を丸くするための「仮想法」や、話者の主観を込めるほんの数個の「助動詞」について、新しい角度から切り込んでいきましょう。

第2章、第3章では、「英語の5文型」と言われている型を検討していきます。そして「5文型」よりもっと根本にある「2つの世界観」を明らかにしていくことに狙いを定めます。2つの世界観とは、doとbe。〈SVO〉と〈C〉と言っても同じです。なんだか謎めいて聞こえるかもしれませんが、説明はお待ちください。この対照的な2つの型を組み合わせて意志と意味を伝え合う英語という言語を、2章分20項を費やして、しっかり観察していきます。

第4章でも構文論は続きますが、動詞の動きに注目することで——ちょっと難しい言い方になりますが——動態システムとしての英語文の生成についてお話しします。動詞が名詞を呼び込んで文の骨格をつくり、その骨格に他の情報がどのように付加していくのか——その模様を、できるだけ現行の文法用語を使わずに、シンプルに語ることを目指します。

第5章は、「進行形」や「完了形」と呼ばれる時間の相に踏み込みます。動詞に-ingや-ed（または-enなど）を付けた「分詞」が、〈doの世界〉と〈beの世界〉をどのように橋渡しして、意味の宇宙を広げていくか——。いえいえ、難しいことではありません。中学校で習った「時制」のルール、あれは一体どういうしくみでああなるのか。その原理を、広いパースペクティブから捉えられるようにお話しします。

第6章には、ちょっとした神秘主義が混じります。それまで考えてきた「文」の構造が溶け出すような地点にまで考えを進めます。英語という言語は、自然界のより広範なコミュニケーションとどのように接続しているか。動物の意思伝達や夢における隠喩的な伝達と、どこが共通して、どこが決定的に分断しているのか。

CamScannerでスキャン

この本のタイトルを『英文法を哲学する』としたのは、別に偉そうに構えたわけではありません。canの意味、amの意味一つ考えるのも哲学なのです。言葉は枝葉を殺いでシンプルにすればするほど深くなる。デカルトの

I think therefore I am.（吾おもう、故に吾あり）

という言葉は、近代哲学の起点となるほどのインパクトを持ちました。哲学は「個我」や「存在」や「時間」について問い詰めます。「知覚」や「所有」についても考えます。文法も一緒です。

もちろんこの本で、近代や現代の哲学について弁じることはありません。ただ、コトバを意味ある形で論じる必要から、いささかこだわった言い方をすることがあります。たとえば、ある単語がこれこれの「意味を持つ」とか、この単語の「品詞はこれだ」とか言わないように努めます。**モノには属性がありますが、コトバは基本的に関係性の中でのみ機能する。**だからコトバをモノに擬えるような語り方は極力、避けようと思います。

全体としてこの本は、一般に硬いものと見なされている「文法」を、植物の分枝や人間の身体の動きに喩えることによって、より柔らかなものに練り上げることを狙っています。その軟化した文法に、ぜひあなたも頭をもみほぐして、絡んでいってください。

CamScannerでスキャン

第1章

英語文は真実を綴るので、その窮屈さから逃げる方法がいろいろ用意されていること。



CamScannerでスキャン

1-1

英語のYesは「はい」ではない。



英語と日本語とではコミュニケーションの形が違う——と言うと、まあそれはそうだろうと、みなさん思うでしょう。でもその違いを、実際リアルに感じることは、軽いショックを伴うことです。

いきなりですが、Yes という語、あなたは使いこなせていますか？

You're not tired, are you?　疲れていません、よね？

この質問に「はい」と同意するには、No. を使う。「そんなことないです(疲れています)」と否定するにはYes. を返す。この規則、文法項目として教わってはいても、瞬間的に使いこなすのは、かなりの慣れが必要です。

No. I'm not.　はい、疲れてません。

No. は、場合によって「はい」の意味になる——のではありません。英語のNo. はそもそも相手に対する「返事」ではないのです。相手の言ったことへの賛否ではなく、一つの否定的事実（negation）を知らせる言葉です。これから言うのは否定文の内容です、とあらかじめ知らせる予告の赤信号のようなもの。だから、「疲れていない」と聞かれて、疲れていないなら、このNo. はやさしい口調で返しましょう。相手も承知していることに、同意を示すだけなのだから、強く言ったらおかしく聞こえます。

逆に、次のYes. には「違います」の気持ちがこもる。だから「実はですね」の気持ちを込めて、はっきり言わないと変です。

CamScannerでスキャン

Yes, (as a matter of fact,) I am.　　いやあ（実際）疲れてるんで。

マスターしたいのは、こうした基本的な英語を発するときの心のありようです。Yes,と共に出てくるI am.のamの強さ、ストレートさを感じてください。Won't you do it? と聞かれて、「いや、しますって」と答えるときの"Yes, I will."も、2008年にオバマ候補を大統領に押し上げた"Yes, we can."も同じ強さ、ストレートさに満ちています。

辞書に記載される"意味"ではなく、その語が出てくる心のフレームと親しみましょう。言語表現の生まれる根っこ。その根っこに触れて、どんな感じがするかをつかむことを目指しましょう。

英語のYesに当たる言葉は日本語にないのだけれど、その感覚は行き渡っています。うれしいニュースを聞いた。好きな人が帰ってくる。「そうそう」「それだよ」「そうこなくっちゃ」。大谷がホームランを打った。イェス！　目の前の事実に対してうなずくこと——これがYesという発話の深みにある肯定感です。

日本語の「はい」は、これとは全然違います。

「出席を取ります——アカマツ君」、「はい」。「オソマツ君」、「はい」。この「はい」は従順さの表明です。上官に叱られている最中も従順さをくずさずにいることの印が「はい」。「それでいいと思ってるのか！」「はいっ、そうは思っておりません」(例文が古すぎますが、アメリカの兵隊が、ここでYes, sir! と言ったら「いいと思っています」という口答えになってしまいます)。

日本語の「はい」の役割は対人肯定。相手の意に従う、同意する、受け入れる。それ自体「よいお返事」なのです。

このことの背後には、日本語と英語の、コミュニケーション・ツールとしての性質の違いがあります。

日本語が、相手の発言に合わせて「はい」と「いいえ」を使い分けるのは、そもそも日本語という言語が、相手との関係を最優先する言語だから。想

CamScannerでスキャン

像するに、古代からそういう形になっていて、漢語や西洋語との接触をものともせず、今もその形を保っている言語だからでしょう。

一方、ある出来事が事実であるかないかを肯定否定で切り分ける英語は、相手との関係の保全より、まず事実の捕捉を優先させる。そのような暮らしと文化と絡みながら進化変転してきた言語の一つが英語であるといえます。

どうぞ英語で。

(1)「きみはマリさんの夫じゃなかったのかね?」「いいえ、違いますって」
You (　　　) (　　　) Mari's husband?　No, (　　　) (　　　).

(2)「きみはマリさんの夫じゃないよね?」「ええ、違いますよ」
You're (　　　) Mari's husband, (　　　) you?　(　　　), I'm not.

(1) "You (are) (not) Mari's husband?" "No, (I'm) (not)."

返答のNo.はマリの夫と誤認した相手の発言を否定する言葉ではなく、否定的な事実（夫でないこと）を押し立てることをその働きとしています。なお、「なかったのかね？」と、質問に「た」がついていますが、現在の状況を聞いているのなら、現在形 are を使わないとまずい。were を使うと「モト夫」の意味になってしまいます。

(2) "You're (not) Mari's husband, (are) you?" "(No), I'm not."

あなたが「夫じゃない」と正しく理解をしている相手には、**No. と言って同意する**のが正しい英語です。

CamScannerでスキャン

1-2

英語はガツンと否定する。

英語の否定文の作り方は初級文法で習いました。be動詞と助動詞の場合は、それらにnotを付ける。縮約の仕方はいろいろありえます。

I'm not.	You're not.	She's not.	It's not.
You aren't.	She isn't.	It isn't	We weren't
I won't.	You shouldn't.	He mustn't.	They couldn't.
I haven't done it.		He hasn't been doing it.	

一般動詞は、これとは異なります。過去の時代に用いられたI know not.という言い方は廃れ、

Do you know that?　　No, I **don't.**
Did you like it?　　No, I **didn't.**

という言い方になった。**doを付けて強調し、そのdoを否定する**というやり方です。

動詞句が否定されることが、文全体——正確には「節」clause全体 [⇨**0-4**]——の否定になることに注意してください。動詞句以外に否定のnoが付く場合も同様です。

主語を否定　　**Nobody** cares much.
誰もたいして気に掛けない。

CamScannerでスキャン

補語を否定　You'll get **nowhere** by just waiting.
ただ待っていても埒があか**ない**。

この2つの日本語訳が、どちらも「ない」で終わる点に注目してください。形容詞「ない」は、前言を広く受け止めて、それ全体を「ない」ことにする語です。肯定否定の判断を最後に回すのはとても日本語らしいところ。「ないのよ」と言い含めたり、「ないんだってば」と撥ねつけたり、「ない……ということで、たいへん申し訳ありませんが」と下手に出たり、微妙な扱いを必要とする語として、「ない」が文の最後に置かれる。それが対人型の言語である日本語の、断定や否定の表し方なのでしょう。

英語は違います。日本語と比べてください。

I'm **not** the kind of guy who let girls down.
俺は、女の子を失望させるような男じゃ**ない**よ。

I **don't** feel like going out in such bad weather.
こう天気が悪いと、なかなか外に出る気になら**なく**てね。

日本語では、述語のお尻を「ない」が締める。「ない」は形容詞。「ある」「である」の断定をひっくり返し、「そういう状況にない」とか、「そういうことはしない」「そういうものではない」とする。**最後にいつでも「ないことにする」ことができます。**

これに対し、英語の否定文は、厳密に見ると、文まるごとの否定ではなく、主語・動詞・補語／目的語（SVX）単位に、**どこか（1箇所）を否定する。**

i）Sの否定	**No one** — loves — me.	誰も僕を愛さない。
ii）Vの否定	You — **don't eat** — much.	あまり食べないんだね。
iii）Xの否定	You — 'll get — **nowhere.**	それじゃ結果は出まい。

大原則はii）の方法です。すなわち、主語に続く述語の頭に否定の印をしっかり付ける。こうすることで、話を聞く側は、あとに続くメッセージが否定の文脈で語られていることが判別できる。聞き手に、肯定か否定か、早くその区別を与えることが、英語では求められます。

どちらの英語を選びますか？

その考え、うまくないと思います。

a）I think that's **not** a good idea.

b）I **don't** think that's a good idea.

これは、b）を選んでください。I think that ... とやると、「ああそう思うんだ」と肯定の文脈に相手を引き入れてしまう。その後でthat's not a good idea. とnotの「後出し」をするのは、コミュニケーションの作法からすると、よろしくありません。

もう一点。日本語を生きている私たちは、否定の文脈でも「ない」を明言せず、無言で伝えようとします。「行かないの？」「うん（いかない）」「もちろん（いかない）」。こういう場合も英語では、notを落としません。

（　　　）に入る1語は？

"Your husband isn't coming?"	ダンナ、来ないの？
"Of course (　　　)"	もちろん。
"Why (　　　)?"	どうして？

否定の文脈で「もちろん」と言うときには、Of course not. とnot込みで表現する。同じように、否定の文脈で「どうして？」と聞くには、"Why?" で止めずに "Why not?" と言います。否定の節を省略するときも、notだけは残してYes／Noの区別を明快に保つのが英語流なんですね。

CamScannerでスキャン

1-3

英語の記述は命題に収まろうとする。

命題（proposition）とは、論理学で「真偽を問いうる有意な文」などと定義されます。主語と述語と肯定／否定の要素を持つ文には、正しいか、誤っているかを問う能力が備わっています。

i) The durian { is / ~~isn't~~ } the smelliest fruit.

ドリアンは一番臭いフルーツである。

ii) I { opened / ~~didn't open~~ } the closet, and { found / ~~didn't find~~ } the dead body there.

私はクローゼットを開け、そこに死体を見つけた。

述語動詞は肯定形か否定形のどちらかを取るしかなく、基本的にその中間はありません。「である」か「でない」か、「した」か「しなかった」か、それを振り分けることで、i）では客観的な観察を事実として述べる文が生まれ、ii）でも、やはり事実にこだわる「証言」が成立する。

英語文は一般に直説法[*1]で書かれます。日本語でも科学的な真理や、証言・調書などは、このモードで語られますが、興味深いことに、それと同じモードの文で、英語は日常会話を営むのです。

＊1　「直説法」とは、事実をストレートに述べるときの心のモードを言う。事実ではないことを意識して言う「仮想法」（[1-4] 参照）と対照的な関係にある。

日本語はどうでしょう。文が事実や真実を語るという基本は違いません。ただ実際問題として、命題のような文で話をすることはほとんどありません。最も基本的な「AはBだ」や「AはBした」にしてみても、そのまま言ったのでは、宣言（上位者による一方的通達）のように聞こえてしまう。関係性を優先させる日本語の対話者は、「AはBだよね」とか「これ、Bなんだけど」と文尾の調節機能を使って、正しさを主張するコンテクストから発話を救い出そうとするわけです。

(A)と(B)を比べてみてください。(B)は(A)を翻訳したものです。

(A) "That's why I'm not so sure if Keiko is really happy."
(B)「それで私、恵子が本当は幸せじゃないんじゃないかと思って」。

事実がよく分からない中で、自分の推測を伝える文ですね。そうした曖昧なメッセージを作るにも、英語は直説法——事実を述べる動詞の形——を採って、事の正否を決めていくように話されます。

That is why.　（それが理由である）　と is で断定し、
I'm not so sure　（私に確信はない）　と not で否定し
if Keiko is really happy. と、状況を二択化し、事実は分からないにもかかわらず is によって特定する。これが英語のやり方です。

日本語の話者も、同じ考えを表現しようとはしています。(B) は (A) の翻訳として、内容的に過不足はない。でも容れ物（フレーム）がどうも同じではありません。どう違うのでしょう。

文構造（語の順番）が関係するようです。

「私、恵子が本当は幸せじゃないんじゃないかと思って」で、受け手は実質上、文が終わったとみなします。「いる」と肯定の断定はしていませんが「いない」が続かないことは確信が持てる。でも、そこに英語的な「歯切れ」はありません。英語が if に続けて Keiko is really happy という直説法の——

「である」の気持ちがこもった——文を置くときのような言い切り感はありません。

同じく英語の"am not sure"に対応する「じゃないんじゃないかと思っ(て)」にも、「事実そうだ」ということを告げる気持ちは入っていない。つまりこの日本語の発言は、〈この言は正しい〉というコミュニケーションの枠内にない、というか、「私は事実を言っている」という姿勢をできるだけ見せないようにしている。

この迂回した文を「直説法による叙述文」と呼ぶのは、誰しもためらうでしょう。それでも、(B)はすんなり通じる日本語です。

人と話すとき、シンプルな事実を積み上げて整然と語るのは、多くの日本人にとって楽なことではありません。これはコミュニケーションに対する私たちの姿勢の問題でもありますが、それを許す日本語の構造(または構造の欠如)の問題でもあります。前章で、自転車とブランコの喩えを持ち出しました[0-1]。あれはどういう意味だったのか、遅ればせながら説明しましょう。

英語は前に進めないと倒れてしまう構造をしています。SVOの形でつながって、SもOもいくらでも長くできるのであれば、途中で文を漕ぐのを止めるわけにはいきません。一方の日本語文は、連体形や連用形や「てにをは」によって細部を接続し、「ね」だとか「さ」だとかで間合いをとって、最後に述語で締めればいいので、その分安定がいいのです。方向を考えずに漕いでいても倒れない。どこからでも適当に言い始めて、最後にまとまれば、それでよい。

次の日本語の内容を、英語で手際よく語ってみてください。

きのうね、教授の部屋に、アポなかったんだけど、行ってみたらさ、ドアに「在室」表示があったのね、それでドアをノックしてみたんだけど、返事がないんで、諦めかけたら、トイレの入り口から先生が出てくるのが見えた。それで会えたんだけど、ほんと、ラッキーだったよ。

解答例 I was really lucky to be able to see my professor yesterday when I visited his office without an appointment. When I knocked his door there was no answer, though the sign on the door said he was in. I was beginning to lose hope, but then I saw the professor coming out from the men's room.

この英語は、学生のくだけた会話として整理されすぎているかもしれませんが、そこは大目に見てください。どうでしょう。日本語でも「僕は昨日、運良く教授に会えたよ」と言ってから事の経緯を語れば、事実の報告としてだいぶスッキリします。しかし、これは日本語の特徴でもありコミュニケーション文化の特徴でもあることですが、私たちの会話は、事実をキッパリ言い切ることに消極的です。理詰めの発言に対して「押しが強い」とか「慎みに欠ける」とか「偉そう」とかネガティブに見てしまう傾向があります。

その姿勢を切り替えるために、**英語の直説法は、事実を並べて叙述するためのものだ**と自分に言い聞かせることは有効です。前述の解答例の中で、直説法の動詞はwas, visited, knocked, was, said, was, was, saw.と8回出てきました。それらはみな、肯定を否定から切り分けてストレートでクリアーな物言いをするためのものです。**そうしたストレート・トークの上に信頼関係を築いていく練習が英語コミュニケーションでは大切になります。**

CamScannerでスキャン

1-4

事実でない想いは、直説法では語らない。



日本語には直説法がない、とまでは言えませんが、英語の直説法の持つ**事実の響きを持たない**、とは言えるでしょう。次の2つの文を比較してください。

The earth takes about 365 days every time it orbits around the sun.
地球が太陽を一周するたびに約365日かかるのです。

英語文では、動詞takesが直説法現在であることが、この文全体が事実の表明であることを伝えます。日本語の下線部に「これは事実だ」というメッセージは付いているでしょうか？　いませんね。「のです」という終辞に行き着いてはじめて断定が成立するのだと思います。

英語のスピーカーは、話しながら「これは事実だ」とか「事実と決まったことではない」という、わりとハッキリした自覚があって、事実でないことを述べるとき、直説法から別の「法」に切り替えます。
私たちはそれを一般に「仮定法」として習いますが、ここでは**「仮にそう想ってみる法」という意味で「仮想法」**と呼ぶことにしましょう。

Ifを使えば「仮定」したことになりますが、その想いが「仮想」であるとは限りません。

If you leave, I won't follow you.
あなたが出て行っても、私、ついていきませんからね。

CamScannerでスキャン

これは今の現実の気持ちを述べる文で、「仮想」の要素は入りません。

古英語[*2]の時代には、簡単な仮定も仮想法で表したらしい。間接話法の従属節（他人から聞いた内容）でさえ、仮想法を使ったようです。事実と断定できないというのがその理由なのでしょう。古代のアングロ＝サクソン人は遠慮深かったのか、現代語に訳すとこんな言い方をしていました。

They said that he *were* a good king.

現代の英米人は、伝聞したことも、仮定したことも、ほとんど直説法のモードで喋りますが、ただ「もしも」の想いが強まると、

Suppose you *left* here,　　あなたがここを出て行くとしても

と、心のモードが変化する[*3]。すなわち動詞が直説法のleaveから仮想法のleftに変化する。続く節も仮想法が保たれて、

it *couldn't* hurt me.　　それで私が傷つくなんてありえない。

となります。仮想法を英語で言うとsubjunctive mood。subjunctiveは、文法用語としてのみ使われる単語です。

「仮想法」のモードに入ったら「仮にそう想ってみている」と解釈してください。「あなたが家にいた」という事実があって、それに反する想いを述べるとき、叙実のモードから切り換えてこう言うわけです。

＊2　古英語は、ブリテン島に住み着いたアングロ＝サクソン人が、12世紀半ば位まで話していた言語。11世紀後半、フランス語系の言葉を話すノルマン人の王朝が成立して以来、両方の言語要素が融合していくのだが、それ以前の、より純粋なゲルマン系の言語である。

＊3　この「モード」のことを、英文法ではmoodと称し「法」と訳している。これはラテン語に由来する用語で、英語のmodeと語源が同じだが、日常語のmoodとは別系統の言葉である。

If you *had* gone away, I *would* have felt much better.
あなたがいなくなっていたら、ずっと気分がよかったでしょうに。

仮想法のポイントは、直説法が前提とする事実の縛りから逃れることにあります。

I wish I *was* somebody else but me.
自分以外の誰か別人だったらいいのに。

wasが使われるのは、英語はamに、「現実として〜である」という強い意味を与えてしまうので、wish（希望的に想う）のあとでは齟齬をきたす。だからamでない形に逃がしてやる。これがI wish I was. という、ずらしのレトリック。wasよりもさらにはっきりamから遠い感じのするwereを使って、I wish I wereと言うと「反実」の色合いがさらに強くなる[*4]。

If I *were* you, I *wouldn't* talk like that.
もし私（があなた）なら、あんなふうには話さない。

If I were youは相手をやんわりたしなめる、常套的なフレーズです。人にアドバイスをするときは、直のモードではなく、仮想の中でする。すなわち、wereを使って叙実を逃れ、wouldを使って、仮想上の意図にすぎないことを示す。ですから、これは一種の敬語表現と言えるでしょう。

今回のポイントをまとめます。

＊4　英語史に詳しい人に、この説明はたぶん受け入れられないでしょう。wereは仮想法過去でwasは直説法過去と決まっていたからです。しかし、現代口語の用法は変わってきました。その、ほとんど無意識の心理を説明するのに、敢えてこういう説明をしました。

CamScannerでスキャン

I jumped.	跳んだぞ。	indicative ：直説法
I would have jumped.	跳んだのになあ。	subjunctive：仮想法

これだけです。仮想法を使いこなす近道は、実は直説法に親しむこと。直説法に「ゲンジツ感」を感じられるようになれば、ゲンジツ感を出してはまずいところは、仮想法で逃げるといいことに気づくでしょう。

直説法の動詞／助動詞に下線を付しなさい。

i）If you saw me, why didn't you call me?

ii）I had lived here until I went to college in Tokyo.

引っかけ問題でした。すべて事実を述べる法です。

i）は saw と didn't（または did）に下線。あなたが（事実）私を見たのだったら、(事実として）私を呼ばなかったのはなぜ？という意味です。

ii）は had と went に下線。私はそこに（実際）住んでいた。東京の大学に(現実に）行くまで。

CamScannerでスキャン

1-5

助動詞は現実の不確かさに文を合わせる。

神が創りたもうた世界は真実一路ですが、知力にも、魂のクオリティーにも限界がある人間たちの生きる世界は、疑念と邪道に満ちています。過去のことは忘れられ、先のことは分からない。

Whatever will be, will be.

古くてすみません。ドリス・デイ（それともペギー葉山？）でおなじみ（？）の「ケセラセラ」(1956)。題名の〈Que Sera Sera〉は怪しげなスペイン語ですが（Lo que será será. ならOKらしい）、英語は正式です。Whatever will beが主語で、will beが述語。

「何であれ、beたらんとする状況は、beたらんとする」？
「〈であろうこと〉はみな、であろう」？

このwillは意志の助動詞ですが、主語は私ではありません。こちらの知ったことではないすべて（Whatever）が勝手にそうなること。要するに「成るは成る」ということです。生々流転する中で、実現されるべきことが実現される。すべては運命の流れ、私たちには分からない。ケセラセラ。
全知全能の神は違います。きっとこう言うでしょう。

Whatever is, is.	あるものはある
Whatever I created, is.	われの創りしものはある

CamScannerでスキャン

現在形の真実が、100パーセントの確かさであるのが神の世界。人の世界は違います。不確かさの中で、判断しながら生きていく他はない。will, shall, can, may, must などの「法助動詞」に頼るしかありません[*5]。

直説法現在は、客観的に事実を言い切ってしまう性質があります。そこにたとえばcanを導入すると、文が、主観と可能性を許容するモードに切り替わるのです。

The world *is* a terrible place to live. この世は暮らすのに最悪だ。
But it *can* be a lot better. だが、ずっとよくなりうる。

事実の表明が話者の判断に変わりました。isによって動かぬ真実の中に捉えられていた世界が、canが入ることで可動性を得て、それとともに、動詞も変わりました。固定した事実を述べるisが、変化を許容するbeになりました。

事実を言い切ることに責任が付きまとうのはいずこも同じでしょうが、英語の場合、直説法による叙実文が命題と変わらぬ構造をしているうえに、SVで文を始めてしまうので、発話の意図を調節する機構が文尾にほとんど残されない。付加疑問文 (isn't it?) など、方法がないわけでもないのですが、英語はどうしても言い切りに走りがち。婉曲化の策に乏しい言語であることはたしかでしょう。

その代わりに、英語には強みがあって、それは助動詞の持ち駒です。論理的でコンパクトな、数少ない助動詞を、英語は直説法、仮想法の両方で揃えていて、そのため、それら1音節の語を動詞句に加えるだけで調節ができるのです。

＊5 「法助動詞」の「法」にあたる英語はmodal。「モード」に関する真正な助動詞はcan, could, may, might, must, shall, should, will, wouldの9つとされる。それ以外に文法機能を任うdo, have, beなどの助動詞があるとする。

CamScannerでスキャン

まずその論理性から見ていきましょう。

以下は往年のデンマークの言語学者オットー・イェスペルセンが『文法の原理』(1924) で示した分類によって法助動詞のはたらきを整理したものです。この「3つ揃い」で、あらゆる状況に論理的に対処できてしまうコンパクトな整然性を、英語は持っています。

全肯定モード	必然	It must be true.
部分否定のモード	可能 非不可能	It may be true. It may not be true. It can be true.
全否定のモード	不可能	It can't be true. It mustn't be true.

全肯定モード	命令	You must do it.
部分否定のモード	許可	You may do it. You can do it.
全否定のモード	禁止	You may not do it. You mustn't do it. You can't do it.

- mustは縛りの言葉。「必然」とは、神意である「真」への服従であり、それは他人の「命」の縛りにしても同じこと。「(し) なくてはならない」がmust、「あっては (しては) ならない」がmustn't。絶対的な縛りです。
- canは可能性があることを肯定的に言う言葉なので、否定のcannotは可能性の全否定になる。
- mayは分からなさに焦点があるので、may (かもしれない) とmay not (でないかもしれない) は同義です。

コトに対する場合 (It canなど) と、相手に対する場合 (You canなど) で、日本語訳は大きく変化しますが、must, may, canの基本の意味は変わりません。コトに対する用法を見ていきましょう。

CamScannerでスキャン

意味の等しいペアを線でつなぎなさい。

① 起こるわけないだろ。	•	•	（あ）It can happen.
② 起こるかもしれないよ。	•	•	（い）It may happen.
③ 起こらないとは言えない。	•	•	（う）It must happen.
④ 起こらずにはすまない。	•	•	（え）It will happen.
⑤ 起こるさ、起こるもんなんだ。	•	•	（お）It can't happen.

①と（お）、②と（い）、③（あ）、④（う）、⑤（え）が結べたでしょうか。実は②と③の日本語は、メッセージ内容としては同義ですかね？　一応ニュアンスの違いを訳し分けたつもりですが、(あ)と(い)はどちらでもいいことにしましょう。

新たにwillが加わりました。willは「意志」を表す語から転じた助動詞です。must, may, can が、変転する世界に対する心の構え(モード)——「きっと～だろう」「～かもしれない」「～ということもある」——の表現であるとすると、willは決定権が自分たちにあるかのように言うことばです。

このwillは未来時制をつくるなど、特別扱いされています。その資格がどこにあるのか、そもそもあるのか、次に検討してみましょう。

CamScannerでスキャン

1-6

willは現在形である。



名詞のwillは、「意志」の意味です。

Where there is will, there is a way.

「意志あるところに道は開ける」、「やる気を出せばやり方がわかる」。willはまた動詞としても使われます。その使用頻度は低いですが、「ING分詞」のwillingは積極的な意向を表し、be willing toの形でよく使われます。

I'm very willing to show you an example.
一例を喜んでお示ししましょう。

むかし、キリスト教国の人々は多分に神意と運命に支配されていました。永遠から来た魂が、永遠に還る と考えられて、天国が実在し、地上ははかない、出来損ないの世界と考えられていた。そして時間は、進歩よりむしろ退廃と結びついた。壊れたり、崩れたり、腐ったりするのが時間の向きであるかのように。

過去の人たちは、自分たちの主体的な動きをwillをもって語ることに、近代人ほど積極的でなかったようです。時の中を、定められた結果に向けて動くものは、shallを用いて述べるのが普通でした。willが「意図する」だとすると、shallは語源的に「負う（owe）」という意味です。いまこうであるのは仮の（借りてきた）姿で、本来行き着くべきところがあるという感覚。そこへ向かうことをI shall be there. と表現したわけです。現代でも

CamScannerでスキャン

We will overcome	我らは勝利するぞ	（意志）
We shall overcome.	我らの勝利は動かない	（運命）

という用法の違いに、過去の区別が残っています。およそ昭和のオリンピックの頃までは、日本の学校でも、shallは「単純未来」、willは「意志未来」と教えていました。しかし前回のドリス・デイのヒット曲からも想像されるとおり、当時すでに、イギリスの保守的な人たちを除いて、今後のことは何でもwill beですますようになっていたのでしょう。

I will be twenty tomorrow.

という表現は、本来は、天の定めを自分の意志で動かすようなおこがましさがあったはずなのに、それが消えた。そしてwillを、まるで「未来時制の印」にように感じる人が増えていった。20世紀は、未来を意図的なプロジェクトの対象としてばかり見るようになった時代です。

そうしてshallの用例が廃れました。未来を「運命」に委ねる思考モードは衰弱したのです。

それでも二人一緒に何かをしようというときに、Shall we dance? と言うと、出来事の自然な流れを問うかのような、きれいな勧誘になりますね。もちろん、Are we gonna dance? でも、Can we dance now? でも、May I? だけでもいい。ただDo we dance? はまずいのです。日本語の「踊りますか？」は意志を尋ねることができても、英語のdoにその機能はありません。Doが伝えるのは客観的な事実。踊るのか、踊らないのか。その赤裸々な、白黒をつけるやり取りを逃れるために、英語では仮想法の助動詞を使う、逡巡の表現が発達したのです。たとえばこのように。

If I *could* dance with you ...	もし一緒に踊っていただけたら……
Would you mind ... ?	よろしければ （踊っていただけませんか？）

CamScannerでスキャン

さて、willを使うと未来形になる、と考えられています。英語の動詞は、過去形には活用するけれども、未来形の活用はありません。そこで、willを付けた形を「未来形」と呼ぼう、という約束事をつくったのでしょう。ラテン語やその子孫（フランス語、スペイン語、イタリア語など）の言語では、動詞が未来にも活用するので、それに合わせて英語でも未来形というものを決めておくと、教育上便利だったと察せられます。

時とは、永遠の過去から現在を経て永劫の未来へ続いている、と私たちは考えます。しかし時をイメージするときに数直線を持ち出す習性は、人類史の中で必ずしも当たり前のことではありません。昼夜も、季節も、むしろ「巡る」ものです。その感覚を度外視した、抽象的な直線で時を考える習慣が広まったのは、近代英語の成立以後のことだったようです。ニュートン物理学のtという単位が登場したのは、17世紀になってからのことでした。

過去から未来へのタイムラインを描くと、時間を正しく捉えたつもりになるのは、私たち近代人の習性にすぎません。太古の世界観を宿しているはずのコトバの世界を語るのに、それが正しい習性なのかどうか、微妙です。

日本語に未来形はあるでしょうか。「パーティは7時に始まります」と3時に言っても、全然問題ないところからすると、現在と未来の峻別に、日本語の動詞句は関心を抱かないようです。そして、その点は、英語でも同じ。

i) The party starts at seven.　　とも言えば
ii) The party will start at seven.　とも言う。

i）は事実としての言い方。ii）はパーティの意向をいう言い方。えっ、パーティに意向があるかって？　ないですね。「もしパーティに魂があったなら、7時に始まろうとしますよ」というわけではない。ii）は単に、「未だ事実になっていないので、**事実の表明と受けとられないためにwillを挟んだ**」と解釈するのが適切でしょう。

前回の最後に掲げたエクササイズの(あ)〜(お)を、もう一度ご覧ください。すべて、これから起こることを予測したり推断したりする言い方です。言ってしまえば、全部が未来形。そのうち、話者の主観が一番入りにくい言い方は？

canでもmayでもmustでもありません。

willを使ったIt will happen.が最も客観的に響く。こっちでどう推測しようと関係ない、それは――それ自体のwillによって？――起こる。「それは起ころうとする」、これがIt will happen.の直訳です。

もちろん「起ころうとする」は言い過ぎです。willを強く言わないとその意味は出てきません。少なくとも前景化しません。

ではwillが後景に引っ込んだIt'll happen.は何を表現するのだろう。canやmustやmayではなく、willを使うと話者の判断はこもらなくなって、**未来に起こることを、あたかも出来事自体の動きに任せて言うことができる。そういう、いわば「出来事まかせの構え(心のモード)」を法助動詞willは醸し出すというわけです。**

こうして三人称を主語にしたwillは、外界の今後の動きや傾向を、客観化して表現する物言いになりました。

The train will arrive at five.	汽車は5時に着くだろう。
It will rain tomorrow.	明日は雨が降るだろう。

たしかにwillを伴うと「未来」を語っているようになる。でも、これらの文が法助動詞willの現在形を使った推量文であることに変わりはありません。

まとめ

英語の法助動詞は、結局のところ、話者の姿勢や判断を示すもので、willにしても客観的な時制の指標となるものではない。

CamScannerでスキャン

1-7

なぜwillが未来形に抜擢されたか。

外国語を学ぶときに、できるだけ避けたいのは、そもそも分かれていない概念に日本語を当てて分割してしまうことです。

設問に答えなさい。

willには、未来を表す意味と、そうでない意味があります。そしてwillの表す未来には「〜だろう」と「〜するつもりだ」の2つ意味があります。前者を「単純未来」、後者を「意志未来」と呼びます。さて、次の文のwillはどちらでしょう。

He will move to Osaka next month.

これは問が間違ってます。「来月引っ越すつもりだ」ということなのか、それとも単に「引っ越すだろう」ということなのか、AなのかBなのか、どっちかを選びなさい、と生徒に強いるのはよくありません。それは英語に収まろうとする心をいじる行為です。

ちょっと厳しすぎますか？　まあ、日本語に収めて英語を理解することも、最初のうちは仕方ないかもしれない。でも「補助輪」はあくまでも補助輪。できるだけ早く外してあげた方が、コトバにうまく乗れるようになります。

上の文の訳として「彼は来月、大阪に引っ越します」がベストでしょう。これを、叙実法現在を使って、He moves ... と言ってしまうと、彼に関する事実——性格や習慣——をいう言い方になってしまうので、一度だけの出来事には使えません。

CamScannerでスキャン

そこで助動詞willの登場となるのですが、He will move ... というからには、その移動は彼の意図の下で起こると解釈して間違いにはなりません。

willについて、英語教育の専門家たちはどのように捉えているでしょう？　単語の整理がクレバーな『ウィズダム英和辞典』（第4版）を見ると、【未来】【推量】【習性】という区分けになっていて、【未来】に関する記述が最も長く、【推量】と【習性】は「未来」のカテゴリーにはどうみても押し込められない用例を収めています。

大西泰斗／ポール・マクベイ著『一億人の英文法』（2011）は、助動詞willの用法をこのようにまとめました。

A：～だろう（予測）、B：するものだ（法則・習慣）、C：するよ（意志）。

「未来」というレッテルを外すだけで、これだけ分かりがよくなるのかと感心します。そして「B：するものだ」の説明に、

○willの過去形wouldを使ったら「過去の習慣（したものだった）」

と加えている。日本の教室では、wouldに「過去の習慣」を表す特別な用法があるかのように教えることが多いけれども、それもちゃんとwillの根っこの意味と結ばれているわけです。

このことは、実は斎藤秀三郎の*Practical English Grammar*（1898–99）にすでに書いてありました。邦訳（『実用英文典』2015, 訳述 中村捷）には、「willが含意する意欲（Willingness）・快諾（Readiness）の意味から、頻繁に起こる繰り返し、使用、習慣の意味を表すようになる」として、それに対応するwouldの用例を参照させています。こんな完成度の高い文法書を日本人は、明治の時代に何と英語で書いていたんですね。

ただ、私たちが学ぶ「過去の習慣」という説明もやや重たすぎるところがあって、実際はそのような意識もなく使われます。

行動を表す動詞は、過去時制では、単発的な出来事を表します。たとえば

She visited her aunt. と言うと、ある日ある時叔母さんを訪ねました、ということになる。それを避けて、訪ねるのがいつものことだったというときには、そこに彼女の気持ち（意向）を介在させて、"She would visit her aunt." と言うのです。

	現在時制	過去時制
単発的	She **will** visit her today.	She visited her that day.
習慣的	She often visits her.	She **would** often visit her.

表をごらんになると、will と would のつながりに一種のねじれがあることに気づくでしょう。will の現在形は、今現在の生きた思いを伝えますが、「～しよう」と思ってする行動は、過去時制で語る物語の中では、単に「～しました」になってしまいます。

一方、現在の習慣を言うのには、単純な現在形（I do）を用いますが、これを過去時制に入れると、I would の付いた表現になるのです。

	今の胸のうち	物語にすると
単発的	今日、しよう (will do)	その日しました (did)
習慣的	よくします (do)	よくしました (would do)

1-8

would, could, might, shouldを人は好む。

古英語にはwillanという動詞がありました。古代人は、近代人のようにエゴが強くなかったのでしょう。この語も「意図する」ではなく、「こうであってほしい」と望むwishの意味で使われたようです。

willanの活用は、一人称単数現在がwille、過去がwoldeでした。仮想法の活用も同じくwille, wolde。現代のwouldという語はこのwoldeから派生しました。つまりwouldはwillの直説法過去でもあり、同時に仮想法の形でもあるわけです。

wouldは助動詞となって、動詞の原形（原形不定詞）をしたがえるようになりました。意味は昔からさして変わらず、仮想された希望を表します。

i）I wouldn't say that.　（私なら）そうは言い（たくあり）ません。
ii）Would you mind?　（こうしたとしても）お気に障りませんか？

日本語、訳しすぎですね。どちらの常套句も「仮想」のムードはそれほど感じられません。本来はあるにせよ、すり切れてしまった。それでもwillやwon'tを使う場合と、はっきり意味は異なります。

i）の助動詞をwon'tに代えて、I won't say that.と言うと「秘密だから言えない」とか「大丈夫、言わないから」という表現になる。

ii）はWill you mind?とはまず聞かない。「嫌がるつもりですか」はないでしょう。機嫌を損ねるのは、こちらのしたことの結果であり、相手の意志や意向ではありません。直説法で尋ねるなら、Do you mind?になります。「おいやですか」と言いながら、Noの返事を想定して、こちらのしたいこと

CamScannerでスキャン

をするのが、"Would you mind?" の用法。カジュアルなおうかがいの基本表現です。

Wouldの感覚がつかめたところで、might についても見ておきましょう。mayはそれ自体が不確かさの表明だから、仮想形 might を使う必要は特にないようにも思えるのですが、実際はよく使われるところを見ると、そもそも断定を避けるために使われる法助動詞は、仮想の響きをまといたがるのでしょう。

エクササイズで確かめてください。

mightとmayのどちらが入るか。

(1) You (　　　) think it's simple, but actually it isn't.
簡単だと思うかもしれないけど、実際は違うのだ。

(2) You (　　　) like it.
(やってみたら) 面白いかもしれない。

(3) You (　　　) want to give it a try.
(楽しめそうだよ) やってみたら？

3問とも「どちらも正解」です。ただし学習するなら、mightで覚えたい。どれもmightの持つ仄(ほの)かな仮想感覚が実感できる好例だからです。You mayと言うと、文脈によって、人に向かって許可を出すような響きになってしまうことも、mightが好まれる一因かもしれません。

Youを主語にして使いにくいという点は、mustやcanも同じです。ただし尻込みしていると、次のページのi)やii)のような、とても使い勝手のよい表現を失うことになります。

Shouldにも目配りが必要でしょう。shall (古英語sceal：借りがある) の仮想法に由来するshouldは、「当然〜だ」、「〜するのが筋だ」という意味合い

CamScannerでスキャン

で使います。「見つからないとおかしい」を、こう表現するわけです——

You should be able to find it.

次の表現を英語で言うとき、どんな助動詞を使うのがよいか。

i) そんなにたくさんいただかなくても……
You (a. must ／ b. mustn't) be so generous.

ii) 彼が嘘を言ってるはずはない。
He (a. can't ／ b. wouldn't) be telling a lie.

iii) やろうと思えばできるけど、やる気にならない。
I could do it if I (a. should ／ b. would), but I don't feel like doing it.

iv) 普通はそんなこと起こらないよね。
That (a. shouldn't ／ b. might not) happen.

v) 俺、こんなことしていていいんだろうか。
I (a. shouldn't ／ b. wouldn't) be doing things like this.

1

英語文は真実を縛るので、その雰囲気から逃げる方法がいろいろ用意されていること。

i)には、「そんなに気前よくしてはいけないでしょう」という禁止の表現を使います。「ダメ」と言って感謝を伝える。答え：b

ii)の「はずはない」は、可能性ゼロ、ということでcan'tが正解。wouldn'tだと、多くの場合「彼は嘘はついていないでしょう」という信頼の表明になります。答え：a

iii) if I wouldは「もしやろうとする意志があるなら」。if I shouldは「やるべきなら」。答え：b

iv) shouldn't happen は「起こらないのが筋」——「ふつう起こらない」ということです。might not happenは「起こらないかもしれない」。答え：a

v)「していていいのか」と自分の「すべき」ことを問うのは、助動詞should の働きです。wouldn'tだと、「状況が違えばこんなことはしていなかった」。ある種の言い逃れにも使えます。答え：a

CamScannerでスキャン

1-9

後悔とは、済んだことを仮想法で思うこと。



筆者の若い頃、「ある愛の詩」(*Love Story*, 1970)という映画がヒットして、「愛とは決して後悔しないこと」というキャッチフレーズが大勢の人の記憶に刻まれました。映画のシーンでは、"Love means never having to say you're sorry." という台詞が聞かれます。

「愛」と「後悔」は正反対――という考えは間違っていないでしょう。「後悔」は過去にしてしまったことを否定して、「しなければよかった」と思うこと。後悔とは、いつまでもNoを引きずること。一方、ロマンチックな「愛」は、全包括的なYesです。

というか、コトバが世界を肯定か否定かのどちらかに振り分けることによって思考を支えるのだとするなら、YesもNoも、I'm sorry.もなしにして、全部抱きしめてしまうのが愛である――と、「ある愛の詩」は教えているようです。「愛にコトバはいらない」だけでなく、愛はコトバを破壊する、と。

コトバは、ああでもないこうでもないと、逡巡します。「ああもできた、こうすべきだった、あれはまずかった、ああするしかなかったけど」と。

i) I could have done that.　　やればできたんだけど。
ii) I shouldn't have been so careless.　　あんなドジじゃだめだよな。

もし i) が I could do that.、ii) が I shouldn't be careless. であったなら、それぞれ「やればできる (仮想法)」「不注意は避けないといけない」ということですが、失敗が現実になったら、そうは言えません。could や should の後に、「完了 (すんでしまったこと) の印」を付けて could have done, shouldn't

have beenと言わざるをえない。後悔に浸るしかありません。

日本語に合致する方を選びなさい。

(1) 彼がやったんじゃないかも。
He (can't ／ may not) have done it.

(2) 部屋に入れたはずがないから。
He (can't ／ may not) have entered the room.

(3) 誰が盗もうなんて思うかしら？
Who (would ／ wouldn't) have thought of stealing it?

(4) 誰だって思うでしょ。
Who (would ／ wouldn't) ?

(5) ジャックに違いないわ。彼ならジルを騙(だま)せたかもしれないし。
It (must ／ couldn't) have been Jack.
He (should ／ might) have deceived Jill.

(1) 正解はmay not。"can't have done it"は「やれた可能性がない」。

(2) 正解はcan't.。may not have enteredは「入らなかったかもしれない」

(3) と (4) は、would, wouldn'tの順です。Who wouldn't? (誰だって思う［する］でしょ) ── 使えるようになってください。

(5) 正解はmustとmight。couldn't have been Jackは真反対で「ジャックがやったはずはない」、should have deceived Jillは「ジルを騙すべきだった」です。

「might have done」にしろ「would have done」にしろ、didの「叙実」を逃れて「仮想」を広げるモードです。一方、「must have done」に仮想の要素はありません。mustは「そうあるしかない」必然を言うのですから仮想法の形はありません。

CamScannerでスキャン

1-10

Doは事実をたたき込む。

この章では、Yes / No の意味から入って、英語の文が基本的に直説法による叙実という、真偽にこだわるスタイルを持つことを指摘したうえで、直説法が伝えてしまう赤裸々な事実性を排除したり、丸く収めたりする法助動詞や仮想法について概観してきました。

最後に、事実性を押し立てる助動詞 do について考えてみましょう。

do (does, did) は仮想法のムードを追い払い、直説法（する／した）および命令法（しろ／して）の意味を強めます。

I didn't say that.

と言われて、「それは違う、あなたは確かに言った」と主張する場合は

Yes, you **did**.

となり、この did を強調して発音します。

「気をつけて、ほんとによ」と念を押すには、

Do be careful.

疑問文と否定文に do が使われるのは、肯定か否定か、両者の違いを際立たせようとするからでしょう。尻上がりのイントネーションで

You want some ice cream?

と言えば、それだけで十分疑問文になるのに

Do you want some ice cream?

と do を最初に付けるのはなぜかと言えば、

Do you? or **Don't** you?

と判別を求める気持ちが入るからでしょう。

CamScannerでスキャン

これに対して No, I want not. ではなく、強意の do に not を付けて No, I **don't**. とすることは誰でも知っています。でも、昔の英語では I want not. のような言い方も普通でした。

今でも英国では、Have you a pen? No, I haven't. という英語を話す人たちがいる。——というか、筆者が1960年代初頭に中学校で使った教科書は、be動詞の他に、「have動詞」という括りがあって、その疑問文・否定文の作り方はbe動詞と同じだと教わりました。それが変わってきています。

これは、doの領分が広がっているということを意味するでしょうか。doは他人や外界に対する人間の行為を、ひっくるめて代表する動詞です。「代動詞」と呼ばれるのは、Yes I do. の do がほとんどすべての動詞の代用に使われるからです。

I see the sky. の see が「する」ことかどうかは疑問ですし、何かを知っているという knowing が doingの一種だとは思えませんが、語法上は see も know も do で代用する。「〜しなくてはならない」という意味の have to もそうで、do で代用するばかりか、前に do を付けて意味を強めたりもするのです。

> **Do** you really have to go?
> Yes, ma'am, I **do**. I **do** have to go now. I'm sorry.
> ほんとにどうしても行かないといけないんです。ごめんなさい。

さすがにbe動詞には関係しないだろうと思いきや、Do be careful.（ほんと、気をつけてよ）のように、命令文のbeはdoで強めます。

いやいや、do に屈しない動詞もあります。be そのものはだめですが、be動詞の直説法の現在形と過去形は、疑問にも否定にも強意にも do を受け付けません。

Are you? は Do you be? にならず、
I'm not は I don't be にならず、
He is safe. を強めると He *is* safe。He does be safe. にはなりません。

CamScannerでスキャン

beはdoの一部でも、am, are, is, was, wereは独立した領域を保っている。それらは「ただそこにある・いる」ことであって、動くことをしません。動く場合はbeを使います。

Jane is being nasty to her husband　　わざと意地悪にしている

日本語でも「している」となりますね。こうしてみると、英語は徹底してdoに傾く言葉なんだなあという気がします。言語は人間集団の心を映す鏡という側面があって、英語の歴史をたどっていけば、だんだんとdoの勢力が増し、それと共に、〈主語―他動詞―目的語〉の構文が人々の思考の大きな部分を占めていくようになる変化が起きたことが分かるに違いありません。私は存じませんが、きっとどこかの研究者がビッグデータを解析して、英語におけるエゴの肥大がいつの時代からどの程度顕著になったか、調べているのではないでしょうか。

この問題意識を持って、英語と日本語の比較を行っている興味深い本が、金谷武洋氏の『日本語文法の謎を解く――「ある」日本語と「する」英語』(2003)で、そこには、いま私が挙げた、英語のdoの活躍ぶりと共に、"日本語のスーパー動詞"と彼が呼ぶ「ある」の浸透ぶりが描かれています。

それによると日本語の「ある」は、意外なところに身を潜めている。「である」だけでなく「だ」や「た」の成立過程を見ても、もともとは「ある」を含んでいた。「止まる」「閉まる」「始まる」などの自動詞もみな「ある」で終わる。こうした、「ある」に頼って安定を得ようとする動きは、日本語のシステム全体の性質であるように私にも感じられます。

英語がdoが幅を利かせる方向へ進化してきたように見える中、逆に日本語は、「ある」がデーンと支配しているということなのでしょうか。それでも私たちの意識はグローバル化しつつあり、あれをしよう、これをしようと、忙しく動き回っている。たくさんの言葉に「する」を付けて「電子レンジでチンする」だの「計測をミスってタイムオーバーする」だの「それを頂くのはスルーする」だの、「する言語」に過度に染まろうとしているように見えるのはそのせいでしょうか……。いや、話が少し脱線しました。

CamScannerでスキャン

本書が日本語の文法にも目配りをしていることには理由があります。

(1) **日本語と英語との言語的距離が遠いので、英語のしくみの実際が伝わりにくいこと。**

しかしこれだけなら、頑張ってその距離を埋めていけばいいのです。問題は、

(2) **日本語の本性を忘れて英語に向かって背伸びをせざるを得なかった過去を持つこと**

です。

日本は幕末の開国後、世界の列強と肩を並べる存在になることを目指し、国民的な頑張りによってそれを果たした国です。西洋とは言語も文化も大きく違う中、西洋語を学び、西洋で流通する知的概念を日本語に移植すべく、たくさんの翻訳語を新たに作成し、英語の辞書にならって日本語の語彙を集め、品詞区分を行い、英文法風の構文論を日本語に当てはめて文法を記しました。日本の国が欧米との不平等条約に甘んじる中、政府の命を一身に受け、日本語が文化国家にふさわしい特徴を備え、けっして進化の遅れた言語ではないことを証明しようとした大槻文彦の奮闘人生は、高田宏著『言葉の海へ』(1978) にも感動的に綴られています。

日本語も西洋語と同じ基本的フォーマットの上にできていると信じ、また諸外国に信じさせることは、帝国主義国家としての体裁を整えつつあった明治・大正期の日本にとって、抜き差しならない、自尊の核だったのです。英語教育も、言語に優劣の差があるかのような環境の中で営まれました。日本語を西洋語の形に合うように叩いたり伸ばしたりしながら、そのよそ行きの日本語で、西洋語を解釈するという学習を積むほかなかったということです。その悲喜劇は、英語教育史の専門家、江利川春雄氏の『日本人は英語をどう学んできたか』(2008) などにも如実に書き込まれています。

帝国主義の時代における力のぶつかり合いに、東洋の異文化から参戦した日本にとって、それは避けられないことでした。しかし時代はもう違い

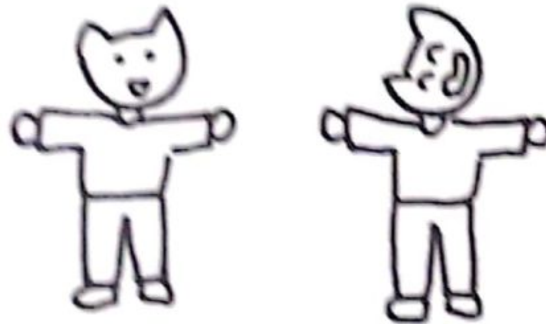
CamScannerでスキャン

ます。21世紀の英語学習環境はまるで違っています。

ナマの英語があふれる中、英語らしい言い方の語法についての説明もどんどん刷新されています。それはめでたいことですが、日本語と英語の構造的な違いを、経験的・感覚的につかめるよう、日本語を駆使して記述した大西泰斗／ポール・マクベイ共著の『ハートで感じる英文法』(2018)のようなアプローチの本は、まだあまりに少ない。できるだけ多くの人が、英語を理解する仕方(その型)のリフォームに名乗りを上げるといい。そう思って、非力ながらみなさんの認識を揺さぶる形で英語の基礎を説明する本を書いている次第です。では、次の章へ進みましょう。

第2章

英語は日本語とまるで違った相貌をしていること。



CamScannerでスキャン

2-1

英語文は日本語文とつくりが違う。



第2章では、英語の統語法（文成立のきまり）について、日本語と比べながら、実践的かつ感覚的に解明していこうと思います。ときどき議論が抽象的になりますが、実はたいへん基本的なお話です。

まず英語は、語順によって大きく意味を変える言語だということ。したがって統語の感覚を身につけることが、話す力・聞く力をつけるためにも重要です。

英語文は構成要素から成っている。

異なった品詞が組み合わさって文の構造を成している。

こう言うと、日本語だって同じでしょ？と言われるかもしれません。英語の構文がSVXから成っているとするなら、日本語はVが最後に来るSXVの構文を成す、と。

英語は	**S**	**V**	**X**
	I	am	a boy.
	He	read	a book.

（**S**は主語、**V**は述語動詞で、**X**は動詞を補う部分）

日本語は	**S**	**X**	**V**
	私は	少年（で）	ある。
	彼は	本（を）	読んだ。

このような比較は、ヨーロッパの諸言語を基準にしてそれに日本語を当てはめたもので、日本語本来の成り立ちにはなじまない、と私は考えます。

CamScannerでスキャン

なので、前掲の表を理解したからといって、実質的な実りはない。日本語ネイティブが英語を身につけたり、英語ネイティブが日本語を身につけたりする役には大して立たない、と考えます。

SVXのパターンが英語文を前に駆動するように、なにか直線的な連続が、日本語を駆動するわけではありません。

むずかしい言い方になりました。こう言い換えてみます。

日本語で思考している私たちは、基本的な思いがSVXの構造を成して湧き上がってくる感覚に慣れていません。英語にはそれがあるのです。(意味的にはかならずしも必要ない) 主語や動詞を付けないと落ち着かない性質を英語は持っています。

実例を並べてみましょう。

	述語	終辞
i)	寒い	φ。
ii)	雪(片)	だ。
iii)	舞ってる	よ。
iv)	きれい	だね。

	S—V	X
i)'	It's	cold.
ii)'	I see	snowflakes.
iii)'	They're	dancing.
iv)'	φ	So pretty.

日本語の基本文は、述語だけでもすみますが、ふつうは終辞を付けて安定させます。i)の「寒い」には終辞はありません(φは、「無」「カラッポ」を表す記号)。かつて、女性の少々甘えた感じを表すとき、「寒いわ」とか「寒いの」という言い方が使われました。これを英語にすると、どうなるでしょう。

a) I'm cold. か。 b) It's cold. か。

a)でしょうね。この女性は自分のことを言っています。こう言われて「寒いね」と答える場合はb)の言い方になるでしょう。It's cold, isn't it?

i)は「形容詞文」、ii)は「名詞文」、iii)は「動詞文」ですが、どれも終辞の付き方に違いはありません。iv)の「きれい」の品詞は何でしょう？　専門

家も一致していません。「きれいだ」を形容動詞として、「ね」だけを終辞とすべきだという人もいます。いわゆる「学校文法」を築いた橋本進吉（1882-1945）はそう考えました。「きれい」を形容詞と見なす人（「きれくない」と言う人）は少ないでしょうが（笑）、「きれい」を名詞とみなし、「だ」を断定の助動詞だと考える人は多そうです。

では、英語であれば、きっちり品詞は決まるかというと、そうもいきません。dancingはどうでしょう？　現在分詞と教わりましたが、それって動詞でしょうか。形容詞でしょうか。

同じ形が名詞にもなります。――Dancing is fun. という具合に。

しかし、iii)' は「それらはdancingである」と言っているわけではありません。They're dancing. とは、「舞っている」と形容される動的な状態にある、ということで、このdancingは意味の上でも動詞でありかつ形容詞であるというのが適切なようです。

それぞれの単語の品詞にこだわるのはやめて、カメラを引いて、構文全体を捉えてみましょう。

まず、iv)' には主語述語がありません。漠然とした「補語だけ」の文。これを「文」と呼ぶかどうか意見は割れそうです。

i)' と iii)' には、iv)' にはないIt'sやThey'reがあります。でもそれらは、主語や動詞と呼ぶには頼りない。どちらも1音節だし、アクセントもないし、いかにも存在感がない。日本語文の終辞の「だ」のような語が、頭に付いているくらいの感じで、iv)' のように取ってしまっても、文が崩れてしまうわけではありません。

実際 iii)' のThey're を取ってしまえば、前の文にくっついて、I see snowflakes dancing. とつながります。合体して別の文になります。

文のパーツは生き物のように、分離統合が可能なのです。どういう形をしていればくっつくのか、その感覚を磨いていきましょう。

2-2

日本語に「人称代名詞」はない。

日本語に代名詞はない——と言うと「え？」と思われるかもしれません。「私」「あなた」「彼」、どれも辞書を引けば「代名詞」となっています。しかし、それらの日本語は、固有名詞の代わりに使いはしても、やはり「呼称」であって、英語でいうpronounとは性格を異にします。

英語に代名詞があるのは、SVXという構造のSやXを埋めないと多くの場合「話にならない」からです。分かりきった主語や目的語でも、それを入れないと構文が崩れてしまって、意味が通じにくいのです。

英語の人称代名詞はみな1音節。その短さと機能性を、やたら長くて、関係のしがらみに巻かれた感じの日本語の人称と比べてください。

I	ワタクシは、オレは、ワガハイは、セッシャは、ウチは……
you	オマエは、ソチラサンは、アナタサマは、 （呼びかけとして）カノジョ、（男児に）ボク、 （老女に）オカアサン
she	（メディアで）ジョセイは、（被疑者に）オンナは……

一目瞭然。英語には人称（一人称、二人称、三人称の別）と数（単複の別）と男性女性無性の別（三人称の場合）を示すだけの、1音節の代名詞が、それぞれのカテゴリーごとに1つだけある。そのような「代名詞」を日本語は持っていません。

英語は、“I”も“you”も、“it”と同様の無色透明の記号です。日本語にそういう、記号的な人称代名詞はありません。「ユーは何しに日本へ？」と聞く

CamScannerでスキャン

人は、半分英語を使っているつもりかもしれませんが、その「ユー」は、小さい子を「ボク」と呼んだりするのと同様、きわめて日本的な、外国人をユーモラスに呼び分けるのに工夫された、呼称です。

逆に英語のyouは呼び名として使えません。名前のある人に向かって「You!」と呼びかけるのは失礼なこと。本来名前を呼ぶべき所を、大声でYou! と呼ぶのは「おまえとは親しくするつもりはない」ことを暗に伝える反友好的なメッセージになります。

日本語に記号的な人称代名詞はないと言いましたが、大野晋『日本語の文法を考える』(1978)にもあるように、契約書をかわすときの「甲は乙に……」という言葉遣いはそれに近いかもしれません。あれは、何のぬくもりもない、ただの記号です。目の前の相手にKoh、自分のことをOts、第三者をHehなどと呼んだら、その言語は、英語に近くなるのかとも思いますが、「コーはヘイが好きなんでしょ」なんて文はあんまり想像したくないです。（いえ、英語はぬくもりが欠けているということではありません。英語は英語で、それとは違うぬくもりを持っています）。

HeやSheの訳語である「彼」と「彼女」に、親密さが絡んだ時代がありました。「彼ったらね、こんなこと言うのよ」などという発話が、往年の日活映画ではよく聞かれました。そのスクリーンでは、ハキハキと民主的な良家の「彼女」も眩しく見えたものです。英文の訳語をまとうことにちょっとした高級感のあった時代……。すみません、脱線しました。

英語らしい代名詞の使い方に挑戦してみてください。

(　　　)に何を入れますか?

(1) バスの運転手に――「大学の門のところで停まりますか?」
Do (　　　) stop at the University Gate?

(2) そういう話ってあるかしら。
Do (　　　) ever hear such things?

(3) あの人たちはそういうふうに言うんです。
That's what (　　　) tell you.

(1) バスも停まりはしますが、運転手さんの意志で停まるのです。だからDoes this bus stop? と運転手さんに聞くのは、ある意味、失礼。またどこで停まるかは、会社が決めるので、Will you stop? とも聞けません。そうすると個人的な依頼になってしまう。きまりきった行動を聞くのですから、やっぱりDo you stop ...? でしょう。

動詞の現在形は事実や習慣を表す、というルール。よろしいでしょうか。

(2) 人々一般を指す語として、peopleも使えますが、会話をしている当人の身近な話にするには、weやyouを使います。主語にoneを使って、Does one ever hear ...? というのは英語としては正しくても、会話では、よそよそしくておかしく感じます。

(3) That's what they tell you.（彼らはそのように言う）は、文脈にもよりますが、「その言葉を真に受けちゃいけません」という意味合い。Theyは、weとの対比で、「仲間でない人たち」というニュアンスがよく付きまといます。「人の言うことは聞くもんだ」と言うときには、theyよりも広いpeopleを使って、You should hear what people say. などと言う方がいいでしょう。

まとめ

- **日本語に英語のような人称代名詞はない。構文上の必要性がないからだ。**
- **日本で「代名詞」と呼ばれるものは実は呼称なので、その選択に、私たちはしばしば気恥ずかしい思いをする。**
- **英語のyouは構文上必要とされる、単なる記号としての二人称代名詞であって、相手を指す呼び名ではない。**

2-3

SVOは強い力でつながれている。

英語の人称代名詞には、人称や性・数の他に「格」の違いがあります。I my me, you your you ... と、どなたも暗唱した記憶があるでしょう。

主語に立つときの形が「主格」、他動詞や前置詞の後に来るときの形が「目的格」でした。「目的」という語が紛らわしいのですが、objectとはsubject（主語）が向かい合う「対象」だと理解してください。行為の主体Sと対象Oを取り違えると大変なので、格変化によって明確に区別するのです。

I — eat.	私が食べる。
Eat — me.	私を食べろ。

主語に回るか、目的語になるかで、代名詞の形が変わるだけでなく、動詞を挟んだ位置関係も逆転する。「が」や「を」を付けて動詞につなぐ日本語は、句の順番に意味を左右されないけれども、英語はそうはいきません。

S	V	O	
主体	：行為・作用 →	対象	
I	beat	it.	それを私は打つ／負かす。
It	beats	me.	それは私を負かす（私はお手上げだ）。

動詞を挟んで、主語と対象を向かい合わせる。その際に、日本語のように、つなぎの助詞のような言葉を入れない。この方式が、英語構文の核でありキモであると申し上げておきましょう。

主語の作用が、後続の語に直接及んでいく——この様を英語でtransitiveと

いう形容詞で表します。「他動詞」は英語でtransitive verb。英語を話す人たちには、transitiveな作用の流れとして世界を見る習慣が染み付いています。その便利さに慣れていきましょう。

ところで、SVOの思考スタイルというものは、どのようにして英語やその類語の言語の骨組みとなったのか。これはまともな検証ができないことなので、想像をふくらませるしかありません。一つ言えることは、たとえば狩りによって暮らしを立てる人間が、状況を瞬間的に把握する図式として、transitiveな状況把握は効率がいい(汎用性が高い)だろうということ。次のような文を、最小の労力で言うのに適していることは確かです。

S	V	O
(Who)	(does)	(what)
You	chase	a rabbit.
I	catch	it.
We	eat	its meat.





主体　作用　対象

このSVOを鋳型にして物を思う。それが英語流です。

SVOのフォーマットで物を思う(世界を認識し想像する)というのは、現実には「主体―行為・作用―対象」の関係を成さない物事も、同じ形で思い描くということです。

日本語は自動詞の発想がふつうで「他動詞」というと「意図して〜する」という感じが強いのですが、他動詞＝transitive verbのtransitiveには「トランジットする」――つまりそこで止まらず先に行くという意味しかありません。Sから来てVの先へ行く意味の流れは、行為や作用の影響に留まらな

い。SVOの構文がつなぐ関係は、本当にいろいろです。

	S	V	O
i)	We	receive	lots of email.
ii)	The show	disappointed	us.
iii)	A few hours sleep	will revive	her.
iv)	Our school	has	the best swimming pool in town.

i)は、単に「私たちのところにメールがたくさん来る」ということで、「受け取り」の意志などない場合にもreceiveしたことになります。

ii)「ショーが私たちをガッカリさせた」というのは、「ショー」が何か作用を及ぼしたかのようですが、要するに「つまらなかった」(It was disappointing. We were disappointed.) ということ。こちらの反応の問題です。

iii)「数時間の眠りが彼女を生き返らせるだろう」と、「眠り」を彼女から切り離した作用因のように見ています。A few hours sleep (数時間の眠り) は主体というよりは条件でしょう。「あと数時間眠れば目覚めるだろう」という内容を、SVOの形式に押し当てて言う性癖(簡潔さの志向)が英語にあるということです。

iv) 僕らの学校は、町一番のプールを「持って」いる、というのも、日本語ではおかしな言い方です。haveは、何かがそこにあるという以上のことは伝えていないので、「学校に―ある―プールが」という構文でいいはずなのに、学校が主語になっています。そうすればSVOの形で言えるから。

これらの諸例からしても、SVOのSは、「主語」という言葉がイメージさせる以上のもの、Oも単なる「対象」に限らない広がりを持つものです。SVOの構文は、主語の動作や作用の波及を述べるに限らず、もっと広い事象や状態を文に収めるフォーマットだということですね。

CamScannerでスキャン

2-4

英語文は構造に収まりたがる。

では、英語は意味の宇宙の全体を、SVO風の構造で取り押さえることができているでしょうか。非常に大ざっぱに言えば、できていると言えそうです。[2-1]で検討した「寒い」も「雪だ」も「舞ってる」も「きれいだ」もすべて次の構造に収めて言うことができるのです。

	Sのようなもの	Vのようなもの	Oのようなもの
i)	It	is	cold.
ii)	I	see	snowflakes.
iii)	They	are	dancing.
iv)	This	is	so pretty.

ただ、もちろん、無理くり感は否めません。i)のItに中身はありません。φです。isも、言ってしまえば「形式動詞」。「寒い」というだけのことを言うのに、動詞が必要なわけでもないのに、構文上の理由から借り出されてきた。iii)とiv)の場合、主語の代名詞が、何かを「指して」はいますが、動詞はやっぱり形式を整えているにすぎません。

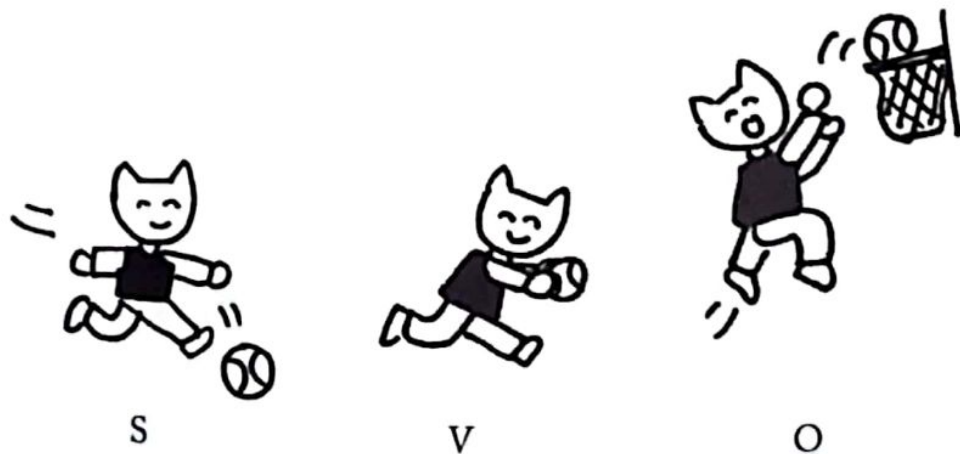
ii)はこれらと違って、正真正銘のSVOです。「雪片が見える」というだけのことですが、それを「私という存在者が、雪片という存在を、知覚している」という形にして述べています。日本語では、知覚の中心である「私」を言葉にして文中に入れることはしませんが、英語ではそれをする。「何かが見える」をI see something.という形式で表現するのです。

英語構文を学ぶとき、私たちは、ii)をSVO、i)、iii)、iv)をSVCに分類し

CamScannerでスキャン

ます。SVOとSVC、表面的にはよく似ていますが、We eat a rabbit. (SVO)とIt is good. (SVC)との間には、やはり大きな溝があるというべきでしょう。

SVOでは、V(動詞)を挟んで2つのモノ(コト)が対置する。この形が英語の基本形だと言いました。どのくらい基本的かというと、バスケットでドリブルからシュートに入るとき、右足→左足でステップして跳び上がる、そのくらい基本的です。英語を読んだり聞いたりするには、これに慣れ切っていないとスコアできません。



S　V　O

It's cold. やThis is so pretty. に、SVOの「スリー・ステップ感覚」はありません。このcoldやprettyは補語Cと呼ばれますが、そのCはcomplement(補完するもの)の略号です。This isだけだと完全(complete)な文にならない。prettyなどが来れば完全になる——という発想から、そう名づけられました。

でもどうなんでしょう。Cだけでも意味は通じます。i)は、"Whew, cold!"で十分。ただ、日本語の「寒い」は語尾の「い」からして形容詞であることが明らかですが、英語のcoldは、そういう訳にはいかない。「風邪」を含むいろいろなcoldがある中で、It'sが前に付くことで「寒い」の意味だと分かる。だからこのIt'sは構造を示して意味を定める働きをしている。そういう要素を英語文はほしがるんです。何を指しているわけでもない空虚なitが、coldの主語になることで、文意が安定するんですね。

英語で言ってみましょう。

だーれ？	Who (　　) (　　)?
わたし。	(　　) me.
心配そうね。何なの？	You look worried. What (　　) (　　)?
何でもないよ。	Oh, (　　) nothing.

答えは順に、Who is it? It's me. What is it? Oh, it's nothing。このis itやit'sに慣れるには、少々時間がかかるかもしれません。顔の見えない人に対しての「(そこにいるの) だーれ？」はWho is it? です。見知らぬ人に面と向かって言うWho are you?とは大違いです。

日本語は「寒い」の後をどう決めるかを意識します。「寒いね」「寒いわよ」「寒いです」「お寒うございます」。相手に向けて、文をどう言い切るか。「寒い」の前に〈何が〉を付けることにはこだわらず、一つの発言をどう着地させるかが、日本語にとっての問題なのです。

「寒い」の前に「〜は」を付けると、別な含意が生まれてしまうでしょう。

「ここは寒い。」──というのは「よそ」と比較して、客観的に判断した言い方です。物事の現実を捉えようとする「叙実文」になりますね。

「わたし (は)、寒いのよ。」──これには「あなたは寒くないかもしれないけど…」という含意が入ります。

この「ここ」や「わたし」は、述語「寒い」に対する主語ではないということ。「寒い。」はそれだけで完結した文であって、主語を欠いているわけではない。**日本語は主語を「省略する」のではなく、述語だけで安定する言語なのです。**

CamScannerでスキャン

同じ意味の表現を線で結んでください。

(1) あぁいやだ。	•	•	(あ) I got it.
(2) 了解です。	•	•	(い) I hate it.
(3) 本当だって。	•	•	(う) I can't go on.
(4) やってけない。	•	•	(え) I mean it.

上下一対のバツ字が描けましたか？　どれも英語圏では毎日のように接する表現です。get（得る）、hate（憎む）、go on（続ける）、mean（意味する）という直訳に、「～は～を」を付けてみても、左の日本語の意味を感じとるのは難しいでしょう。語ではなく句や文の意味を、イントネーションごと覚えるのが結局楽だということです。

このうちI can't go on.は目的語のない文ですが、それ以外は、みな「私」と「それ」との関係を表す〈SVO〉の形をしています。この**絶対頻出パターンに共鳴できるあなたになる**こと。これが私たちにとって、英語習得の第一の目標となります。

まとめ

- **英語文は既定の構文に収まり、文意は構文に依存する。**
- **英語文の基本の基本に、It's C.とSVOという2つのタイプがある。**
- **日本語は、述語だけで安定する。**

2-5

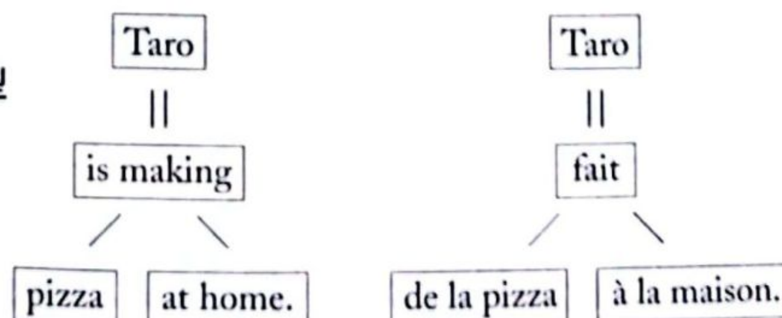
日本語は、背骨を持つ代わりに根を下ろす。



英語を学ぶとは、私たちにとって、**日本語から抜け出して英語に乗っかるということです。自転車やスケボーに乗るように、その上で形をくずさずやっていくということです。**日本語をブランコに喩えると、ブランコには独特の漕ぎ方があって、その感覚を私たちは幼児期に習得しました。英語に乗るとは、違ったバランスの感覚をつかむということです。「敵を知るには己を知れ」ということで、本書は日本語のつくりにも目を向けながら、英語の体感的攻略法を考えていくことにしましょう。

そこでまず、カナダのフランス語圏の大学で、長年日本語を教えてきた言語学者のアイデアを拝借します。金谷武洋『日本語に主語はいらない』(2002) に出てくる「盆栽型」の日本語の構文図。彼がこの図を英語やフランス語の「クリスマスツリー型」と対比させながら、日本語のしくみを教えると、ヨーロッパ系の言葉しか知らなかった学生たちの、日本語理解の効率が俄然よくなったそうです。

**英仏語は
クリスマスツリー型**



CamScannerでスキャン



クリスマスツリーの最上部、二重線の上に乗っているのが主語ですが、その主語が日本語にはありません。「太郎」は「が」を介して「作っている」と繋がっているけれども、「家」も「で」を介して、「ピザ」は「を」介して述語とつながっていて、「太郎」に特別なステイタスが与えられているわけでもない。それぞれが「補語」として「作っている」という述語の情報を補っているだけだ。それが日本語の構造である……。

金谷のような考え方は以前からあって、その始祖と見なされているのが、三上章（1903–71）です。彼は高校の数学の先生をしながら、1950年代からの独自研究によって、主語の必要を否定する日本語文法を体系づけました。日本語の「は」は主語ではなく「主題」を提示する。「が」は主語ではなく、主格補語をつくる。日本語は述語一本立てで、「は」や「が」は必要に応じて付ければよい仕組みになっている……。

三上の『象は鼻が長い』（1960）という本は話題になり、その後も読み継がれていきますが、私の見るところ「日本語に主語はない」という考えは、教育行政上問題がありすぎるのでしょう。また、国際的な集まりで日本語を語る場合も、「これがSで……」と言えた方が、たしかに簡便で理解されやすいようです。理由はともかく、日本の日本語アカデミシャンは「主語はある／あることにしよう」の立場を守ろうとしているふうに見受けられます。私は反対です。

前回のお話で、英語の構造を垣間見ました。動詞を挟んで、つなぎの語を入れずに、主語と対象（目的語）を向かい合わせる。そしてSVOという一本の軸を通す。

英文には背骨が一本通っている。日本語の体節構造は、これと違います。

CamScannerでスキャン

わたる君	リカちゃん	チョコ	（登場者）	節子さん		課長さん
＼	｜	／	（when）	＼	ゆうべ	／
が	に	を	（てにをは）	たら	｜	に
＼	｜	／		＼	｜	／
	あげ		（述語）		直言し	
	た		（時制）		ていた	
	らしい		（様態・伝聞）		みたい	
	の。		（関係性）		なのよ。	

まず人や物をステージに上げて、最後に述語で締めるというやり方。ステージに上げた人や物と、その述語との関係を示す「てにをは」の類が重要な働きをして、意味の構造を決めていく。いつ、どこで、だれが、何を、どうして、どのように。when, where, who, what, why, howの〈5W1H〉のうち必要な情報が出揃ったところで〈どうした〉の締めが来て、最後に締めの、助詞や助動詞の類がいろいろ付く。これらを一括して「終辞」と呼ぶことにします。

述語動詞に付くエンディングの言葉ぶりに注目してください。

「し・て・い・た・みたい・な・の・よ」を取り上げるなら、動詞は「し」、それに「て」を付けて、継続の補助動詞の完了形「いた」につなぎ、断定を弱める「みたい」に断定の「だ」を屈折させ連体形の「な」として文頭からの全体を「の」につなぎ、最後に場のフォーマルさや相手との関係の認識を示す終助詞「よ」で結ぶ。この例は女性のタメ語ですが、相手が変わればさまざまなレベルの敬語が挿入されることでしょう。

このように、たくさんの助辞（名詞や動詞を支え、関係づける助詞や助動詞の類）を用意して、その都度、ローカルに文の枝を茎につなげ、述語に行き着いたところで、その下に根を生やす。これが日本語のやり方です。SVで始める代わりに、話の内容を聞き手とのしかるべき関係に応じて包み直し、差し出すという感じでしょうか。

CamScannerでスキャン

これなら文がいくら長くなっても（聞いている方が耐えられる限り）大丈夫だし、述語が来るたびに一応の「締め」が入るので、センテンスの切れ目もあまり意識しなくていい。その便利さ、使い勝手のよさを武器にして日本語は、幕末以来の西洋との文化接触を生き延びてきました。aboutのような英語の副詞に「な」を付けて形容詞化（「アバウトな人」）したり、throughのような前置詞に「する」を付けて、スルッと動詞化する巧みさは、日本語の柔軟なつくり（骨のなさ）のたまものだと思います。

英語はSVOの背骨を持つことで、言葉数を減らし、効率を手にしました。英語を学ぶには、日本語とは違うそのタイトさに慣れていく必要があります。

2-6

「ここはどこ?」は英語にならない。

英語の前置詞は、ほとんどが空間的なイメージを表します。in, on, at, over, through, between …。これらの単純明快な、いわば「空間詞」を日本語は活用しません。

これは日本語が客観的で平等主義的な空間を前提にしていないことと関係します。さし上げたり、へり下ったり、対人関係の上下にこだわり、〈内〉を家や自分と同一視する言語は、どうしてもあっさりとした物理的な空間になじみにくいのでしょう。私たちは、同じ空間にIやyouを同じ資格で泳がすのをよしとしない言語を通して世界を見ている。このことが英語の習得を難しくしています。

たとえば「ここはどこですか?」という日本語。これは英語で、Where am I?とか、Where are we?となります。"Where is here?"では英語になりません。





"Where is here?"だと、「Here」が見つからない、「ここ」はどこへ行ってしまったんだ、という表現になってしまいます。

Where is …?は「どこ・にある」かを聞く言い方。「ここはどこ?」は「ど

CamScannerでスキャン

こ・である」か（What is this place?）を聞く言い方。「ここ」の名前を聞いているつもりで、「ここ」の所在を聞いてしまったわけです。

「わたしはどこにいますか？」という日本語もヘンですね。私は「ここ」にいるに決まっている。「ここ」は、話者の移動とともに動く、一人称の拠点。そこは〈うち〉と呼ばれる場所であって、その〈うち〉から〈おたく〉または〈貴方〉——尊い方向——へ向けて言葉を発するのが日本語です。

「ここはどこ？」は、話者にとって何よりも大切な〈うち〉を見失ってしまったという意味になってしまう。自分を見失ったという意味では「私はだれ？」と違いません。

Where am I? と問う人は、地図のような、客観的な「空間」を思い描いて、その中に「私」を位置づけます。次の回にお話ししますが、**英語は、〈うち〉を抱えず、記号としての I や you が公的空間で行動し、反応するというモデルによっています。いわば「空間言語」。その特徴が、Where am I? という疑問文によく現れている。この空間に「ある」ものは、I だろうと、you だろうと、すべて物理的に、きわめて平等に「ある」と見なすことができます。**

こうした両言語の違いを論じるときに付きものの例文があります。川端康成の『雪国』(1948) の冒頭と、川端のノーベル文学賞受賞に寄与したエドワード・サイデンステッカー（1921–2007）による英訳です。

> 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。
> The train came out of the long tunnel into the snow country.

川端の文を見て「主語がない」ということがよく言われますが、それは正しい見方ではないでしょう。文に主語がないのではなく、日本語話者は一人称の枠である「ここ＝うち」を携えて移動しているのです。〈うち〉にいて、「あ、雪国だ」と思う、その延長線にある「見え」の報告が、「〜すると〜であった」なのです。「抜ける」という動詞に対する主語は言及されません。何が抜けるのかといえば、それは私とも汽車ともつかない、移動する一人

称視点の枠です。読者は、作者の一人称枠に引き入れられ、その内側から世界を見ることになるので、「抜ける」の主語が「私」なのか「汽車」なのかは問わない。強いて言えば作者の「一人称枠」がトンネルを抜けたのです。

池上嘉彦『英語の感覚・日本語の感覚』(2006) によれば、日本語では「〈自己〉は知覚の原点として知覚の対象にならず、したがって、発話の中で言語化されない」(同書 p.184) のです。

これに対し英訳者は「汽車が、長いトンネルから出てきた、雪国の中へ」と、ロングショットの画像を提示しています。out of と into という2つの空間詞が効いていて、主語 (the train) と述語動詞 (came) による骨組みを支えています。

［2-5］で引用した金谷氏が『英語にも主語はなかった』(2004、改題『日本語と西欧語』2019) で、川端とサイデンステッカーの文のしくみを図解し、理論づけました。いわく、「日本語は虫の視点、英語は神の視点」。日本語が一人称枠を移動させながら物を語るのに対し、英語は、高いところから下界を見下ろすようにして語る。そのパノラマの中に「私」も見えている。

「神の視点」とは、金谷氏の説明によると「言語化されようとしている状況から遠く身を引き離して、上空から見下ろしている、そしてスナップ写真のように、瞬間的に事態を把握する」。一方の「虫の視点」はその反対で、「状況そのものの中にあり (……) 時間とともに移動する」。

この「虫が地上を進んでいくような視点」を代表している一例が、川端康成のトンネルを抜ける列車の中の語り手だというわけです。

CamScannerでスキャン

英語のような日本語も、結局英語に似ていない。

神の目、虫の目——というのは、ずいぶん大胆で挑発的な対比ですが、述べていることはわかります。たしかにサイデンステッカーの英語文は絶対者の高みから見ているかのよう。映画のオープニングを見るような雪国の映像には、「空間言語」とも言うべき英語の特徴が良く出ています。

同じことを、同じ「雪国」の冒頭文を例にして、池上氏（前掲書 p. 189）は、英語の話者は「自己を他者化する」として、こう説明します。

「いうなれば自分の分身をその場面に残したまま、自らは一歩退き、自分の分身を含むもとの場面を外から客体化して眺める」と。

「神の視点」にも「自己の他者化」にも、私は同意しますが、同時に、そんな大げさな話でもないような気がしています。それらの洞察は頂戴しながら、もう少し軽い言葉で考えていきましょう。

「雪国であった」は〈うち〉からの「見え」の報告ですから、「主語」のようなものは付きません。「汽車が、長いトンネルから出てきた、雪国の中へ」という文とは、メッセージの性格が違うわけです。しかし、ではどう訳せば川端の日本語に近づくのでしょう。いっそ、動詞を取り去って、俳句のような詠嘆調で、

Out through the long border tunnel: the snow country.

とでもやったら、いいのか……でもそれでは小説になりません。まともな英語に移し替えるなら、やはりどうしても空間ごと英語流に切り替える必要がある——ということで、続くセンテンスをサイデンステッカーは、このように処理しました。

2-7

英語のような日本語も、結局英語に似ていない。

神の目、虫の目――というのは、ずいぶん大胆で挑発的な対比ですが、述べていることはわかります。たしかにサイデンステッカーの英語文は絶対者の高みから見ているかのよう。映画のオープニングを見るような雪国の映像には、「空間言語」とも言うべき英語の特徴が良く出ています。

同じことを、同じ『雪国』の冒頭文を例にして、池上氏（前掲書 p. 189）は、英語の話者は「自己を他者化する」として、こう説明します。

「いうなれば自分の分身をその場面に残したまま、自らは一歩退き、自分の分身を含むもとの場面を外から客体化して眺める」と。

「神の視点」にも「自己の他者化」にも、私は同意しますが、同時に、そんな大げさな話でもないような気がしています。それらの洞察は頂戴しながら、もう少し軽い言葉で考えていきましょう。

「雪国であった」は〈うち〉からの「見え」の報告ですから、「主語」のようなものは付きません。「汽車が、長いトンネルから出てきた、雪国の中へ」という文とは、メッセージの性格が違うわけです。しかし、ではどう訳せば川端の日本語に近づくのでしょう。いっそ、動詞を取り去って、俳句のような詠嘆調で、

Out through the long border tunnel: the snow country.

とでもやったら、いいのか……でもそれでは小説になりません。まともな英語に移し替えるなら、やはりどうしても空間ごと英語流に切り替える必要がある――ということで、続くセンテンスをサイデンステッカーは、このように処理しました。

CamScannerでスキャン

夜の底が白くなった。

The earth lay white under the night sky.

「夜」に代わって、the eathという実体が現れました。「それ」が夜空の下に白く横たわる。これは「どこに、何が、いかに、あるか」という記述法です。空間に実体を置くわけです。川端のやり方はそれとは違いました。眼前に「夜」があり、そいつの「底」が「白くなった」と言っています。

目の前に夜が横たわっている。そいつの底が白に変わる——これは情景とつねに「対面」する語り手をもって初めてうまくいく詩的表現です。映画のロングショットのように広々とした視野の中では、この技法の効力は失われてしまうでしょう。

各言語の視野や視点の違いということを論じ出すと、話はどうしても文化論に行き着きます。そして文化は「時代」を抜きにして考えられません。川端文学は、古くて美しい日本に対する個人的美学ではないですか、との疑問が起こるのは当然でしょう。現代の日本人作家は、もっとグローバルな心模様を描いているでしょう、と。

わかりました。「日本的心情」のようなものは払拭して、クールで、淡々としたアメリカのハードボイルド小説を思わせるような文章を掲げましょう。次は、1980年代以後の小説の日本語に大きな影響を与えた村上春樹の、初期の代表作『羊をめぐる冒険』(1982)の冒頭文です。

新聞で偶然彼女の死を知った友人が電話で僕にそれを教えてくれた。彼は電話口で朝刊の一段記事をゆっくりと読み上げた。

最初の文は、
〈[何で—誰の—何を—どうした—誰]が—何で—誰に—何を—どうした〉
の形をしています。2番目の文は、
〈誰は—どこで—何を—どのように—どうした〉。
主述を伴った行為文が続く。このようなシンタックスを多用することで、

人工的で無機的な言語空間を広げ、日本の「私小説」が得意としていた、内面が染み出るような情緒的な世界を、村上文学はいわば掃き清めてきました。その文章はクールで都会的、同時代の洋楽志向とも相まって、ぐんぐんとファンを増やしました。

でも、これらの文をそのまま英語に直訳したら、クールでも都会的でもなくなってしまう——英訳者アルフレッド・バーンバウムは、そう判断したのでしょう、最初の文をこのようにバッサリ整理しました。

> It was a short one-paragraph item in the morning edition. A friend rang me up and read it to me.
> 朝刊に出た短い一段落の記事だった。友達が電話してきて僕に読んでくれた。

最初の文を比べてください。被された行為文の装いを取り去って、〈どこの—どのような—何だった〉かに整理しています。2番目の文も、表現の最短コースを行っている感じです。〈誰が—誰に—何をした〉のかと。

〈誰が—どうした〉という文を作ろうとすると、日本語では余計なことをいっぱい言うハメになる。日本人が英語を訳すときに入り込んでくるたくさんの煩雑な表現は、シンプルな英語でのコミュニケーションでは、実際余計なものである。バーンバウム訳と村上の原文の差は、そのことを端的に示しています。

ここまでのまとめ

- **英語は空間言語である。英語の思考者は、誰にとっても対等な〈空間〉や〈方向〉を、空間詞（空間を詳述する前置詞や副詞）によってきめ細かく追いながら、自分を含むあらゆる事物を、空間上に配したり動かしたりしている。**
- **日本語は対人言語である。一人称は〈うち〉に留まり、自分に見えたことや感じたことを、二人称の相手との関係において適切な形に処理して発するための構造になっている。**

CamScannerでスキャン

2-8

日本語には〈内なるワタシ〉がいる。

話は飛びますが、森田良行『日本人の発想、日本語の表現』(1998) に、相撲という格闘技が日本的空間のあり方をどのように表象しているかということが書いてあります。丸い土俵の中心を向いてにらみ合う両者が、互いを外へ押し出そうとする空間は、日本語に内在する私たちの、一人称中心の世界観をそのまま表しているという解釈です。押し出すか、柔道のように投げ飛ばすか、押さえ込むか。

いや、日本人は、それほど排他的ではないはずです。私たちは歴史を通して、中国からも西洋からも豊かな恵みを取り入れて、それを自分たちのものにしてきました。英語だって、国民のほとんど全員が学校で何年も学んでいる。でも、どうやって？

どうでしょう。日本語によって英語を組み伏せるようにして、学んでこなかったでしょうか？ 「わたしは一人の少年です」と、それぞれの単語を対応する日本語で押さえ込む。逐語訳は導入として必要かもしれませんが、所詮は補助輪で、なくすに越したことはない。逐語訳した単語をつなぎ、日本語で押さえ込むための規則集が「文法」なのではないはずです。

英語を学ぶにはまず、〈あちら〉のことばを〈うちら〉のことばで組み伏せるような、相撲タイプの学習をやめることです。英語を訪ね、英語のしくみにしたがって、〈うちら〉の心の縛りを解いていく。どこから始めましょう？

例えば、これも森田氏が書いていることですが、日本語には「恥ずかしい」だの「きまりが悪い」だの「気まずい」だの「後ろめたい」だの「みっともない」だの、その手の形容詞がたくさんあります。それらに相当する英語の形容詞が、うまく見つからないのはなぜでしょう？ I am の次に shy を入れても、自分の性格を表すことにしかなりません。

CamScannerでスキャン

I am shy.　私は恥ずかしがり屋です。気後れするタチです。

「恥ずかしい」は、shyのような「性格」ではないし、happyやsadのような「心みずからの状態」でもありません。〈うち〉に引っ込んだ自分が〈おもて〉の出来事に触れることで、心に「誘発された感情」です。この場合、英語では〈私〉を〈おもて〉に出し、出来事の目的語にしてしまうのです。つまり、私が状況の力を受けて凹んだり、曲がったりする出来事として描く。どんな他動詞の作用を受けたかを示すことで、心の状況を伝えるのです。

S	V	O
That	embarrasses	me.

（恥ずかしい）

S	V	O
That	fascinates	me.

（魅力的だ）

あるいはそれを受け身にしたり、ING分詞を形容詞として使ったり。

I am embarrassed.　I am fascinated.
It's embarrassing.　It's fascinating.

このパターンに慣れると、大量の言い回しが手に入ります。

That puzzles me.	I'm puzzled.	どうにも分からない。
I'm surprised.	It's surprising.	ビックリです。
I'm frustrated	It's frustrating.	もどかしい。

両言語の違いは、次のように説明できます。すなわち、**日本語には〈うち〉なる私がいて、〈うち〉に湧く思いを、そのまま形容詞の類で吐き出すようにできている。**——「痛い」「お腹が空いた」「あの子に会いたい」。

これに対し、**英語では私＝meが〈おもて〉に出ていて、さまざまな出来事の作用を受ける。その作用をSVOの形式で記述することにより心情を述べる**というのが、英語のやり方なのです。

日本語による「感情吐露」から、英語のSVO文へ移動する練習を続けましょう。

意味の等しいものを線で結んでください。

iv) ほら、みっともないでしょ。•	•(あ) It puts me to shame.
v) これは気持ちいい。•	•(い) This makes me feel great.
vi) お恥ずかしいかぎりです。•	•(う) Hey, people are watching us.
vii) そんな……照れます。•	•(え) You're flattering me.

これに答えるには、一人称を目的語にして状況を語ることができればいい。「みっともない」は、(う)「まわりから見られている」。「気持ちいい」は、(い)「私をいい感じにさせる」、「お恥ずかしい」は、(あ)「恥に私を追いやる」。「照れます」は、(え)「私を持ち上げすぎ」です。

まとめ

自分を〈うち〉におく日本語では、自発的な感覚を主語を付けずにそのまま出すような語り方を制度化している。これに対して、自分をつねに〈おもて〉の空間に出して考える英語では、対人的な感情や物事への関心は自発的に生じるというより、何らかの作用の結果として起こると見る。これは英語の、目に見えにくい「文法」なので銘記しておこう。

CamScannerでスキャン

2-9

英語空間は記号を動かすゲームのようだ。



ここまで観察した日本語像は、〈うち〉を居所とする者が、相手との関係を慮(おもんぱか)りながら、内面を表出させるような言葉を連ねるというものでした。その日本語観は、昭和のステレオタイプではないか、という意見もありましょうが、日本語自体の変化についてはこの本では立ち入りません。

一方の英語は、私（記号化された“I”）やあなた（記号化された“you”）を含む万物を、おもての〈空間〉に解き放って、その相互作用を語るという特徴を他のヨーロッパ語と共有しています。

両方式はだいぶ違うので、日本語のやり方しか知らずにいると、いくら英語を学習しても腑に落ちず、したがって身につかない、運用力に通じていかないということになりそうです。いったい英語でものを思うとは、どういう仕組みに乗ることなのか？　基本的なところから考えていきましょう。

空間内の二者関係。何でもいいのです。私とボールにしましょうか。1個の特定のボール the ball と、主体としての自分“I”との間で何が起こるか。両者の間に動詞を挟むと「文」になって、出来事が語られる。英語だとそれだけでいい。助詞も何もいりません。

I —— hit —— the ball.

Vを挟んで名詞（代名詞も含む）が2つ。1つはVの前、1つはVの後。この違いが「格（case）」の違いです。動詞の前の席が「主格」、後ろが「対格」――英語では、あとで述べるように「与格」と「対格」の見かけ上の区別がなくなってしまったので、どちらも「目的格」と呼ばれます。

CamScannerでスキャン

「ボール」と「私」を入れ替えてみます。

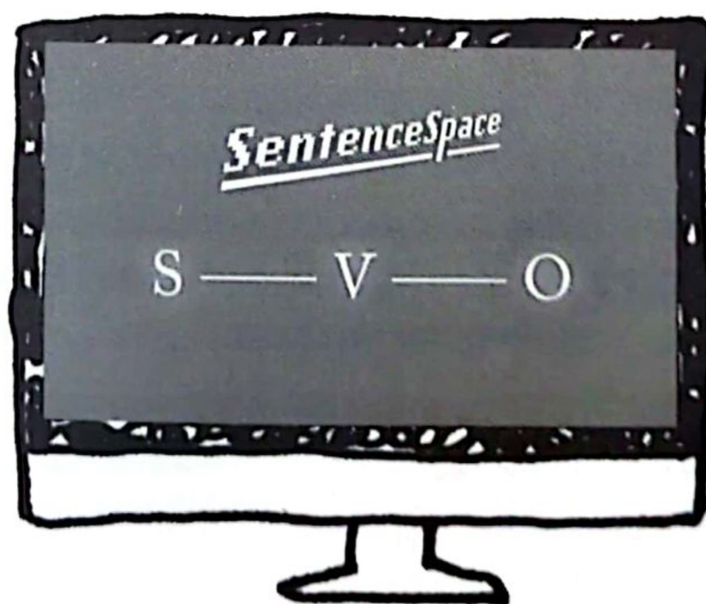
	S —— V —— O				S —— V —— O	
i)	I	hit	the ball.	ii)	The ball	hits	me.

Oの位置に来た「私」はmeに「格変化」しました。Sの位置に来たthe ballは格変化しませんが、Iがthe ballに変わると、hitがhitsへと「人称変化」します。人称変化するのは、主語が三人称単数現在のときだけ。他のヨーロッパ語では格変化も人称変化も忙しいのですが、英語では、代名詞の格変化と「三単現」の人称変化だけを覚えておけば大丈夫ということです。

逆に言うと、英語の単語はほとんど形を変えずに動き回る。それによって意味が変わる。明らかな印もなく並んだ単語の、どこからどこまでが文のどんな機能を担っているか、それに反応できないと、英語は読めないし、聞き取るのはもっときつい。

構造をつかまなくてはいけません。構造は単純です。Vを挟んで2つのN（名詞句）があると、SVOという非対称な意味構造が立ち現れる。

これはゲームとして楽しそうです。英語文づくりのゲーム・プログラムを想像してみましょう。名前は〈SentenceSpace〉とか？



CamScannerでスキャン

最初に、モードが「命令」ではなく「叙実」になっていることを確かめます。画面中央に一本の線が左右に伸びて真ん中に大きく S —— V —— O と出ています。これが〈SentenceSpace〉のデフォルト設定。

まず動詞ボックスの中から、hitを選びました。箱の中にあるときは、どの単語もモノ扱い、つまり名詞です（モノ扱いするときの動詞を、文法では「不定詞(infinitive)」と言います）。

そのhitをドラッグして画面のVの位置に持ってくると、動詞化する（述語動詞になる）とともに、左右に腕が出ます。一方はSへ、もう一方はOへ。2つの名詞（または代名詞）を決めないと文になりません。Iとballを選びます。ballに関して、[単数・複数]から単数を選ぶと「a / the /その他」を聞いてくるのでtheを付けました。

hitを動詞に収める前に、いろいろ質問が来ます。

S —— V —— O

I —— hit —— the ball.

☑現在
☐過去

☑なし
☐進行
☐完了

時制（テンス）は「現在」か「過去」か。現在を選びます。

右の選択肢は、「進行」または「完了」の形にするか、それとも単純な現在形や過去形に保つかを選ばせるものです。これら、動詞に付く時の相の表示を、「アスペクト」と言います。「進行」をクリックすると、センテンスは、

I am hitting the ball.

完了にもチェックを入れると、

I have been hitting the ball.

となり、進行のチェックをはずすと

I have hit the ball. となります。

CamScannerでスキャン

動詞の形の決定には、この他「ムード（法）」「ボイス（態）」と呼ばれる項目がありますが、仮想法（仮定法）にするとか、受動態にするとかの機能は、今はオフにしておきましょう。

〈The ball hits me.〉のhitのテンスとアスペクトを次のように設定すると文はどう変わるでしょう？

(1) 現在　完了　　The ball (　　　) (　　　) me.

(2) 過去　進行　　The ball (　　　) (　　　) me.

(3) 現在　進行＋完了　　The ball (　　　) (　　　) (　　　) me.

マジに文法の授業っぽくなりましたね。正解は、

(1) The ball (has) (hit) me.

(2) The ball (was) (hitting) me.

(3) The ball (has) (been) (hitting) me.

ここでもし「法」と「態」を選択肢に交え、「仮想」「過去」「完了」「進行」「受動」に全部チェックを入れるならば、結果は、

I would have been being hit by the ball.

となるでしょう。「（そうだったら）僕はボールによってぶつかられ続けていただろう」。これで文法的に正しいのですが、文法家は満足しても、こんなややこしい文、言う人は誰もいません。

どうでしょう、〈SentenceSpace〉を通して見ると、英文法も案外すっきりして見えますね。ムードについては第1章に続けて第6章で、テンス（時制）とアスペクト（相）については第5章で、徹底的に考えていくので大丈夫。ここは流しておきましょう。

CamScannerでスキャン

2-10

SVOのどこに来るかで品詞が決まる。

同じゲームの日本語版を考えたいのですが、これが厄介なのです。私がボールをhitする場合と、ボールが私をhitする場合とで、同じ動詞が使えそうにありません。私はボールを「打つ」けれども、ボールは私を「打ち」ません。私に「当たった」り、「ぶつかった」りするだけです。モノと人の関係は、英語ではかなり「対称的」ですが、日本語ではむしろ「対照的」です。

球が　俺に
当たった。

俺は　球を
ぶつけ－られた。

日本語には、なにかと情が絡む。英語にも情は絡みますが、それでもThe ball hit me. のhitに別の動詞を充てたり、構文を変化させたりするところまではいかない。「あのボール、当たりやがった」と言いますが、その「やがった」に相当する補助動詞もない。せいぜい、

That *damned* ball hit me.

とボールに形容詞を付けて罵る(ののし)くらいです。SVOの他動詞構文は動きません。故意にぶつける行為も、単なる物理的な出来事も、どちらも同じ構文、同じ動詞hitで言い表すわけです。

CamScannerでスキャン

さらに、hitという語をVからOに移して名詞として使うことも可能です。そのとき、名詞になったからといって、hitの形が変わることもありません。日本語だったら、名詞は「ヒット」でも動詞にするには「ヒットする」とか——こんな語はありませんが——「ヒットる」などの形にしないといけません。

動詞なら動詞、形容詞なら形容詞が、それらしい形をしていれば、構文は適当でも意味は混乱しませんね。日本語はその方式を採りました。doubleという概念を動詞にして「ダブる」としたり、sabotageから「サボる」という言葉をつくるのも自由です。

英語のやり方はこれとは違う。SVOの構造を不動にしておくのです。その構造が話者同士で共有されていれば、SやOに置かれているのは名詞に決まっているので、単語が名詞特有の形をしていたり、動詞が動詞特有の形をしている必要はありません。

hitをOに入れてみましょう。Oに持って行くとhitは名詞になるので、単複の別と冠詞が必要になります。冠詞の代わりに数詞twoを付けて「2本のヒット」とします。主語heと結ぶ動詞をhaveとして、時制は過去にしましょうか。

S　　V　　O
He —— had —— two hits.　　彼はヒットを2本打った。

さらにどんなヒットだったか、形容詞を添えてみます。

He —— had —— two beautiful hits.
彼は見事なヒットを2本打った。

背骨に変化はない。Oの部分が複雑になったけれども、全体で、1つのN（名詞句）である点は変わらない。N—V—Nの連なりがSVOの意味構造をつくっている点は不動です。

CamScannerでスキャン

形容詞beautifulはtwoとhitsの間に来ることが決まっています。その位置にはまる語は、なんであれ形容詞です。

次にそのヒットが単打だったことを示します。two single hitsという連なりの中でsingleは形容詞。というのは名詞のブロックにあって、最後のhitsの前に来ているからです。そのhitsを落として動詞に回し、singleで名詞ブロックを締めることにするなら、

He ——	hit ——	two singles.	彼は2本の単打（シングルヒット）を打った。
N	V	N	

と、今度はsingleが名詞になって、複数形のsも付きました。

品詞とは、その語句の構文上の位置によって決まる。やや難しい言い方になりますが、**単語は最初から、ある品詞に属しているわけではない。関係性の構図の中で、それぞれの「持ち場」に収まることで、動詞や名詞や形容詞になっていくのです。**

それぞれの名詞句の中で、形容詞はどれか

(1) a blue sky
(2) a sky blue
(3) a monster mother
(4) a mother monster

(1)のblueは、たぶん、どなたも「形容詞」と判断したのではないでしょうか。そしてそれは、日本語に「青い」という語彙があるせいではないでしょうか。「い」が付くのは形容詞、というふうに日本語は、単語単位で品詞を決めます。英語にも形容詞や名詞に特有の形をした単語は少なくありませんが、基本的には構造と関係性が品詞を決めます。上の問題は、4例とも「冠詞―形容詞―名詞」の構造に収まっています。すべての例で、形容詞（または前置の形容名詞）は後に来る名詞の性質を説明しています。

CamScannerでスキャン

第3章

5つの文型の背後に、2種類の結合が見えること。



CamScannerでスキャン

3-1

自動詞も、他動詞に負けず文を伸ばす。

第2章で、SVOの結び付きについてお話ししたとき、ウサギを捕まえる図を掲げました。chase, catch, eat ── どれも目当てはウサギにあるわけで、その意味で行為の動詞のobjectを「目的語」と訳すのは、当を得ています。

狙いを定め、正確を期して、結果を出す。こうした目的志向の意識と絡んで、ヒトの言語が進化してきたことは、どうも間違いないようです。

しかし自然の営みは、おおかた無目的、または「自己目的」的です。草はなんのために生えるのか。雲はなんのために空を漂うのか。

They just grow. They just flow.

としか言えません。これらのgrowやflowに目的語は付きません。

目的志向の文明に背を向け、自然の営みを理想とするヒッピーと呼ばれる若者たちが、かつて大量に出現したことがあります。1980年代になってなおヒッピーで居続ける中年オヤジの風来坊ぶりを愛情豊かに描き出すトマス・ピンチョンの小説『ヴァインランド』の冒頭の一文を引用します。

次の文の背骨（S—V—X）はどれか。

Later than usual one summer morning in 1984, Zoyd Wheeler drifted awake in sunlight through a creeping fig that hang in the window, with a squadron of blue jays stomping around on the roof.

1984年の夏の朝。いつにも増して遅い時間に、ゾイド・ホィーラはとっぷらとっぷら、眠りの中から浮かび上がった。窓を這う蔦を通

CamScannerでスキャン

して光が差し込み、屋根の上ではブルージェイの軍団が撥ねている。
(拙訳、河出書房新社「世界文学全集」版、2009)

ピンチョンは練りに練った、時として凝りすぎの文章を書く作家ですが、この小説では自然の模写に力を入れているところがあります。蔦と日差しと鳥と目覚めを描くこの冒頭の文も、一見シンプルながら、蔦のように這っている感じもします。分析していきましょう。

(いつ) Later than usual
one summer morning in 1984, (一日のいつ？) (何年のいつ？)

(誰がどうした) **Zoyd Wheeler —— drifted —— awake**

(どこで？) in sunlight
(光はどこから？) through a creeping fig
(蔦ってどんな？) that hang in the window,

(付記) **with**
a squadron of blue jays (何が)
stomping around (どうしていた)
on the roof. (どこで)

日本語訳と文の解析図を掲げました。

これは1つの文なので、メインの動詞(述語動詞)が1つだけあります。drifted awake(たゆたうように目を覚ます)のdrift(漂流する)がそれ。過去形の印 -ed が付いて時制を示しています。この「時制(tense)」が付いている動詞が述語動詞です。

テンスの付いた動詞がもう1つ、文の奥にありました。

CamScannerでスキャン

N —— adj

a creeping fig　　that hang in the window

の hang です。a creeping fig というのは、日本にもよく見られる常緑の蔓性植物で、それが窓を覆うように垂れ下がり、その葉を通して差し込んでいる光がゾイドの顔に当たっているという光景です。

この文自体を、一種の植物のように捉えてみてください。that hang in the window という節が、fig という名詞から「生えて」いるかのように。

どんな creeping fig なのかを、それに掛かる（絡まる）that 以下の節（関係節）によって説明しているわけです。この that は「関係代名詞」と呼ばれますが、茎から葉が分枝するときにできる葉腋（芽の生じるところ）のような存在で、that ごと切り離しても、その節は

That hang in the window.

という文になって自生します。

一方でそのまま切り離したのでは文になれない、"不完全な節" もあります。with の後の部分がそれ。with は前置詞なので、その後に付くのは「句」だと見なすなら、これは「句」と呼ぶべきですが、意味的には明らかに主語と動詞から成っています。

with —— [blue jays (s)　stomping around (v)　on the roof 〈where〉]

このように表記すると、四角で囲んだ部分が、全体で1つの名詞句または名詞節のように with に繋がっていることが見えやすいでしょう。確かなのは、この連なりの中に s — v の関係が存在することです。

この連なりを SVO の O に填めることもできます。「ブルージェイが屋根で跳ね回るのが聞こえた」を英語で言うと、

I heard —— [blue jays　stomping around　on the roof.]

となります。枠で囲んだ部分が、それ全体として heard の目的語になっています［⇨3-10］。

CamScannerでスキャン

意味的に主語述語を持つ「節」を「句」に圧縮したかのような連なり。これをどう分類したらよいのか。諸説あります。

(a) これは述語動詞を含まない、ゆえに不完全な節である。stompingをstompに代えるか、またはareを補えば、主語と述語が対応して完全な節になるのだが、主節に接続させるために、stompingの形で非述語化している。

(b) 句でも節でもない、意味上の主語述語を含むこのような連なりを、そのまま「連なり(ネクサス)」として認識しておけばいいではないか。──私自身はこの「ネクサス」の考え方が、構文学習のために優れていると思っています。

(c) 日本の学校文法では一般に「with + O + C は付帯状況を表す」という言い方が流通しています。Oは「(前置詞の) 目的語」、Cは「目的補語」。この説明法はOがCの意味上の主語であるという肝心な点を覆ってしまう欠点があります。

話を戻して、『ヴァインランド』の冒頭文全体の形態を眺めてみましょう。(いつ) に関する情報に続いて、(誰がどうした) という背骨の部分、(どこの、どんな情景か) を描く部分があって、最後にwithから伸びる部分で屋根の上の出来事が描かれます。3つの動詞は、どれも自動詞。自動詞には目的語がありません。何のために何をしているわけでもないけれども、ゾイドも蔦もブルージェイも、元気なようです。

	S	V	〈where〉
i)	Zoyd Wheeler	drifted	awake
ii)	a creeping fig	hang	in the window
iii)	a squadron of blue jays	stomping around	on the roof

自動詞に〈what〉は付きませんが、その代わり〈how〉と〈where〉が重要です。この3例はどれも「どこへ」や「どこで」の情報が来ています。

driftは漂流のイメージ。それを訳者は「とっぷらとっぷら」と表現しました。awake (覚醒している) はその漂流の行く先 (にある状態) です。やかま

CamScannerでスキャン

しいブルージェイ（和名アオカケス）が屋根を跳ね回っている様子は、重量感あふれるstompという動詞に「あちこち」を意味するaroundを加えて描かれています。

英語の自動詞と空間の関係は密接です。次項で引き続き考察していきましょう。

CamScannerでスキャン

3-2

WhereとWhatは大きく違う。

英語の自動詞には、空間移動のイメージを伴うものが多くあります。図で表すと、

Zoyd	drifted	awake
I	'll walk	home
		
主体	移動	場所、状況

［**2-3**］で描いたSVOの図とは違っています。手を介した事物との関係ではなく、動詞の後に空間（またはそのイメージ）が広がる。driftは自分の意志に関係なく流れていくことを示し、その行き先がawakeの状態。homeは歩行の行き先です。目や手で把握する対象は名詞で、whatで受けます。足で移動して行き着くところは副詞で、whereで受けます。この違いが、英語構文における文型の違いをもたらしています。

日本語の場合と比べてみましょう。

（名詞）（助詞）（自動詞）	（名詞）（助詞）（他動詞）
パン——に——群がる	パン——を——食べる

CamScannerでスキャン

英語の場合、自動詞と他動詞に構文的な違いがあります。

V	adv
自動詞	〈where〉
gather ——	around the bread
walk ——	home

V	N
他動詞	〈what〉
eat	the bread
build	a house

adv とあるのは「副詞」adverb です（adverb は語源的に「動詞へ」という意味）。

drifted awake も同じパターンにはめ込むことができますが、現行の品詞分類では awake は「叙述形容詞」なので、adv の欄に入れることは、ここでは差し控えておきましょう。

「叙述形容詞」とは、名詞の前に来ることはないが補語にはなるタイプの形容詞を言います。

The man is awake. とは言えても、"an awake man" とは言わない——その手の言葉は、副詞とは別個に考えられてきました。drift awake という表現にしても、awake は副詞として動詞 drift を修飾しているわけではない。become new（新しくなる）と同様、変化や移動の結果を叙述する形容詞なのだ、と。それとは別の考え方を、この先、おもむろに展開していきます。

まずは常識的なところから——

〈where〉はトコロ、〈what〉はモノ。トコロは副詞、モノは名詞。両者の間に、次のような方程式が成立します。

トコロ　＝　空間詞　＋　名詞

「空間詞」という呼び名は［**2-6**］でも使いましたが、ざっくりとした呼称で、場所、方向、位置関係の情報を担う、前置詞や副詞の総称です。本書では、副詞と副詞句の違いにこだわっていませんので、around the bread のような前置詞句も、そのまま「空間詞」と称することがあります。

CamScannerでスキャン

モノの世界では、Bがゼロでないとき、A＋B＝Aとはなりません。でも言葉はモノではなく「パターン」ですから、「空間詞＋名詞＝空間詞」という計算でいいのです。次の下線部はすべてトコロの情報を伝える「空間詞」であると考えましょう。

The train is in.	列車は（駅に）入っている。
I'm on board the train.	私は列車に乗った。
The train has pulled out into the open.	列車は広野へ出た。

空間詞はまた、時間も表現します。というか、英語でも日本語でも、時間の観念は、空間を基盤として、その比喩の上に成り立っているのです。

from nine to five	9時から5時まで
at present	現時点において
within an hour	1時間の内に

これらはみな、英語も日本語も、空間表現を時間に転用したものです。「意識されない言語の深みで、〈when〉は〈where〉に含まれる」と言ってもいいでしょう。

〈how〉についてはどうでしょうか。
様態を表すフレーズの多くが空間詞に由来することを、次のリストで確認してください。

彼はすっかり食いつめてしまった。	He's totally down and out.
僕は恋している。	I'm in love.
とてもマズイことになるぜ。	You'll be in a big trouble.

類例は限りありません。名詞に空間詞を付ければトコロに転じ、「トコロ」は「状態」「様態」の比喩となる。

CamScannerでスキャン

もう一つ大事な点。**英語の空間詞は細分化していて、周りの空間を高解像度で表現します。**

We are *in* Ginza. ──銀座（の町の中）にいる。
Walking *on* Harumi Street. ──晴海通り（面）を歩いている。
Soon we'll be *at* the corner of 4-chome intersection.
──4丁目の角（地点）にもうすぐ着く。

日本語が「に」や「を」を充てて済ませてしまうところを、英語はそれぞれ分けて、空間の中（in）、面の上（on）、点（at）に振り分ける。

どの名詞にどの前置詞が付くか、ということではありません。要はイメージの問題。その瞬間、頭の中にどんなイメージを結ぶかの問題です。

どんな空間詞を入れますか？

i）It's (　　　) the district of Ginza.
それは銀座地区にある。

ii）The three subway lines meet (　　　) Ginza.
3つの地下鉄の路線が銀座で出会う。

iii）We're going (　　　) Ginza.
銀座へ向かっている。

iv）We'll be driving (　　　) Ginza streets.
銀座のいろいろな道を抜けて走っていくよ。

v）We'll fly (　　　) Ginza.
銀座の上を飛んでいこう。

模範解答　i）in　ii）at　iii）to　iv）through　v）over

i）銀座にいる自分を思い描くとき、十分広い空間の中にいる気がするならinでしょう。

ii）meetのあと、必ずatが付くわけではありません。人と人が建物の2階

CamScannerでスキャン

で会ったのならWe met *on* the second floor。でも、向こうから来たものとこちらから来たものがカチンと「出会う」ところは、点としてイメージした方が締まります。地下鉄の路線を「線」としてイメージするからには「点」で出会わないと、理屈に合いません。

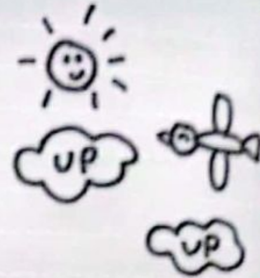
iii) to はいつも「→」。どんな用法の to も、一応は「→」を思い描いて当てはめてみてください。このケースでは、toward や in the direction of なども入るでしょう。

iv) v) 通り抜けていくときはthrough。上を越えて行くときはover（くぐり抜けていくならunder)。これらはイメージしやすい空間詞ですね。

CamScannerでスキャン

3-3

文は補語だけで自立する。



空間詞は、名詞の前に付いて位置・方向・運動などの空間情報をまとめる一方、動詞の後に付いて、その用法に圧倒的な広がりを与えています。

upのイメージを失わずに文意を解釈してみよう。

ⅰ) Pick up your rubber balloon.

ⅱ) Blow it up.

ⅲ) The balloon went up.

ⅳ) Up, up and away, my beautiful ballon.

ⅰ) pickは「選ぶ」。選んだものを手でつかんだ様子を表すには、upを付けないとうまくありません。

ⅱ) Blow it. だけでは、風船自体が吹っ飛んでしまう。blowした結果、風船が大きくなる、その動きを伝えるのがupです。

ⅲ) 風船が舞い上がりました。または、気球が離陸しました。

ⅳ) Up, up and away, ―― これは事実を述べる文ではありません。バルーンに向けて呼びかけている文です。方向を表す空間詞による命令文と解釈してもいいでしょう。命令文には動詞を含めないものもあるんですね。

ⅳ) は60年代の懐かしい歌。コーラス・グループのフィフス・ディメンションが歌いました。「気球よ上がれ、遠くへ飛んでいけ」―― upもawayも、動きを表す空間詞は、そのまま命令文に使えます。Out! と言えば「出て行け！」ということ。Closer. で「近う寄れ」。

CamScannerでスキャン

ここで強調したいのは、"Up, up and away."にも見られるように、**動詞抜きの空間詞が、そのままメッセージになること**です。たとえば「そこの、テーブルの上に置いて」という指示は、Put itがなくても"Down there, on the table."だけ足りますし、「さあ、仕事だ」もGet down to work.の動詞を略して、Now, down to work.で十分伝わります。

このことの背後には、大きな原理があります。すなわち、**補語は単独で文になる**。いえ、大声で強調しなくても、みなさん、とっくにご存じのことですかね。

Mmm. Good.　　うーん。おいしい。

It'sはいらない。It'sが付く場合と付かない場合で、用法に差が出る場合もあります。"OK."はものごとを引き受ける場合、"It's OK."は相手をなだめたり、相手の行動を抑えたりする場合。そのように個別例を見れば注意は必要ですが、一般論として、S is C.のC（補語）は文から切り離しても、単独で、文（コミュニケーションにおける独立した発語）として成立します。

これは、定義上は矛盾した事態です。補語の定義が「SVだけでは文として不完全なところを埋めて完全な文にするもの」だとすれば、補語だけで文になってしまうって、いったいどういうこと？

文法の「文中心主義」に問題があるのでしょう。これには経緯があって、西洋の文法研究は、論理学と連れだって発達しました。主語と述語が揃った「命題」がいかに正しかったり誤っていたりするかに、学者たちの目が注がれた。"Mmm. Good."のような感情丸出しの文が、議論に値するものだとは、長らく思われてこなかったのです。

補語として使われる簡単な単語に関して、その品詞を考えると頭が痛くなります。"What's up?"のupは形容詞なのか副詞なのか。"Hug me close."のcloseは、closely（副詞）のlyが脱落したのか、それともHugの結果meがclose（形容詞）になることを言っているのか？"Hold me tight."のtightはどうなのか？

CamScannerでスキャン

a man from Aomoriの下線部は形容詞、He came from Aomori.の下線部は副詞だと、私たちは区別したがりますが、それは日本語でモノを考える私たちが、これらのフレーズを理解するのに、連体つながり（青森からの男）と連用つながり（青森から来た）を振り分けないと気持ち悪いからでしょうか。日本語は「部分を丁寧につなぐ言語」です。

自説を述べれば、補語においては、副詞と形容詞の区別はありません。副詞とは動詞句に付加するもの。形容詞は名詞句に付加するもの。そのような関係性の中で考えるなら、節（文）のレベルでA is up.のような補語になるときは、副詞も形容詞もありません。

意味とイメージから補語を品詞化するなら、次の三分法が適当でしょう。whatの情報を運ぶ「名詞」、what kindやhowの情報を運ぶ「様態詞」、whereの情報を運ぶ「空間詞」です。いずれも——それを「文」と呼んでよければ——単独で文を作ります。

It's a boy.	A boy.	（名詞文）
It's quite big.	Quite big.	（様態詞文）
It's here. In the crib.	Here. In the crib.	（空間詞文）

「補語だけ文」もありにしましょう。英語の文型には、SVO系の、堅固な構造もあれば、[C]だけで存立し、主語を付けて文にするときに、形式動詞beの手を借りるというものがある、と考えればいいのです。

英語の発想には、発想の根本から［SVO］の形をしている系統と、「C」のみで発想し、あとから、都合に応じてSを付けて、形式動詞のis等で結ぶものがある。その点が理解されれば、初級英語の教室も、こんなふうにリラックスして実践練習に生徒を引き込めるのではないでしょうか。

There. On the floor. Under the table. Your pen is there. It's under the table.

Here. In my hand. It's in my hand. It was down here. On the floor. I picked it up. It's up here now ...

3-4

am / are / is は be とは違う。

文法は、言葉についての理解をすっきりさせるためにあるものですが、本当に基礎的なことは、語るのが難しすぎる。というか、言葉で語れるようになっていません。be動詞について私たちに何が語れるというのでしょう？　コトバの基礎を語るもどかしさは、椅子に座りながら、その椅子を持ち上げようと奮闘するのに似ています。

am, are, is。これが全部同じ動詞だと言われても、にわかにそんな気にはなれませんね。

「それがある」は It is.「君がいる」は You are. だから、is と are は同じ意味だ——と、そこまでは納得しても、be は違いすぎる気がしますね。

そう思って英語史の教科書を開くと、やっぱりそもそも別の動詞だった。be, been, being は、古英語では原形（不定詞）を beon とする動詞の系列で、ラテン語の I become に当たる *fio* の仲間ということです。ということは、be は「ある」というより「なる」という語に近くならないか……。

だとしたら、「僕はあした71歳になる」というのを

×I'll am seventy-one.　と言わずに

I'll be seventy-one.　と言うのも、分からないではありません。日本語だって、「あした天気であれ」とは言わない。「あした天気になれ」と言う。英語でも be と are (am, is) を使い分けている——このことに私は、今この項を書きながら気づきました。それまで「be は am / are / is の原形で、意味に変わりはない」と思っていました……。

( )の中に、be動詞を入れなさい。

(1) ガッカリしてる？ ほうら、明るくなって（陽気にして）。
Are you disappointed? Come on, ( ) happy.

(2) 邪魔なのよ。そうするの（そういうあなたでいるの）やめて。
You are bothering me. Don't ( ) like that.

(3) 何がほしいか、もっと細かく正確に言う方がいいと彼に言ったんだ。
I suggested that he ( ) more precise about what he wanted.

命令文は、相手のふるまいを指示するのですから、変化を許容するbeを使わなくてはなりません。(1) の場合、getもよく使います。20世紀のエンターテインメント文明は「ハッピー」を簡単に手に入れられるものにしました。(2) のDon't be like that. もよく使われます。

(3) は、「今より細やかに説明できるようになることをサジェストした」のですから、isは使えません。isは時間的変化を受け付けない動詞だからです。正解はI suggested that he be more precise ... 。このbeは直説法ではありません。「仮想法現在」と呼ばれ、想いの中でしか実現していないことを語るモードです。

直説法現在形の文に、真実を指し示す働きがあることは、第1章で何度か触れました。

i) Two and two is four.　2足す2は4である。
ii) The earth is a globe.　大地は球体である。

これは時間に左右されない真実です。そのことを、be動詞の直説法現在が示しています。「現在形」とは、昔から世界で使われている用語ですが、「今現在」という意味ではありません。そうではなく、完了でも進行でもなく、過去でもない、「時に縛られない」形というのがより正しい解釈です(p.94–95参照)。i) は足し算をする以前に真であり、したがって過程はなく、

進行も完了もありません。このレベルの真実を提示するisには、変化を表すための取っ掛かりがありません。私たちの働きかけ (doing) によって動かすことはできません。働きかけることができるのは、beの状態です。

beは時間に依存するあり方を示します。beの主語になった人は性格を変えて「一時的な自分」を演じることもできます。

He's just being nice.　　彼、優しくしてるだけよ。
You're being difficult again.　　また"困ったクン"になってる。

be difficult とare difficultの違い、よろしいでしょうか。beは可変的な状態を表すので、進行形にもなじみます。is being niceは「今優しい人でいる」ということ。そういう「意図的なやさしさ」は、日本語では「する」を使って「優しくしてる」などと言います。

am/are/isと違ってbeは意識してそう「なる」ことができます。意識して変われるのなら、それは一種の「すること」。Doで強めることが可能です。

Do be nice to Michelle.　　ぜひミシェルに優しくしてあげて。

am/are/isは、過去の時制でwas, wereに変化しますが、進行形や完了形はありません。beという別の動詞にならないと、時間と関われないのです。そんなのは「動詞」ではないと言うなら、その通りです。動きを表すのが動詞なら、動かぬ事実を示すisを反動詞と呼んでみたくなります。

The sum of interior angles of a triangle — is — 180 degrees.
三角形の内角の和は180度——である。

時間の外側にいるから、isは不変の真実を表すことができる。

このisは文法用語で繋辞（コピュラ）といって、タイムフリー。時間の世界に属していません。イコール記号（=）と同等に考えてよいものです。

CamScannerでスキャン

3-5

beの領分とdoの領分がある。

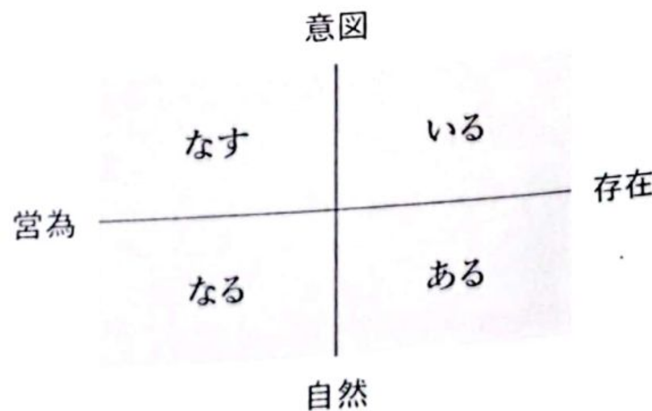


ここで日本語の「存在動詞」に目を向けます。

まず大きな特徴として、英語ではbe動詞で一括されるところに〈いる〉と〈ある〉の違いがあること。象であれ虫であれ、命あるものは〈いる〉。自ら動いてこちらと「対面」できるものは〈いる〉。時間の中をうごめく者は〈いる〉。剥製や標本になって命ある世界から出てしまうと、〈ある〉に変わります。

英語は空間に対する感度が鋭いとすれば、日本語は生命の動きに対応する感受性に秀でている、と言えるかもしれません。

〈いる—ある〉の対照に〈なす—なる〉の対照を絡めてみました。〈意図—自然〉の座標は、世間の日常と自然の巡りとを対比づけたものです。



日本語動詞の意味世界を4分割する表を、そのまま英語に直訳するわけにはいきません。信仰の文化がまるで違います。自然への信頼の代わりに、キリスト教文化圏では自然を超越した創造主への信仰があるのです。

創造主がLet there be light.（光あれ）と言うと、光が出現し、闇と分離し

ます。「ある」に先だってthe Creator(創造主体)の「する」があるわけです。新約聖書のヨハネ伝には「はじめに言葉ありき」と書かれています。「言葉は神なりき」とも。自然に先立って超越的な意図があるとする認識は、万物は土に還るという信仰と形が異なります。

ともあれ、英語の「なす」は「ある、いる、なる」を含むbe全体を向こうに回して自己完結的な世界を築いている、そう考えてよいでしょう。

営為　〈Doing〉　〈Being〉　自然
S—V—O ……　C

英語的な認識型の代表選手がSVOであることを、これまで繰り返し述べてきました。英語はSVOの構文(および類似のパターン)によって世界をdoingの所産と見る。そしてその認識の型を、英語の歴史を通して広げつつあるように見えます。

日本語はどうでしょうか。

次の日本語は、なぜ変なのか説明しなさい。

(1) 山がいる。　(2) 料理がなる。
(3) 幽霊がある。　(4) 恋をなす。

(1) 山は不動の代表として、古来から自然信仰の代表となってきました。山は崩れたり、噴いたり、長年かけて動いたりするにせよ、それには地質学的時間を要します。「居所」を変えるような真似はしません。

(2) 料理は作為の代表です。食品でなくても「うまく料理する」ことはいろいろありますが、料理されたものは、木の実と違って自生しません。「なる」の第一義は『広辞苑』によれば、「現象や物事が自然に変化していき、そのものの完成された姿をあらわす」。

CamScannerでスキャン

(3) 幽霊は「いる」としか言えません。意図を持って自在に出没するさまは、正に「いる」の語感そのもの。「いる」の実在感を英語で出そうとすると—— I see (hear, feel) something there. でしょうか。感覚系の動詞を使うとリアルな気味悪さが表現できます。

(4) いや「恋をなす」で問題ないという読者もいらっしゃるかな。「なす」の『広辞苑』第一義は「(そこに存在しなかったものを新たに) つくりあげる」。マッチング・アプリは「恋をなす」ためにあります。しかし、やっぱり恋という語は、主格で用いたい。「恋が成就する」「実る」と自動詞で言いたい。英語でも We made love. と言うと、その love は、Love grew. の love とは別物になります。自然の成就ではなく、意図的/肉体的な「すること」としてのラブ。そういうのでよければ、「なす」のもいいでしょう。

以上、日本語でも英語でも、Doing と Being は世界の認識とその表現を二分する勢力だという点が見えてきたでしょうか。一口に動詞といっても、それが意味する範囲は広い。世界と同じくらい広いのです。1つのVという記号で、動詞のすべてを代表できるという誤った考えは英語の習得の邪魔になるのではないかという懸念を持って、次の話題に移りたいと思います。

CamScannerでスキャン

3-6

「英語の5文型」を疑う。

文部科学省のサイトに「中学校学習指導要領」が出ています。「第9節外国語」の「文法事項」のところを覗いてみますと、(ア) 文［の種類］に続いて(イ) 文構造の項目があり、

a［主語＋動詞］
b［主語＋動詞＋補語］
c［主語＋動詞＋目的語］
d［主語＋動詞＋間接目的語＋直接目的語］
e［主語＋動詞＋目的語＋補語］

と5つの文型が特権的に扱われています。

「カムカム英語」から四分の三世紀、昭和のオリンピックからも60年近くが経過し、その間、あんなにも英語教育の改革が叫ばれ続けてきましたが、行政の総本山の指導要領の内実はピクともしませんでした。

5文型、お忘れでしょうか。

上記のaからeまで思い出していただくために、日本の5文型教育の祖とされる細江逸記の『英文法汎論』に掲げられた例文をまとめてみます。

	主部	述部		述部の構成
第1形式の文	Dogs	bark.		述語
第2形式の文	It	was	he.	述語ー補語
第3形式の文	Cats	catch	mice.	述語ー目的
第4形式の文	I	gave him	(a) book	述語ー間接目的ー直接目的
第5形式の文	Father	made me	(a) merchant.	述語ー目的ー目的補語

CamScannerでスキャン

『英文法汎論』は初版の発行が1917年（大正6年）。再版（1926）は国会図書館のデジタルコレクションに入っていて、ネットで誰でも見ることができます。この書物はその後も増補改訂を重ね、死後は弟子筋が遺稿を加え、1971年刊行の『改訂新版 英文法汎論』は今もネット書店から手に入るという、それほど日本の文法教育に資した、もちろん中身もたいへん充実した書物です。

由緒あるその文法書を覗いてみると、第1章「語の集合」から入って、第2章「文成立の基本形式」では、まず「英語の動詞はおよそ次の2大別5小類に分けられる」として5つの動詞タイプが提示されます。

I 自動詞	A:完全陳述自動詞	come, go, sleep
	B:不完全陳述自動詞	be, become, seem
II 他動詞	C:単純他動詞	catch, kill, study
	D:付与動詞	give, send, show
	E:作為動詞	make, christen, elect

呼び名が独特ですが、sleepという動詞はI sleep.だけで文が完成するから「完全陳述自動詞」というのは理に適（かな）っています。seemでは文が終われず、It seems odd.と「補語」を伴って完結する動詞を「不完全陳述自動詞」と呼ぶのも納得です。ただしこれは**述語動詞の形式を分類するという話で、文型と直接の関係はありません。**

しかし細江自身は、これら動詞の5類型こそが「文成立の基本形式に5種の別が生じるゆえん」と説明しています。きっと彼は、動詞の接続能力を基に、文が文として安定するパターンについて考えていたのでしょう。前ページ下の分類表を、もう一度ごらんください。

文の構成要素に注意深く1語ずつ置いていく。この研究姿勢は、どこか化学のそれと似たところがあります。さまざまな基本元素がどのような「腕」を持ってO_2やCO_2を組み立てていくか、その様子を観察する。ミニマルな要素から成る英文を取り出し、それらが、どのような基本型に分かれるか見ていくというやり方です。

CamScannerでスキャン

ところで細江逸記の分類表には、英書の原典（*An Advanced English Syntax*, 1904）があることが知られています。著者アニアンズ（C. T. Onions）は、『オックスフォード英語大辞典』の執筆にも携わったフィロロジスト（英語の語義とその変遷の専門家）ですが、この本は専門書ではありません。中等教育向けの文法教材シリーズの一冊です。

宮脇の調査[*1]によれば、このシリーズは、1880年代半ばのバーミンガムで、E. A. ソネンシャインという古典語学の教授が、文法教育における用語を統一することを訴えて作った「文法協会」による刊行物なのだそうです。ソネンシャイン自身、アニアンズに先立つこと15年、1889年に『学校用英文法』というA. J. クーパーとの共著を出しています。「分析と構文」と題するその第2部を見ると、アニアンズの本と、例文までほとんど等しい。それもそのはずで、アニアンズはソネンシャインの教え子。師の依頼によって、構文に関する「上級編」を書いてシリーズに加えた。書名の副題に「文法協会の原則と要件に基づく」の一言があるのは、そうした事情を伝えています。

THIRD FORM OF THE PREDICATE.[*2]

SUBJECT	PREDICATE	
	Verb	Object
Cats	catch	mice
The sea	hath	its pearls
Many hands	make	light work
Nobody	wishes	to know
He	can (§ 30)	tell

Charles. Talbut Onions, *An Advanced English Syntax:Based on the Principles and Requirements of the Grammatical Society* (London: Swan Sonnenschein & Co. Ltd., 1904) p.7.

＊1　宮脇正孝「5文型の源流を遡る」『専修大学人文論集』Vol. 90, pp. 437–465.

＊2　"He can tell" のcanを「動詞」に分類したことの語源に基づく説明が、この本の§30で与えられている。この場合tellは原形不定詞で、構文上の品詞は名詞となる。

CamScannerでスキャン

さて、ソネンシャインが中心となって設立された「文法協会」は、中等教育の改革をめざす一地方の同志の集まりでした。外国語の教育で、同等の概念を表す文法用語が言語ごとに別な呼び名になっているのでは都合が悪いと、用語の統一を呼びかけ、統一された基準の教材を出版していく。まずは英語からということで、ソネンシャイン自身が共同執筆者と書いた本が前述の『学校用英文法』(*An English Grammar for Schools, Part II: Analysis and Syntax*)であったわけです。

ただ協会(文法用語選定委員会)の方針に沿って書かれた5つの型に「文型」という表現は見えません。クーパーとソネンシャインの冊子もアニアンズの冊子も、共に、the first form of predicate(述部の第1形式)などの言葉遣いに終始しています。

「述語の5つの形式」という教育項目はイギリスでは早々に消失してしまったようで、宮脇によれば、1911年に同委員会が出した文法用語に関する報告書にその記載はなく、ソネンシャインの後の著書 *A New English Grammar* (1916) にも、私たちの親しんでいる文型の5分法は登場しません。

100年後の日本でも繁栄している「5文型」。「日本三景」「春の七草」「なくて七癖」というように、私たちの文化が、世界を数の鋳型にはめて見ることを好むからでしょうか。どうもそれだけではないようです。

日本の教育現場で「5文型」が重宝されるのは、英単語の列を前に途方に暮れる生徒たちに、「てにをは」をあてがい、それを足掛かりに理解するすべを与えてくれるからではないか、と私は考えています。

(1) SVは「～は～する」と訳す。英語は主語と動詞からできているのだ。——これは何より重要な公理です。

(2) SVCは「～は～である」、または「～は～になる」と訳す。

(3) SVOは「～は～を～する」と訳す。同じVでも、Cをとるvと、OをとるVでは異なるのだ。——これも枢要な学習項目です。

CamScannerでスキャン

(4) SVOOのパターンに要注意。目的語が2つあるが、最初のOを「〜に」次のOを「〜を」と訳せばよい。I gave him bread. は「彼にパンを与えた」と訳す。

(5) SVOCのOは、目的語だから「〜を」を付ける。Cの訳し方はさまざまである。We call him John. であれば、「彼をジョンと呼ぶ」となり、He made her happy. ならば「彼女を幸せにした」となる。

5文型の教えとは、このように、英語の基本を成す異なった述語形式の例文を、日本語の型に当てはめて理解させるための効率的なツールとして、かくも長きに渡って重宝がられているのでしょう。

まとめ

- **英文法教育の根幹を成す「5文型」は、19世紀末の英国の一都市の、中等教育改革の試みの中で、初めて明記された。**
- **細江逸記の『英文法汎論』が、大正期にその分類を権威づけ、以後日本では、英語学習の基本として伝承され続けている。**

CamScannerでスキャン

3-7

SVOとCは協調しつつせめぎ合う。

細江の言う「文成立の5つの形式」は、英語の述語を演繹的に分類したものです。「演繹的」とは、前提とする命題から、論理的に結論を導いていくやり方です。(1)動詞は自動詞と他動詞に分かれる。(2)他動詞は目的語を1つ取るのものと2つ取るものがあり、(3)また目的語の他に補語を取るものがある。(4)自動詞にはそれで文意を完結させる場合と、補語を必要とする場合がある。

そのように定めると、全体で5つのカテゴリーに分かれますね(自動詞2種類、他動詞3種類)。実はそこが出発点なんです。それらのパターンは、英語動詞句の現実をどの程度正確に捉えるものか、今度は実証的に見ていかなくてはならない……。

演繹的なやり方に対し「帰納的」な文型研究も存在するでしょう。実際に英語の動詞句はどういうパターンをとるのか、それを正確に写し取っていくというアプローチです。

hopeとwantとwishは、どれも「望み」を表す動詞ですが、未来への希望として望む(hope)、現在の欲望として望む(want)、無理と知りつつ望む(wish)という違いがあります。そしてその違いが、後続する要素の形の違いを生んでいる。次の例文で、*の付いたものは、文法的に認められない「非文」です。

I hope you will come.	*I hope you to come.
I want you to come.	*I want you will come.
I wish you could come.	*I wish you will come.

CamScannerでスキャン

英語の動詞はどのような後置パターンをとるか、その全貌を、*Oxford Advanced Learner's Dictionary*（1948）の編纂者として知られるA. S. ホーンビー（1898–1978）の詳細な調査研究が明らかにしています。日本滞在の長かったホーンビー教授の著書*Guide to Patterns and Usage in English*（第2版、1975）を見ると、動詞のパターン（VP）として、[VP1]から[VP25]までのカテゴリーが載っています。いえ、パターンは25に尽きるわけではありません。さらに下位区分された記述は93項に及び、80の表に858の基本例文がまとめられている。英語を真にマスターしようと思ったら、これほどの違った型を学ばなくてはいけないのか——と思うと、誰だって5文型を学んで済ませられたらと願うことでしょう。

むやみに文型を増やしていく代わりに、文型の背後にある〈結びつきのパターン〉を見ていくことは有用ではないでしょうか。5文型に代わって、2種類の結合を考えます。英語文を芽吹かせ、伸ばしていく、対照的な2種類の成長パターンを見ていきましょう。

第1の成長パターン——何らかの事物（S）が動詞（V）を介して物事（O）に作用するさまを直線でつなぐトランジティブ（他動詞的）な動き。これによってSVOのパターンが形成される。

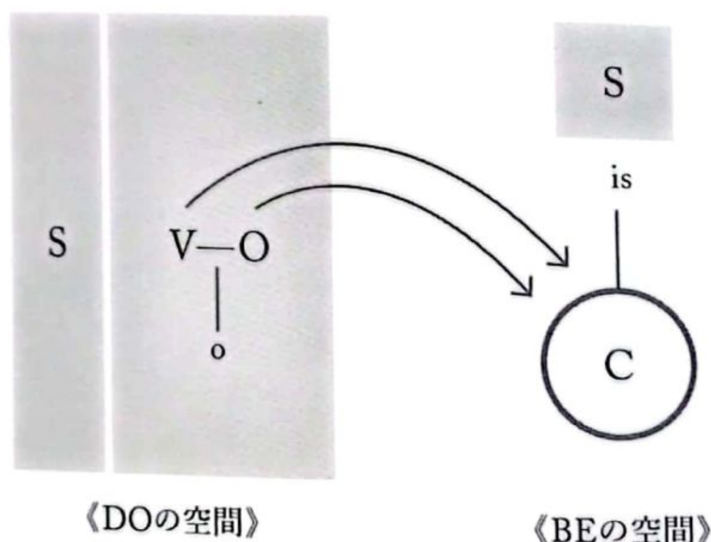
SVOのOはφ（ゼロ）であっても一価（O）であっても、二価（OO）であってもよい。**それぞれSV、SVO、SVOOのパターンで安定する。**

SVOのVにbe動詞は含まない。Vに入る動詞はすべてdoで代用しうる。それらを「do動詞」と総称する。

第2の成長パターン——物事のありさまや、空間に物事があるさまをCで表す。Cは名詞、様態詞、空間詞など諸々の形がある。動詞は「分詞」や「不定詞」に変化しないとCにはなれない。**Cはセンテンス空間を浮遊し、be動詞を介してS（主語）と結ばれ文になるほか、**さまざまな形で、他の要素に付着する。

CamScannerでスキャン

両者の混交――トランジティブな作用線は、本来行き着くべき名詞ではなく、「様態」や「空間」を表す語（いわゆる「補語」）に行き着くことも許される。逆に、C（様態詞、空間詞、分詞など）がbe以外の動詞を介してSと結ばれるケースもある。さらにCは意味上の主語と直結して「ネクサス」を生じ、それ全体として、構文の要素としてふるまうことができる。Cの自由な振る舞いが、英語文の表現力をどれほど豊かにしているかは、独立した論考に値する。



《DOの空間》　《BEの空間》

SVOの宇宙は、強い拘束力を伴う堅固な構造が支配しています。これに対して、be動詞が文をまとめるときに発揮されるのは「弱い力」。弱くて広範な対象にあまねく働く力です。

S	[is]	C	情報の種類
Jean	is	in her room.	どこにいる
She	is	doing her homework.	何をしてる
Her books	are	new.	どんなだ
Jean	is	a teenage girl.	何だ／だれだ
Her homework	is	done.	どうなった
Her day	is	over.	どうなった

CamScannerでスキャン

Cに入るフレーズの多様さに驚きますね。何でもござれという感じ。「場所」も「行動」も「状態」も「性格」も「実体」も。「どこ」も「何」も「だれ」も「どんな」も「いかに」も、とにかく「ある」「にある」「である」に繋がることなら何でも「補語」にできてしまう。

この構造のゆるさがポイントです。be動詞の「自由自在」は、英語がそれ自身を統語する際の要となるところではないでしょうか。

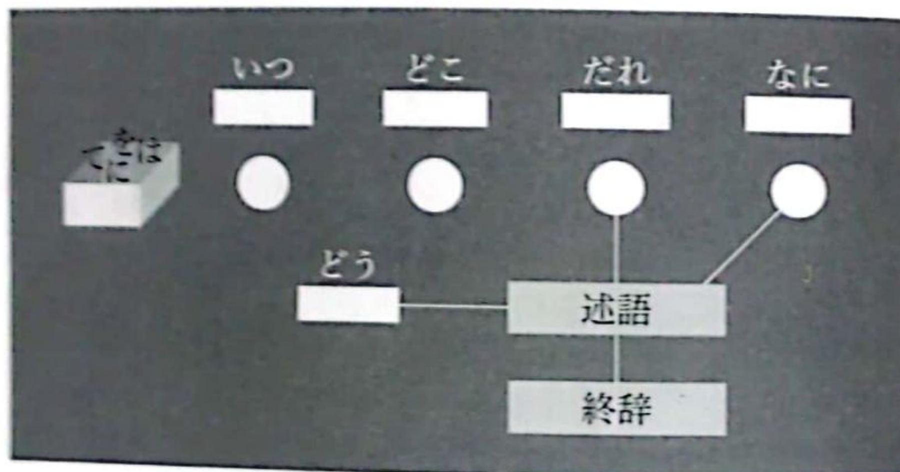
SVOのOは名詞しか受けつけません。SVOは、存在者（抽象的存在を含む）同士のやりとりを記すものです。動詞 isが主語と補語をつなぐやり方は、それとは根本から違っています。

3-8

日本語は、構文の拘束がとても弱い。

〈SentenceSpace〉[2-9] に話を戻して、その日本語版を考えてみます。

日本語の構文図解は、樹形図にしたがってやってきました。改めてゲームの初期画面をイメージしてみます。



日本語文は、述語の「植え付け」が終わったところで成立します。述語は動詞とは限りません。「君は若い」でも、「もう若くない」でも文になる。「外は静かだ」── これも動詞はない。「だ」の成立過程に「ある」が埋もれている[*3]という議論もできますが、現代では「ある」の意は消えました。

日本語の述語とその根差し（終辞）部分の話を始めると、敬語だの時制だの受け身だの伝聞だの、話があまりに複雑になるので、名詞を述語につなぐ部分に限って画面を想像することにしましょう。

---

*3　にてある→である→であ（じゃ）→だ

CamScannerでスキャン

ボックスに、[に、を、は、が、へ、で、から、の……] などが用意されています。名詞のボックスから「わたる」と「リカ」を選び、「わたる」を選ぶと「する人」か「される人」かを聞いてくるので「する人」を選ぶと、さらに「が」か「は」の選択肢が出るから「わたるが」と決定する。

「リカ」は「される人」で、ここは「へ」ではなく「に」を選ぶ。同様に「チョコレート」には「を」。

そんな具合に進めていけば、「わたる君がリカちゃんにチョコレートをあげた」という文に、いずれは行き着くでしょう。

	わたる君	リカちゃん	チョコレート		
i)	が	に	を	⇒	あげる
ii)	は	へ	を	⇒	おくる
iii)	から	へ	が	⇒	とどく
iv)	に	から	が	⇒	もどる
v)	は	を	で	⇒	せめる

「わたる君」のあとを「から」に変えると、「リカちゃん」の後を「へ」に変えますか？と、プログラムが聞いてきます。確定を押すと、「チョコレート」の後が自動的に「が」に変わり、動詞をどうするか、いくつもの選択肢が現れます。

わたる君のあとに「を」を入れました、あとをどうしますか？
わたる君を リカちゃんが チョコレート ［　　］ ⇒ ［どうする。］

チョコレートで飾る？　チョコレートから守る？　チョコレートでいたぶる？——なんだか想像の数だけ違った答えが出てくる感じですね。

CamScannerでスキャン

こうしてみると、日本語と英語はだいぶゲームのルールが違うようです。最初にSVで話を固めてしまわないので、話しながらさまざまなコースがとれる。相手の顔色をうかがいながら、

うちの息子なんですがね、そいつがどうもこの頃なんというか、理由は女の子に振られたってことらしいんですが、飯を食うときもなんだか陰気くさくて——なもんですから、俺、言ってやったんです……

うちの息子の話をするぞ、と主題は設定しておいて、まわりから関連した話を寄せ集めてくる。それで話がのらりくらり進んでいく。「息子がどうした」と言わずに話が進む。どうしたか、どうしなかったのか——肯定か否定かを決める必要すらないかのようですが、それで案外、効率的に話が伝わる。落語の名演を文字起こしすると、話芸の論理とは何なのか、考えさせられてしまいます。

英語でも、まとまらない話をする人は多いですが、言語自体の構造はそれとは別。英語の場合、構造が硬い。主語の次に動詞（肯定形か否定形）が必要。しかも下の例を見ても、動詞の選択肢はそう多くありません。SVOの構造が、言葉を選び決定していく堅固さに、私たちは慣れていかなくてはなりません。

Wataru —— [　　] —— Rika —— a bar of chocolate.　…①

空欄に入る1語は、（過去時制に限定すると）おそらく、gave, bought, got, sent, fedあたりに限られるのではないでしょうか。Google検索が助けになります。"You * me a bar of chocolate" などと、" " を付けたまま検索をかけると、*に当てはまる数語の語列がたくさんヒットするでしょう。

3-9

英語は屈折をやめて背骨を強くした。

前項の日本語文のゲームで、日本語の「てにをは」をいろいろ動かしました。その5つの例文を英語にして比べてみましょう。

i) Wataru	gives	Rika	a bar of chocolate.
ii) Wataru	sends	Rika	a bar of chocolate.
iii) Chocolate	is delivered	from Wataru	to Rika.
iv) Rika	sends back	the chocolate	to Wataru.
v) Wataru	tortures	Rika	with chocolate.

英語でも前置詞は必要なときは必要です。しかし、日本語の助詞に比べると、数は圧倒的に少ない。

「が」「に」「を」「は」が軒並み消えて──背骨の部位の接続に飲み込まれて──わずかに「から」と「へ」が残ったにすぎません。

「が」と「を」が消えるのは英語文の常です。SVO構文は、いわば「が」と「を」の消失によって成立しました。でもこの文では i) の「に・あげる」のところ、ii) の「へ・送る」のところも前置詞の脱落が起きています。そして文全体の4つの要素が串刺しの関係によって表示されている。

S── V── O── O

~~が~~ ~~する~~ ~~に~~ ~~を~~

歴史的に見れば、英語にも「～に」に当たる**与格**が、「～を」を示す**対格**と別にあったのです。今でもドイツ語にはあります。ビートルズの "I want to

CamScannerでスキャン

hold your hand." と "She loves you" は、ドイツ語版ではこう歌われています。

♪ *Komm gib mir deine hand* (Come give me your hand)
♪ *Sie liebt dich* (She loves you)

Give me の me は与格（私に）なので、ドイツ語では Gib mir（ギブ・ミア）となり、loves me の me は対格（私を）なので liebt mich（リーブト・ミッヒ）となる。その「ミア」と「ミッヒ」の区別を英語はなくしたわけです。語順を定めれば、それで十分意味は通ると。

そうしてできあがった「SVOO型」と呼ばれる文型では、Vから伸びる他動詞の（トランジティブな）作用線が、与格の「間接目的語」を貫いて対格の「直接目的語」に届いています。

	間接目的語	直接目的語
buy ———	you ———→	a diamond ring
買う	君に	ダイヤの指輪を
make ———	us ———→	some coffee
つくる	自分たちに	コーヒーを

下の例は文型を取り違えると「私たちを（ある分量の）コーヒーにしてしまう」という意味にもなりえます。でもそれは文脈と常識が止めてくれるでしょう。

カッコ内の言葉を使い、SVOOの構文で言ってみよう。

(1) もう一度私にチャンスをください。 (one more chance)
(2) 下の娘にお話を読んで聞かせた。 (my younger daughter, a story)
(3) なにか取ってきてあげましょうか？ (get, something)
(4) 君に一つ借りがある。 (owe, one)
(5) 一つ約束して。 (promise, one thing)

CamScannerでスキャン

(1) Give me one more chance.

ジョン・レノンの歌に "Give Peace a Chance" というのがありました。邦題の「平和を我等に」を直訳すれば "Give us peace" になるところを、ジョンは平和を擬人化し、チャンスを与えろ、平和が活躍する機会を奪うな、と訴えています。

(2) I read my younger daughter a story.

「読んで聞かせる」「歌って聴かせる」「書き送る」は、read you a poem, sing you a song, write you a message。ただし与格があまり長くなるとSVOOの構文に負担がかかるので、たとえば (2) の「下の娘」を「孫の一人」にする場合、I read a story *for* one of my grandchildren. などのように言います。SVOOの与格の言い換えには、Give it to me. などtoを用いると教えますが、「読んで聞かせる」というように愛情が重要な文脈ではtoよりも、相手に向けて差し出すイメージのあるforを使うことを心掛けてください。

(3) Can I get you something?

パーティでテーブルに並んだドリンクを取ってきたり、「売店に行くんだけど、何かいる？」みたいな状況では、getがベスト。bringでもいいのですが、「あなたのためにゲットする」の気持ちはやはりget you ... で示します。

(4) I owe you one.

oweは「負う」「〜に借りがある」という意味で「誰に」「どれだけ」をVOOの構文で示します。何かおごってもらったとき、「次はぼくがおごるから」の意味合いで感謝を示す言葉として使えます。

(5) Promise me one thing.

これも常套句のようによく使う表現です。

3-10

{主語付きの出来事}も Oにする。



S－V－Oの発展形態をもう一つ。こちらも重要項目です。

一つの出来事は主語と述語で出来ているので、その出来事を「見る」とか「聞く」とかいう場合、その対象（O）に主語述語の両方を組み込めると便利です。英語ではそれが可能。

{カエルが跳ぶ}の－を－見る　⇒　see {a frog jump}
{カエルが跳ぶ}をなす
カエルを跳ばせる　⇒　make {a frog jump}

このV－{s-v}という構造に注目してください。{　}は全体でVに対するOですが、その内部に{主述}の要素が入っている。つまりこれは出来事を丸ごと目的語にする言い方です。次の2つの文を比べてみてください。

i) I heard {him sing}.　{彼が歌う}のを私は聞いた。
ii) I heard that he sang.　「彼は歌った」と私は聞いた。

i)のhimは目的格（I heardの対象）ですが、同時にsingの主語になっています。{him sing}全体を1つの名詞句として、heardの目的語（対象）にすると、意味を取り違えることがありません。

ii)は「彼が歌った」（that he sang）という出来事があったと（人づてに）聞いたという意味になります。「that節」もそれ全体が名詞で、heardの目的語と見なしますが、「節」は実質「文」です。節の中には述語（時制付きの動詞）があって、1つの物語が語られています。

make a frog jumpに戻って考えると、この{a frog jump}は「文」ではないので、a frog jumpsとはしない。jumpsとすると、時制と人称付きの述語動詞になり、「カエルが跳ねます」というお話ができあがって、makeの目的語ではいられなくなるのです。

知覚と伝聞との違いを確認してください。芭蕉は{蛙、飛び込む}、を聞いたのであって、「蛙が飛び込んだ」という話を聞いたのではありません。両者の間には直接性の違いがあります。知覚の対象は出来事であっても、お話ではなく、モノに近い。モノのように、SVOのOに収まります。

主語一述語の意味的つながりを持ちながら、全体としてseeやmakeの目的語になる、その{　　}の括りを、昔(1920年代)デンマークの偉大な文法哲学者オットー・イエスペルセンが「ネクサス」(nexus)と名付けました。ラテン語で「つながり／まとまり」を表す「ネクサス」は、主述関係にある語の並びを1つの名詞句のように捉えたものと言えます。

出来事を目的語とする動詞には他にどんなものが考えられますか？seeやhearの他に、知覚系の動詞にはfeelやfindがあります。

iii) I felt it go.　　それが消えていくのを感じた。
iv) I found it gone.　　それがないのに気がついた。
(気がついたらもうなかった。)

iii)のネクサス{it go}を文に開けばIt goes.となります。iv)の{it gone}はIt's gone.としないと文になりません。逆に言うと、ネクサス内では動詞isは消えるのです。isの働きはそもそも主語を補語と結んで文を成すことですから、その文がネクサスとして名詞句化すれば、isに居場所はありません。消えるしかないのです。

では次の文はどういう構造になっているでしょう。

CamScannerでスキャン

S — V — O　　adv.[*4]　　　S　V　　　　O

v) I found her in my room.　　vi) I found {her – in my room}.

俺の部屋で、彼女を見つけた。　　{彼女が俺の部屋に（いる）}のを見つけた。

両者で、in her roomの主語が違っています。

v) の日本語訳は、厳密に訳し返すと、I was in my room when I saw her. となるでしょう。vi) の日本語訳はShe was in my room when I looked. という解釈です。

v) とvi) の区別を英語はしません（話者はするかもしれませんが）。「で」も「に」も持たない英語は、いかにつながっているかは明示しない。**語を並べて意味が通れば、それ以上のことにコトバは関与しない。**「in her roomの主語はなくてかまわない」── これが〈英語〉の取っている姿勢です。v) かvi) か、区別が必要な場合は区別がつくように言えばいいのです。

知覚動詞のseeや使役動詞のmakeのほか、人や物の状態をどうするか、その判断を示すkeep, leave, let, helpなどの動詞も目的語にネクサスをとります。以下、確かめてみてください。

（　　）の中に適切な動詞を入れなさい。

(1) 暖かくしていなさい。　（　　）yourself warm.
(2) 今夜を私たちのものに。　（　　）this evening be ours.
(3) 終わらすの、手伝って。　（　　）me finish it.
(4) 私のこと構わないで。　（　　）me alone.

順にKeep, Let, Help, Leaveが入ったでしょうか？

＊4　副詞句をadv.の略語で示した。これを補語と見るか、「補語」とは違う「付加詞」と見るかについては、[4-3] を参照のこと。

第4章

文の形成を、
名詞を発芽する動詞の
はたらきに求めること。



4-1

英語の動詞は、自・他の間を行き来する。

前章の最後の2項では、SVOOとSVOCのパターンに目を向けてみました。これらもまた大きく見ればSVOの一種であり、スリー・ステップの理解のパターン[2-4]に収めて習得するのが、実技の力を伸ばす上でのポイントです。

第4章では「文型の違い」を頭の中から消去して、動詞の柔軟な動きそのものを追っていくというアプローチをとります。まず、自動詞と他動詞を分かつ壁のうち、不要なところを壊していきましょう。

walkと言えば、「歩く」という意味の自動詞だと思いがちですが、英語の動詞はパターンの活用に貪欲です。

S V O C
I'll walk you home.　　君を家まで送っていくよ。

同じwalkがSVOCのパターンをとりました。人を目的語のスポットに入れて他動詞になったwalkは、行き先を言わないと居心地が悪いので、walk-you-homeのような語順をとるのです。

実のところwalkを「歩く」と訳して、勝手に動詞として捉えるのは、私たちが、品詞ごとに形を違える日本語でものを考えているせいであって、walk自体は漢語の「歩」に近い単なるイメージです。それがS—Vのパターンを発現するなら自動詞、SVOを生成するなら他動詞、SVOのSかOにはまるなら名詞になるだけのことです。ただし名詞になるときは、その印（品詞のマーカー）として、冠詞を被る必要も生じます。

名詞のマーカーとしては、a, the の他、some, any, no, much, all, a great deal of など、一群の「限定詞」があります。これも英文法を哲学するときには欠かせないテーマですが、本書では扱えませんでした。

I had such a pleasant walk.　とっても気持ちいい歩きだったわ。

このaという冠詞（正式には「限定詞」）が名詞句の印。一方、hadがとる過去のテンスが、述語動詞の印です。

この問題は［**2-10**］で検討しました。英文のポイントは、文中の語のうちどれがVになるか、そしてそのVはOを伴うか伴わないかという点です。SVでストップして、後に副詞句を付け足すか、SVOに収めるか。効率は後者の方がよさそうです。

これもよく引かれる例ですが、「風」「閉」「戸」という3つの概念を思い浮かべてください。この3つの概念をつなげようとすると「風で戸が閉まる」という日本語が自然だろうと思います。「風が戸を閉める」は、無機的存在である「風」にあえて「意図」を与える、どこか詩的な文になります。

英語の場合、wind, close, door をどうつなぐのが自然か。これが日本語と違うんです。

動詞の事情を考えてみてください。戸を主語にしてThe door closed. と言ってしまうと、「風」の要素をSVOに含めることができず、副詞句（添え物の句）を付けなくてはならなくなります。

i) The door closed …… because of the wind.
　風ゆえに戸がクローズした。
ii) The wind closed the door.

i)は、SVOを抱え持った心には、まだるっこしいはずです。ii)のようにすればワン・ツー・スリーのリズムを崩さず心地よくスコアできるでしょ

CamScannerでスキャン

う [2-4]。

3つの概念を組み合わせて、コンパクトな英文にしよう。

(1) 彼 (he / him)　離婚 (divorce)　痛打 (hit ... hard)
(2) 我々 (we / us)　真空 (vacuum)　絨毯 (carpet)

(1) 日本語なら「彼は離婚の痛打を受けた」で締まりのいい文になります。英語の場合、divorceとhitのどちらを動詞に据えたら良いか。divorceを動詞にして離婚の経緯を語り出すと長くなりそうですね。衝撃を言うのですから「ぶち当たる」を意味するhitがいいのではないでしょうか。ネガティブな心情を、英語では、何かの作用の結果として――風を浴びて閉じた戸と同じ形式で――語ります。当人を目的語に置くのです。

The divorce hits him hard.　離婚のせいで、彼は辛い。

「離婚 (S) が彼 (O) にきつくぶち当たっている」という、物理的な発想をとるのは、別に思いやりに欠けるからではありません。単に表現の経済性の問題。効率を求めて、英語の動詞は他動詞になりたがるのです。

(2) これは、電気掃除機をvacuum cleanerと呼ぶことに慣れていないと難しいかもしれません。そのvacuumをVにしてSVOに入れてしまう。そうすると、まるで〈英語〉がその効率を喜んでいるかのような気持ちのいい文ができるのです。

We'll vacuum the carpet.　絨毯に掃除機をかけるぞ。

このように英語の動詞は、他動詞のスポットに収まる――1つより2つの名詞と結合する――ことを好む性質があります。

自動詞と他動詞とで形が変わることは普通ありません。日本語のように

CamScannerでスキャン

「〜が」の後では「閉まる、湿る、腐る」となり、「〜を」の後では「締める、湿らす、腐らせる」とは変化しません。Oを離せば自動詞、引き寄せれば他動詞、それだけのこと。

These atoms don't usually ionize, but by using this,
we can easily ionize them.

これらの原子は普通イオン化しない（自動詞）が、
これで簡単にイオン化することができる。（他動詞）

といった具合です。この動詞は他動詞だから、自動詞だから、と神経質になることはない、ということですね。

たとえば、connectは他動詞として使うことが過去には多かったとはいえ、「つなげる」と「つながる」の違いが英語にあるわけではない。インターネットの時代に入れば、

My PC won't connect to Wi-Fi.

という言い方が普通になる。「話が（論理が）つながらない」なら

It just doesn't connect.

と言えばいい。

接頭語en-を付けた語は他動詞で用いるという一般則があり、enjoyという動詞がOを必要とする、という決まりも、ある程度忠実に守られてきました。でもコトバは生き物です。「自然」に逆らって効率を悪くすることはしない。enjoyから不要な目的語を引っ込めて、たった一言

Enjoy!

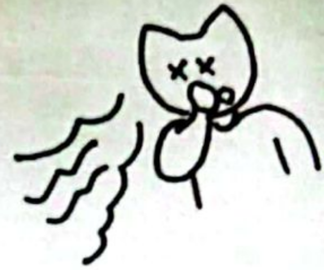
と言うのは、レストランの給仕係や、デートに出る若者を見送る親だけではありません。おもちゃの宣伝にも

Just enjoy for hours together.　何時間でも一緒にお楽しみください。

とあるように、自動詞のenjoyが溢れています。

4-2

1つの動詞が「文型」を横切って使われる。



同じ動詞を形を変えずに、異なる文型に当てはめていく。その様子を、引き続き観察します。

においを表す語smellは、文脈次第で名詞にも動詞になるし、動詞として使う場合も、文型に応じて、さまざまな意味になります。

i）You smell.　　(SV)

これはまずい。「あんた臭うよ」ではケンカを売るようなもの。しかし smell をSVOのパターンで使えば意味は一転します。

ii）You smell this.　　(SVO)

主語付きの命令文になりました――「あんた、これ嗅いでごらん」。

Vで止まってしまうSV型と、目的語と結ばれて意味をなすSVO型との違いが、smellという語の"意味"に変化を及ぼしたということです。

動詞の意味も、それが置かれた構文によって大きく動きます。生き生きとした基本語に、定まった意味をあてがうことは不可能に近い。これがコトバの真実だと思います。

さてi）を口にしたあと、「あんたは臭う」という意味を保ちながら、その意味に変更を加える言葉（補語）を後ろに付けることができます。

CamScannerでスキャン

iii) You smell good.　　(SVC)

mellという語は単に「臭」を意味するだけで、動詞に使う場合「臭いがす」なのか「臭いをかぐ」なのかの区別もない。すべて文脈まかせ。smellのにgoodが付けば「いい匂いがする」ってことかと判断がつく。この辺、英という言語もかなり緩くできています。嗅覚や触覚といった動物的な感に対して、西洋の言語は大ざっぱなのでしょうか。

今度はfeelを見ていきましょう。
eelはまず、feelとNの結合で「Nを感じる」の意味となります。

Feel this object.　(VO)

この物体に触って（感触をたしかめて）ごらん。

eelはまた、ある種の様態詞を引き寄せ、feel Cの形で、「Cと感じる」の味になります。

You feel fine?　　(SVC)　　気持ち悪くない？

このようにVのあとにN（名詞イメージ）ではなく、形容詞が続く場合一つまり、行為や作用の「対象」ではなく、主語の様態にかかわる語を自詞を介してつなぐ場合——そのような形容詞を、英文法では「補語」と呼できました。
このSVCのパターンに慣れると表現が広がります。実はこの形式は、ずぶん幅広い意味領域をカバーしているのです。

覚される状態	look …… depressed	落ち込んで見える
	feel …… great	すばらしい気分に感じる

変化→結果	grow …… older	年齢を重ねる
	turn …… yellow	黄色く変化する
	become …… friends	友達になる
進行→結果	go …… bad	(食べ物が)腐る
動き→結果	break …… loose	(膠着(こうちゃく)や捕囚から)抜け出す
試験→結果	proved …… (to be) guilty	有罪が判明した
	tested …… positive for COVID-19	新型コロナのテストの結果、陽性だった

次の2つの文は、音は似ていますが構文が違います。どう説明しますか?

(a) My father grew beard.

(b) My father grew weird.

growの基本イメージは、生成・生長・生成変化にあります。

beardのような名詞(実体)を後接すると、SVOのパターンに沿って「あご髭(ひげ)を伸ばす」となる。

My father ⇒ grew ⇒ beard.　(SVO)　父が髭を伸ばした。

あご髭は自生するのですが、父の意図のもとで生えているということで、父を主語にしたSVO構文をとるのですね。これに対し、父自身の生成変化を記すのがSVCの文型です。CはSのありさまを示します。

My father ⇒ grew ⇒ weird　(SVC)
父がヘン(変なことをする人)になった。

実体に作用する他動詞growと、自動詞なのに自足せず、様態を接続する自動詞grow。文脈を見失わなければ、見分けはしっかりつくものです。

4-3

補語か付加詞か、that is NOT the question.

前章の［**3-9**］から前項［**4-2**］にかけて、動詞が生み出す英文のパターンをしっかりとおさらいしました。英文の背骨のしくみはこれでバッチリかなと思いますが、いわゆる「尾ひれ」はどうなのか、ということが問われるでしょう。すなわち「付加詞」(adjunct＝A) と呼ばれるもの。副詞、副詞句、前置詞句などの形をしているもの。それらは「補語」とは違うのか？　文の軸から切り離して考えるべきなのか？　つまり

i) She fell —— in love.　　は、次のどちらの仲間なのか？

	S	**V**	**C**	**A**
ii)	She	fell	sick.	
iii)	She	fell		into the well.

ii) は明らかにSVCの構文です。iii) はSVだけで意味が固まる。「彼女は落下した」。落ちた先がどこであれ、それは尾ひれの情報。したがって into the well は補語ではなく「付加詞」です。

で、in love は？——形は「付加詞」っぽくても、意味するところは「心の様態」。fell in love で一連(ひとつら)なりになって、文意形成の骨組みを成しているので、やはり「補語」と見るべきでしょう。

こういう事柄は、〈英語〉自体の問題ではなく〈話者〉の問題です。「補語なのか、付加詞なのか」は、私たちスピーカーが決めること。

伝統的に英文法は、この分類を、品詞区分に基づいて判断してきました。

CamScannerでスキャン

「空間を指す語句は副詞または副詞句である」「副詞句は補語から外し、付加詞にまとめる」。そうすると、前述の難問は以下のように整理されます。

iv) Get angry.　angryは形容詞で補語
v) Get there.　thereは副詞で付加詞

しかし、こういった機械的なやり方では話者の感覚と必ずしも合致しません。そもそも補語（complement）とは「文の欠けているところを補ってcompleteにするもの」。get thereのthereはまさにそれでしょう。日本語でも「彼はつく」では何の意味かよく分かりません。「付く」のか「着く」のかもわからない。英語のgetも同じく多義的です。

次のうち、thereやhereを取り去ったら文にならないのはどれか？

① You can get it there.
② You can get there soon.
③ You can't get off here.
④ You can't get through here.

①「そこで入手できます」。You can get it で文が成立し、thereは付加詞となる（付加詞のthereは、日本語で通常「そこで」と訳します）。

②このgetは空間詞を補語に要求すると考えるしかないでしょう。You can getだけでは文が成立せず、You can get *in*.とかYou can get *there*.とか「どこ」に関する情報を伴って初めて安定する。このthereは「そこで着く」とは訳せません。「そこに」または「そこへ」。日本語の助詞は、文を組み立てる機能を担っているだけに繊細にできています。ただし、日本語にした場合の助詞の違いを当てにできるのはそこまで。③のhereは「ここで降りることはできない」だから付加詞で、④は「ここを通り抜けることはできない」だからget throughの補語だ、と言えるでしょうか？

Here.もThere.も単独で「文」を成し、かつ、他の節にも句にも属すこと

CamScannerでスキャン

のできるもの、と考えればいいのではないでしょうか。そういう存在を、この本は〈C〉と呼んでいます。それで話がすむのではないでしょうか。それ自体の品詞を気にして、「補っている」だの、付いているだの、議論しなくてすむのではないでしょうか。

今確認していること——**動詞の中には〈where?〉の情報を不可欠とするものがある。他動詞が、目的語を要求するのと同様、空間的到達を意味する自動詞getなどは〈where?〉を補語にしないと文に成らない。**

もう一つ、putという動詞。こちらは、他動詞でありながら、文を成り立たせるのに位置情報を必要とします。

What did you do with it?　　あれ、どうした？　　と聞かれて
I put it.

と言ったのでは、話になりません。〈where?〉に対して応えないといけないわけで、その情報は、構文の骨組みの内部に組み入れられます。

〈who〉	V		〈what〉		〈where〉	
I ——	got	——————			up.	（自分が）起きた。
I ——	put	——	it	——	up.	それを立てた。
I ——	got	——————			to the station.	駅に着いた。
I ——	put	——	it	——	on the table.	それをテーブルに置いた。

これらの位置情報はどれも英語文の背骨の一部です。単に付着しているだけではない。このことを言い立てるのは、日本の英語教育で基盤的な役割を演じている「5文型」の理解に絡むからだけではありません。**「品詞」に基づいて構文を考える思考を逆転させ、品詞を決めるものは構文であるという発想を育む必要があるからです。**

CamScannerでスキャン

4-4

7文型は必要ない。

今私たちが扱っている補語と付加詞の問題は、専門家の間でも揉めた問題だったのでしょう。現代英文法の権威ある一冊、ランドルフ・クワーク（1920–2017）ら4人の共著*A Comprehensive Grammar of the English Language*（1985）を覗いてみると、英語圏の文法書には珍しく、懐かしの「節のタイプ」の一覧表が載っているのに気づきます。ただし、私たちが5文型として理解していたところが7文型に拡張されている。SVのあと「主格付加詞」が付くタイプと、SVOの後に「目的付加詞」が付くタイプが加わっているのです。

クワークらの考え方を簡約すれば、以下のようになります。

（1）動詞にはSVに収まる「自動詞」、SVO及びその発展形に収まる「他動詞」、SVCに収まる「コピュラ（繋辞）動詞」がある。
（2）自動詞には、SVAのパターンをとるものがあり（次ページの表の4）、
（3）他動詞には1価の他動詞（表の2）、2価の他動詞（表の5）、複合他動詞（表の6、7）がある。複合他動詞には目的語の他に補語（形容詞）をとるものと、付加詞（副詞句）をとるものがある。

以上の整理の結果は、必然的に7つのタイプを生み出します。クワークらの挙げた例文の表をそのまま引用しておきましょう。

CamScannerでスキャン

	S	V	O	C	A
1	Price	rose.			
2	Elizabeth	enjoys	classical music.		
3	Your	face	seems	familiar.	
4	My sister	lives			next door.
5	We all	wish	you a happy birthday.		
6	The president	declared	the meeting	open.	
7	The doorman	showed	the guests		into the drawing room.

A Comprehensive Grammar of the English Language (Pearson, 1985), p. 56.

クワークらは、4のnext doorや7のinto the drawing roomが文成立の必須要素であることは認めた上で、それを付加詞（adjunct）と呼ぶ習わしを守り、Cとは別の項目に入れました。

形容詞と副詞を分けて考える習慣が身についていると確かにAとCの分類は必要な気もします。でも〈英語〉にとって、——英語を論じる人間たちの意識にとってでなく——それらの違いは有意な問題なのか。**私たちが形容詞に見立てるfamiliarであっても、副詞に見立てるnext doorであっても、文の同じ位置に来て、同様に文を安定させるのなら、〈英語〉にとって——今その文を駆動している言語にとって——この2語の品詞は等価なのではないか。**

私は、補語（C）を付けるbe動詞のはたらきを、その無整理ぶり（全包括的性格）において評価するものです。品詞に関わらず何でも補語にしてしまうところが、be動詞の脱構造的なすごさであり、その緩さが潤滑剤として働かなければ、英語の統語は、すごくぎこちないものになってしまうだろうと考えるのです。do動詞と違って、品詞的アイデンティティにこだわらずに、Cを文に統合してしまうというbe動詞の持つ柔らかさが、もっと注目されてもいいのではないでしょうか［3-7］。

句を構成する副詞と形容詞の間に働きの違いがあるのはもちろんです。形容詞は名詞に付いて名詞句をつくり、

adjective + noun ⇒ N　　a pink flamingo

副詞は動詞／形容詞に付いて動詞句／形容詞句をつくります。

adverb + verb ⇒ V　　The wind was hardly blowing.
風はほとんど吹いていなかった。

しかし補語としては、両者の違いは英文に内在しません。思考者の意識の中にしかありません。

She came fast.　　のfastは副詞で、
She was fast.　　のfastは形容詞だ

とか、

She came in running.　　のrunningは現在分詞の副詞的用法で、
She was running fast.　　のrunningは形容詞的用法だとか。

区別せずにそのまま許容できるならその方がよくないですか？　英文法がその分やさしくなるだけでも、メリットは大きいでしょう。

ゲーテは植物のダイナミックな形態変化を観察しつつ、花は葉の変態したものであるというヴィジョンに行き着きました。植物の部位だけでなくコトバの部位の間にも、そうした生き物特有のアイデンティティ交換の様子が観察されはしないでしょうか。

Hold me tight. のtightはtightlyの「くだけた」形で、holdの仕方を副詞的に説明している、と考えなくてはいけないのでしょうか。

Hold ⇒ me ⇒ tight、つまり君がホールドすることで、僕たちがtightになるという理解でいいのでは？

Wind blows hard. のhardは、blowsを修飾する副詞であるとともに、windのhardさを示す主格補語でもある、としませんか？

CamScannerでスキャン

4-5

be動詞を失うことで枝になる。

Cであれ A であれ、補語であれ付言（付加詞）であれ、be動詞とつながって文を成す要素は、be動詞から切れれば、文の枝となります。

i）Jane just stood there.　　ジェインはそこを動かなかった。
ii）Her eyes were filled with tears.　　彼女の目は涙でいっぱい。

それぞれの文に述語動詞（時制付きのメインの動詞）stood、were がありますが、このうちstoodから時制を奪って述語でなくすと、分詞（standing）や不定詞（to stand）に変わります。ところが、wereの時制を取ると、beingなどとはなりません。もはや動詞自体が不要になります。

Jane just stood there
　　her eyes = full of tears.
　　~~were~~

wereを失うことで ii）は文の地位を剥奪されて、主語（her eyes）付きの補語Cとして浮遊します。この補語は、そのまま別の文に付着できるのですが、あぶなっかしければwithを付けて補強します（[3-1] の蔦の図参照）。

iii）Jane just stood there, her eyes full of tears.
iii）' Jane just stood there **with** her eyes full of tears.

この文のメインの動詞は時制の付いたstood。her eyes 以降は —— withが

CamScannerでスキャン

あってもなくても――枝（従属節）になりました。

補語は、Be動詞を介して主語と結ばれればSVC構文の文となり、Be動詞を失えば、意味上の主述関係をつくる語句連結（ネクサスないし非限定節）として別の文に付くことができる。

ここでエクササイズ。

次の状況を1つの文で語りなさい。語りは過去形で。

George —— lying　　blood —— running from his nose
実体N　　様態C　　実体N　　様態C

2つの文にするなら、それぞれをbe動詞（was）でつなげばいい。しかしコンパクトなスタイルのためには、be動詞は片方だけに付けるのがいいと思います。

iv) George lay there, blood running from his nose.
ジョージはそこに横たわり、鼻からは血が流れていた。

とやれば完璧です。付着する節は、述語動詞のwasがないので「非限定節」などと呼ばれます。ただこれが節なのか句なのかはなかなか微妙です[3-1]。

v) I saw {blood running from his nose}.

という構文の中では、{ネクサス}としてsawの目的語になるわけだし、withが付くなら、これ全体が「名詞句相当」であるはずです。

主語付きの句か、不完全な節か、私たちの意識は、AかBかを知りたがる。その声に耳を貸す必要はありません。節であれ句であれ、述語がなければ完全節（＝文）にはなれない、他の文の枝（構成要素）にしかなれないこと。

その点を押さえておけば不自由はありません。

前ページの例は主語が2つ出てきましたが、こんなケースはどうなるでしょう。

次の光景を1つの文として語りなさい。

the bulldozer	moving on	knocking everything down
実体	様態1	様態2

実体と様態1をbe動詞で結べば文になりますが、物語は単純なSVの叙述文を好むので、様態1はメインの動詞に戻します。その後に、knockingはそのまま付けることができます。結果は「分詞構文」として親しまれている文型になるでしょう。

vi) The bulldozer moved on knocking everything down.

この文が、The bulldozer moved on. ……①
It was knocking everything down. ……②
という2つの文を、いわば圧縮したものであることは言うまでもありません。

SVO的世界とCの世界、doingとbeingが意味の宇宙の全体を、相互に侵食し合うようにして、支えている、その様子を引き続き観察していきましょう。

4-6

補語は主語を着脱する。

文の構成の話が、前回から文の接ぎ木の話に変わっていますが、先を続けます。

SVXでつくられた節（単文）に別の節を付ける場合、次の方法があることを確認していきましょう。

(1)　接続詞を用いて「完全な節」を付ける方法
(2-a) 補語Cをそのまま付ける（掛ける）方法
(2-b) Cに意味上の主語を（be動詞を介さずに）付けてから、
その不完全な節を掛ける方法

(1)「完全な節」については理解しやすいところです。

Jack is by her side.　　Jill is happy.

この2つの文を接続詞 because でつないで

Jill is happy, because Jack is by her side.

Because の付いた節は、動詞に時制もあり、ちゃんとした文になっている。2つの文が地に足を付けたままつながり合っています。

Jill ┬ happy …… because …… Jack ┬ by her side.
is　　　　　　　　　　　　　　　　　is

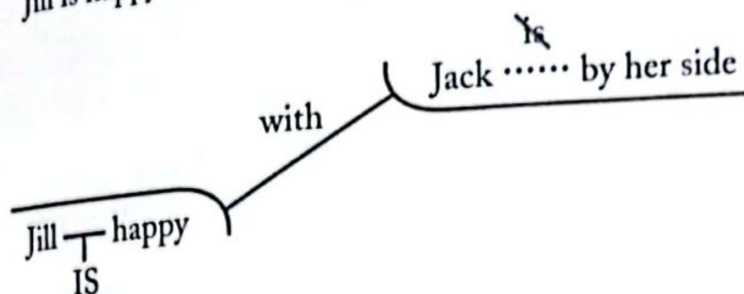
(2-a) には次のような文が、みな含まれます。

Jill is happy …… to be with Jack.
Jill is happy …… being with Jack.
Jill is happy …… having been with Jack.

CamScannerでスキャン

(2-b) becauseを使わずに、(1)の文をbe動詞を落とした「不完全な節」にして主文Jill is happyに付ける方法は、次のように図示されるでしょう。

Jill is happy with Jack by her side.



with以下がネクサスとしてぶら下がっています。完全節に戻して、別の文を並置してみます。

Jill is happy that Jack is by her side.
She dreamed about their future together.

さらに、「ジャックがそばにいて幸せだ」という文と、「ジルは二人の未来を夢見た」という文を1つに圧縮してみます。

i) Happy that Jack is by her side, Jill dreamed about their future together.

「Be動詞がなければ、Cは宙に浮いて別な文に付くことができる」という原理がここでも機能しています。

こうして見ると、前項の最後で扱った「分詞構文」というものは、もっと大きな原則の個別例にすぎないことが分かります。**SVC文のSVをカットすることで、Cを別の文に接続することができる。**

以下の例文を通して、このルールをしっかり吸収してください。

CamScannerでスキャン

ii) ~~She came~~ Outside, she found the rain had stopped.
外に出たら、雨がやんでいた（のが分かった）。

iii) ~~She was~~ Running down the hill, she heard a big noise.
丘を駆け下りていると、大きな音が聞こえた。

iv) ~~She was~~ Turning her head, she saw something exploding.
ふりむきざま、何かが爆発するのを見た。

v) ~~She was~~ Blinded by the light, she started screaming.
その光に目がくらんで、彼女は叫びだした。

vi) ~~She was~~ A girl of only seven, she didn't know much else.
たった7歳の少女なので、他にしようがなかった。

「分詞構文」と呼べるものも、そうでないものも混じっていますが、全部が「補語構文」です。Cという自由な存在が、付着したり離れたりしているだけのことです。

ii）はcameの意味を汲んで、*Once outside*で始めると文が締まります。
iii）は*While running down the hill*とすると、時間の経過がより鮮やかになります。

S-beと付いたり離れたりしながら、動詞中心の英語の世界に別の原理を持ち込む（C）なるもの。その存在は、英文法を複雑にしているようでいて、実は滑らかにまとめ上げているのでしょう。

4-7

文構造は生きている。

詩人であり文豪として語られるヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ(1749–1832)は、同時に洞察に満ちた自然の研究者でした。特に、伸長する植物の形態変化を論じた研究(「植物変態論」など)は素晴らしく、それによってゲーテは、形態学の祖と見なされています。「葉と花はどのように同じか」という種の問を彼は立て、綿密な観察によってそれに答えていきました。

20世紀の英語圏で、同様のこだわりをもって自然と接し、そのパターンを論じた学者にグレゴリー・ベイトソン(1904–1980)がいます。彼の著『精神と自然』(*Mind and Nature*, 1979)に、葉とは何か、茎とは何か、その定義を求めるところがあり、「"緑色した平らなやつ"というのでは「葉」の定義として十分ではない」として、ゲーテの定義が引用されています。

> 茎は葉を生じるもの。
> 葉はその生じる角度に芽を持つもの。
> 茎とはかつてその位置に芽があったところのもの。

『精神と自然』(岩波文庫、p. 40–41)



芽が出て伸びてその跡が茎になる。茎は一定の角度に葉を芽吹き、葉をつける。茎と葉、葉と芽、芽と茎が相互関係によって定義されているところをベイトソンは強調し、事は文法教育でも同じだろう、と踏み込んだ提言をしているのです。

> 昔流の葉・茎・芽の定義と同様の混乱が、言語教育の現場で起こっていて……学校の子供たちはいまだに「名詞」が「人や場所や物の名前」だとか、「動詞」が「動作を示す言葉」だとかいうナンセンスを教えられている。
> ……名詞とは述語とある関係を持つ言葉、動詞とはその主語である名詞とある関係をもつ言葉、という知識を今日の子供たちに与えられないことはあるまい。定義の基盤に関係を据えればよい。そうすればどんな生徒だって、「"行く"は動詞である」という文がどこかおかしいことに気づくはずだ。(同、p.41–42)

たしかに。Go is a verb.と言うときのgoは名詞です。辞書に単語として掲げられているすべての単語は、見出しである限りは名詞です。動詞が動詞であるためには語の連なりの、しかるべき位置でしかるべき機能を担っていなくてはなりません。

言い換えれば、こういうことでしょうか。「N—VやV—Nの関係の中に置いて見たとき初めて、NがNとして、VがVとして立ち現れるのであって、それぞれを切り離し、私たちの視線の対象(object)にしたのでは、すべてNになるしかない」。

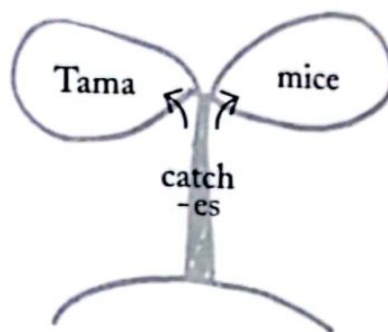
生き物を分析するときは、やはり生きた姿の観察から始めるべきでしょう。YouTubeに"bean time lapse"と打ち込んで検索すると、マメ科植物の発芽と生長の高速度撮影動画をいろいろ見ることができます。よろしければ、構造自体が、ゆったりとした時間の中で頭をもたげる様子をしばしごらんになってください。この映像は飽きません。

もちろん、言語の展開は植物の発芽と生長とは違います。言語は文頭から文尾へ、ペラペラと高速で進むもの。言語の進行と植物の生長は、時間の

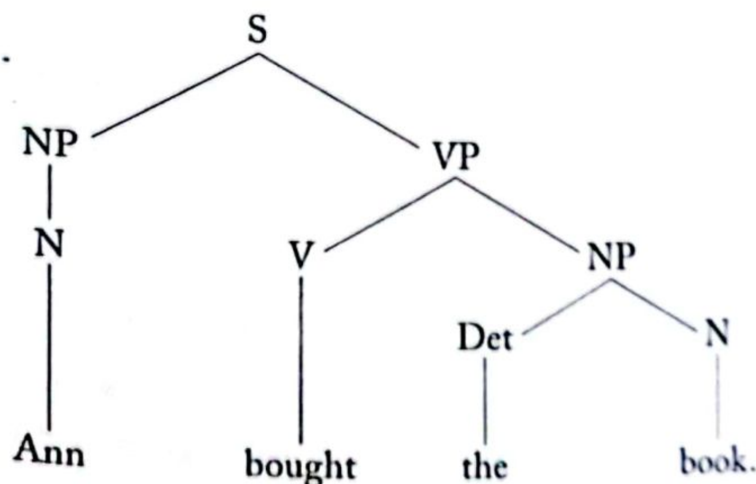
尺度も、向きも、まるで違うのだから、なぞらえるのは無理——

というのは承知のうえで考えてみたいのです。ある「意」が言葉となって現れる際に、動詞句と名詞句に分かれて出てくる、その瞬間に何が起こるのか。

「タマはネズミを捕まえる」Tama catches mice. という文では、catch を芽吹く茎（動詞）にして、Tama と mice という2枚の名詞を付けます。catch は述語なので、人称活用し、全体を文として根付かせます。



ちょっと異様な発想かもしれませんが、アメリカの言語学者ノーム・チョムスキー（1928–）が編み出した生成文法の考え方を借用しました。生成文法の普及によって、現代の文法書には、このような図がよく載っています。



「センテンス」は名詞句（NP）と動詞句（VP）からなる。
この場合、名詞句はそのまま名詞として主語 Ann になり、動詞句は動詞

CamScannerでスキャン

(V) と名詞句 (NP) に分かれ、その名詞句が限定詞 (Det) と名詞 (N) に分かれることによって、Ann bought the book. という文が生成される。

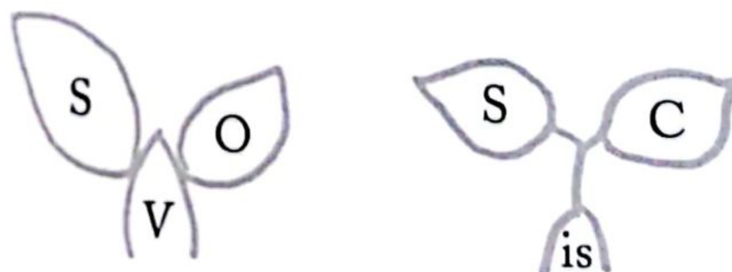
センテンスはこのようにあらかじめ決まった分岐パターンが繰り返し発動されることで成立する。

私もそう思っていました。しかしゲーテの「植物の変態」の研究に接して得たインスピレーションは、チョムスキーの樹形図は、実は逆立ちしているのではないかという考えに私を誘っていきました。

分岐は機械的なものではなく、動詞に宿る「発芽」の仕組みによるのではないか、とも思うに至ったのです。

英語構文についての私の発想は、すでに〈SentenceSpace〉というゲームソフトを想像したときに述べました [**2-9**]。Vが腕を伸ばして、SとOとに結びつけば文は成立するのでした。

その模様を、こんな風に描き直してみます。



Vが発芽すると基本的に、SとOが分岐します。Vの種類 (意味) によっては、Oの分岐が抑止されて〈SV〉になります。種類の違う2つのOを芽吹くパターン〈SVOO〉もあります。be動詞の場合はこれとは違って、SCの結びつきに割って入って、それを文として根付かせます (右図)。

Vは、時制や人称をまとうことで述語 (文中の軸動詞) となり意味を着床させます。〈SentenceSpace 2.0〉では、この「着床」を根付きとして描きます。発芽以前の動詞 (不定詞) は、辞書の見出しのように単に「そこにある」ものですが、文を成すと、その文の意味を (現実の土壌に) 根付かせる。その様子をシミュレーションするのが、Ver. 2 の売りです。

CamScannerでスキャン

4-8

部分から、また全体が生まれてくる。

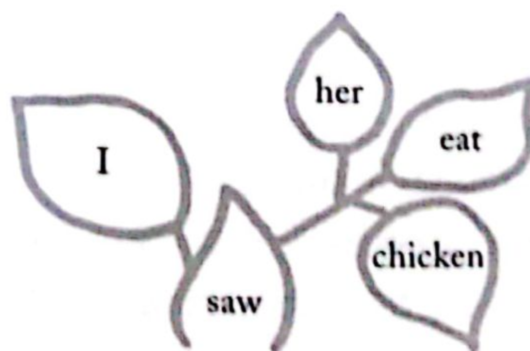
草花の生長のタイムラプス・ビデオを見て感銘を受けたのは、「芽」から「構造」が生じるところです。部分だったものが1つの全体に展開するところ。センテンスの運動は、まさにそれではないか、と。

茎に葉腋(ようえき)ができ、そこから一定の角度に葉が伸びていく、そこでまた発芽のパターンが繰り返される。

〈SentenceSpace 2.0〉の草花バージョンでグラフィック化してみましょう。使役動詞（makeなど）や、知覚動詞（seeなど）の場合、第一次のSVOのOのところに葉腋が生じて、そこにネクサス——1つの名詞句としてのSVOパターン——が生じます。

私は、［彼女がチキンを食べる］の——を見た

という日本語文は助詞「の」によって節［彼女がチキンを食べる］を名詞句に変換している、と見ることができます。同じ意味内容を英語はどう構造づけるのでしょう。



I saw her eat chicken.

CamScannerでスキャン

2つのレベルで、「は」も「を」も「が」も使わないだけでなく、葉脈に当たる「の」も不可視にしたまま構造を組み上げています。

動詞が2つありますが、テンスが付いていて「述語」または「main verb」と呼ぶことができるのはsawの方。eatにその資格はありません。このeatは「原形不定詞」、実質的に名詞です。

このネクサスの葉（全体で名詞）を捥いで、地面に植え付けることができるとしたら、eatは主語の人称と時制を反映してeatsまたはateとなり、独立した文、She eats chicken. または She ate chicken. を着床させるでしょう。

入れ子を3段構造にすることもできます。

I saw 〈him watching {her eat chicken}〉.

これはどんな草花でしょうか。前ページの図のsawから伸びる葉軸からhimとwatchingをどのように生やしたらよいか、想像してみてください。

文に情報が接ぎ木されていく様子を追うには、句と節のレベルを分離し、別個に考えるのが適切でしょう。

前置詞：主に名詞句を名詞句とつないで、より大きな名詞句を組み立てる

the chicken from the refrigerator.

冷蔵庫（から）のチキン

関係詞：名詞句を節につなぐ（全体で節を含んだ名詞句になる）

the chicken that she took out from the refrigerator.

彼女が冷蔵庫から取り出したチキン

【0-4】で、句と節の入れ子構造について言及しました。あらためて句と節とを定義し直しましょう。節は文と地位が等しく（同じ階層にある）、句は語とレベルが等しい。両者の関係は込み入っています。

CamScannerでスキャン

(1) 節は、句と節から成る。節は構文を成す（複数の品詞が組み上がっている）。以下、節を［　］で、句を〈　〉で括ります。

She ate 〈the chicken from a week ago〉[that she had forgotten to put in the refrigerator].

彼女は［冷蔵庫に入れるのを忘れていた］〈1週間前のチキン〉を食べた。

(2) 節は接続詞を伴って別の節に「従属」する。

I was surprised when [I saw her eat it].

それを彼女が食べるのを見たときは驚いた。

I'm glad that [she did], though.

でも、彼女がそうしてくれて僕は嬉しい。

(3) 接続詞によって、名詞と節がつながれ、それ全体が1つの句となる。

I was encouraged by 〈the fact that [she ate it]〉.

〈彼女がそれを食べたこと〉に勇気づけられたんだ。

(4) 句は、句と節から成る。句は全体で1つの品詞である。

the chicken 〈from a week ago〉[that she ate and didn't feel sick from]

〈1週間前の〉、[彼女が食べても気分悪くならなかったチキン]（名詞）

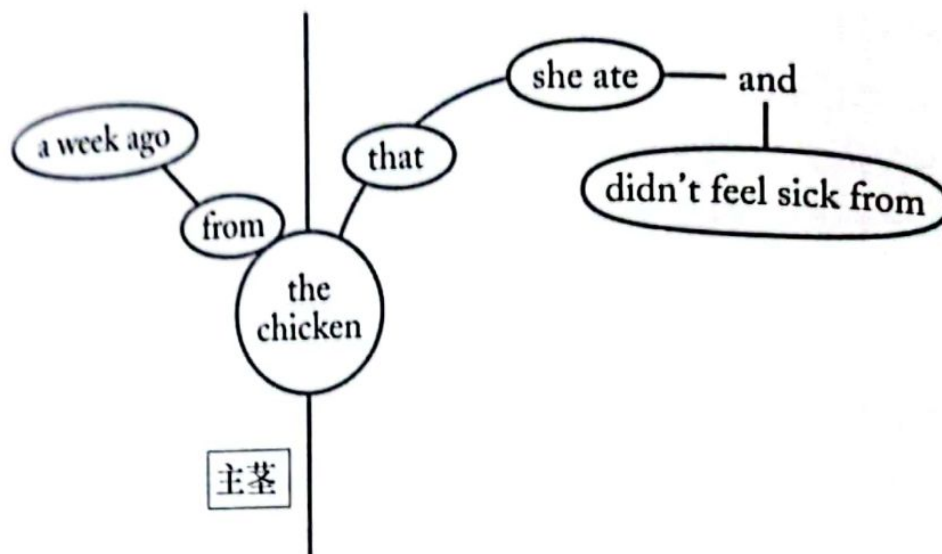
〈SentenceSpace 2.0〉にならって、
次のフレーズを植物のように表示しなさい。

the chicken from a week ago that she ate and didn't feel sick from

まずこれ全体が1つの名詞句です。the chicken が茎の一点を成し、そこに葉腋fromと別の葉腋thatができる。fromから句〈a week ago〉が伸び、thatからは、接続詞andで2つの節を結んだ節が伸びる。

そこを見誤らなければ、次ページのような図に行き着くことでしょう。

CamScannerでスキャン



「主茎」と書いたのは、この名詞句を含む文の主節のことです。

どうでしょう。チョムスキーの樹形図より、少しは生き物らしくなったでしょうか？

CamScannerでスキャン

4-9

時のよどみを英語にする。

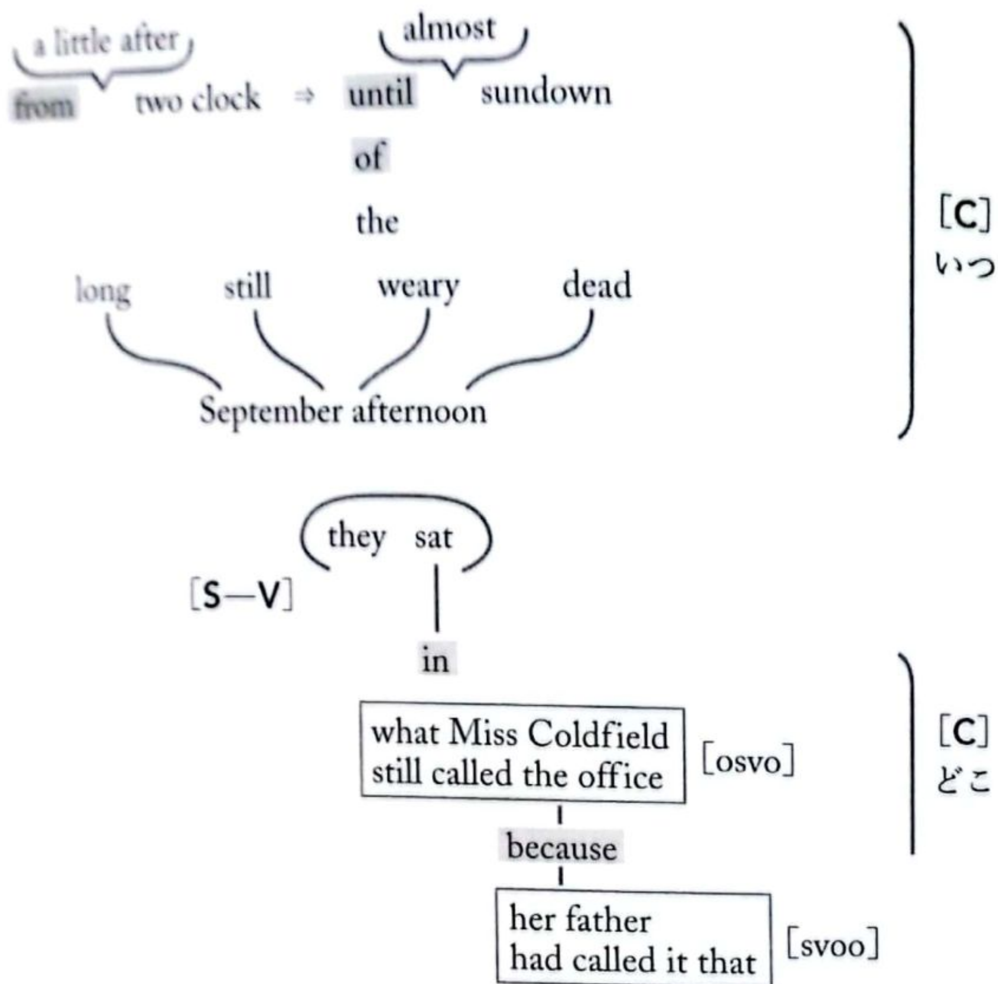


イメージと観念とが繁茂する樹木のように英語文を捉えていくとき、やや極端ながら、とても参考になる文を織り出してくれる作家がいます。アメリカ南部、ミシシッピー州に居着き、想像力と創造力でその地をフィクション化して連作を書いていったノーベル賞作家ウィリアム・フォークナー (1897–1962)。彼の代表作『アブサロム、アブサロム!』の冒頭の文を紹介しましょう。

> From a little after two o'clock until almost sundown of the long still weary dead September afternoon they sat in what Miss Coldfield still called the office because her father had called it that —— a dim hot airless room with the blinds all closed and fastened for forty-three summers because when she was a girl someone had believed that light and moving air carried heat and that dark was always cooler,

文の途中ですが (あと5行ほど、カンマなしに続く!)、ここまでにします。カンマがないのは意図的です。蔦のように、停滞した時の染み込んだ汚水のように、一面を這って覆い尽くす文章を、モダニスト作家の彼は書こうと試みたのでしょう。

「いつ」の描写から入るところは、[3-1] で見た『ヴァインランド』と同じですが、その「9月の午後」に掛かっている形容詞の伸び具合が尋常でない——long still weary dead (長い動かぬくたびれて死んだような) といった具合です。

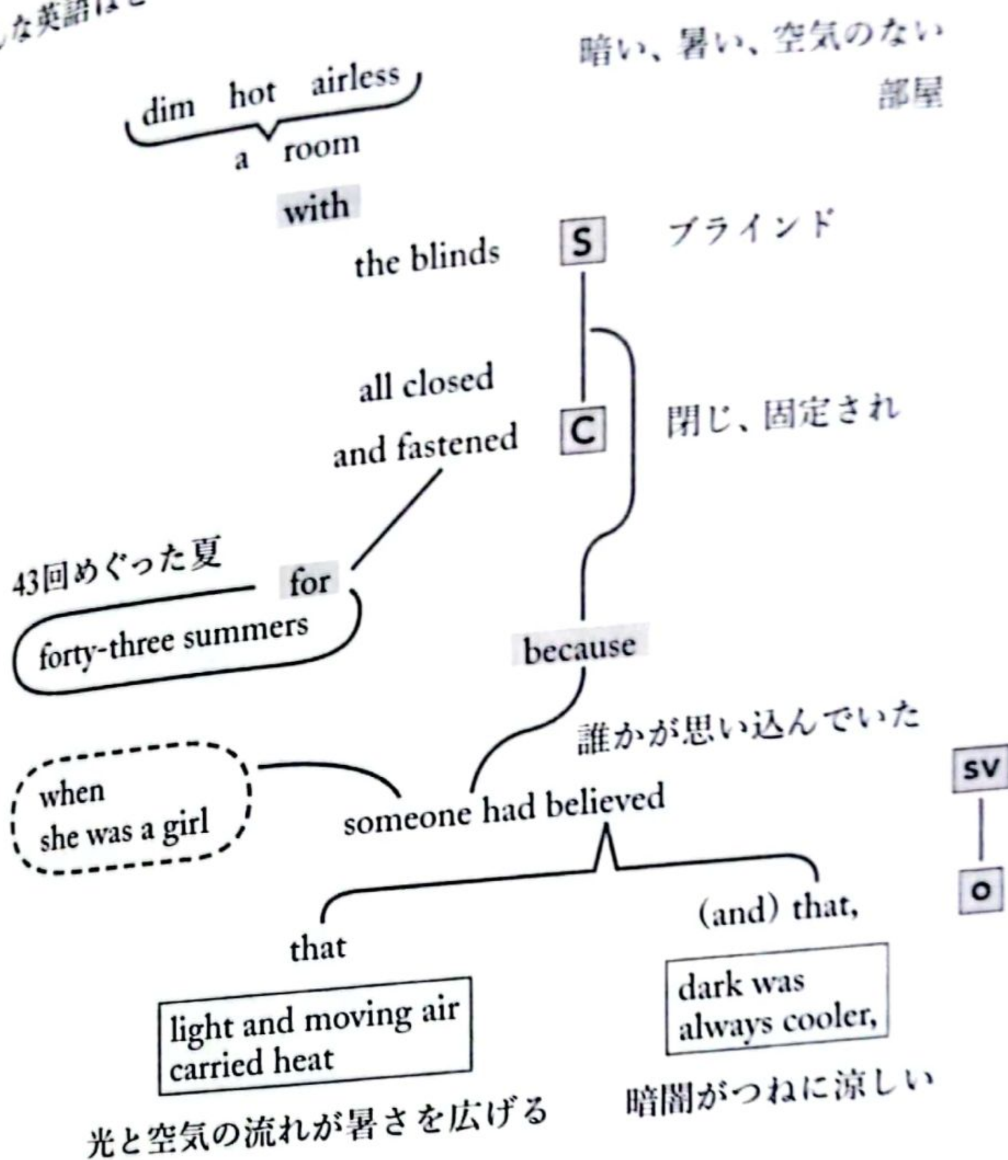


この文の主語述語はどれでしょう？　2行目にありました。they satのたった2語。これに場所を示す空間詞inが付いています。「そこに居る」だけという活動が停止した中で、「いつ」と「どこに」と、それに掛かる形容やエピソードが、繋りまくります。

「どこで」の部分の情報が、「in＋what節」で与えられます。「ミス・コールドフィールドが今なおオフィスと呼んでいる空間に」。その理由が「父が過去にそう呼んだから」。had calledの完了時制は、今の物語（過去形）から遡る「昔の物語」の時層に属しますが、その間、何一つ変わっていないことを「過去に父がオフィスと呼んだから」という一節が示しています。

読者の関心は、この「オフィス」に注がれるでしょう。その異様な描写が始まりますが、文は新しくなりません。ダッシュ（——）の後のa dim hot airless roomは、the officeの言い換えです。Nの次にそのまま別のNを置いて続ける「同格補語」というものです。

こんな英語はとても読めない？　そうでもないですよ。



前半は、そのいやにムッとする部屋の説明でした。roomの前に独特な形容詞3つ、さらにwithで「付帯する状況」を加えています。

恐ろしいほど長く閉めきってあったんですね。外界から隔離されて、時がよどんだ43年間。その誇張された感じは、恐怖の館を描くゴシック風味をたたえながら、アメリカ南部の暑く、閉鎖され、風通しの悪いままに放置された社会を描き出す象徴的な文学空間に読者を引き入れます。

because以後は過去完了形（had believed）で語られる遠い過去の出来事です。主語はsomeone、誰だか分からないその人間の根拠のない信念が、この部屋のムッとした暗がりを43年間もキープしている……。

CamScannerでスキャン

文の運動は「掛かる」と「ぶら下がる」を原則に、パーツがはっきり分かれる構築物のようでないことを目指しています。ですから句読点もほとんどない。アメリカ深南部の樹木には、よくスパニッシュ・モスという灰緑色のトロロコンブのような？植物が垂れ下がっていますが、そんなふうでもあります。それらをぶら下げる前置詞（withとfor）と接続詞（because）をマークしておきました。

これでまだ文は終わりませんが、もう十分でしょう。SVOとCの連結から、英語文が自らをどのように繁茂させていくか、これ以上の深追いは無用かと思います。

もう一度、ステップバックして樹木の全貌に目をやってください。

［いつ］　from — N　to — N　of — N　/ adj × 4　句

they sat　S —— V　主節

［どこ］　in — O［what］— S — V — O　句

［なぜ］　because　S — V — O — O　節

—— a［adj × 3］room

with — S : C and C

for —［how long］

because

when　S was C

S — V — O

that : svo

and that : s was c

CamScannerでスキャン

イメージ的な中心となるのは、ダッシュ記号の後、roomに付いた3つの形容詞――薄暗い(dim)、暑い(hot)、息苦しい(airless)――と、その部屋のブラインドの説明です。

with {the blinds：all closed and fastened}

be動詞なしでブラインドに張り付く2つの様態詞(すべて閉じられ、固定され)が効いています。それに「43回めぐった夏」という時の長大さが追い打ちをかける。

長い文中の接合法として、withを使い、ダッシュを使い、"S be"を抜いてCだけ残す方法も、beを抜いてSCを残す方法も随所に見られます。センテンスの運動は、単に同じパターンを繰り返すだけではありません。要素を一部縮退させて、節は句のように縮み、またbe動詞を得て節になる。その様子は、ゲーテが描き出した植物の変態(下のイラスト)とは違いますが、生き物の動態構造として、同様に感じられもします。

コトバのつくりの精緻さを感じながら、ここで章を改め、次は時制と時相を生み出す動詞句内部のしくみを探っていきましょう。



Goethe's concepts on the "metamorphosis" of plants
©iStock.com/ilbusca

CamScannerでスキャン

第5章

英語に時制は2つだけ、3つの時相をマスターしよう。



CamScannerでスキャン

出来事は時を進み、時から抜ける。

打球が空を舞っています。あ、これは行くぞ。フェンスを越えるぞ。行く、行く、伸びる、伸びる……。この情景を英語で言うと、Going, going ... そして「入った！」ときのアナウンスは、Gone!

オークションの司会者も同じ言い方をします。最高値で呼び声がかかった。さあ、その上は出ますか、出ませんか、出ないとこの品はこちらのかたへ── going, going ...... はい、gone!

The painting is gone. It's been sold to the lady over there.
絵画は消えてしまいました。あそこのご婦人に売却済みです。

完了形の説明を始めてしまいましたが、その前に重要なこととして動詞には「アスペクト」が付く、ということをお話しします。

aspectは「相貌（そうぼう）」「側面」といった意味。あるものが、見方によってこういう面を見せる、というときに使います。動詞goがgoingになったりgoneになったりするのは、同じ一つの動詞が「進行の相」や「完了の相」を見せているのだ──というのが、西洋の文法の考え方なのです。

動詞の「相」と言ってもわかりにくいでしょうから、本書では「時相」と意訳します。「アスペクト」というカタカナ語も使います。

ところで、動詞の「進行」や「完了」のさまを捉えるというのは、「する」（動きの描写）から「〜している」「〜して了（しま）った」という状況・状態の描写に移ることに他なりません。状況などを形容する語を様態詞と呼ぶとするなら、goingもgoneも動詞のイメージを内包しつつ様態詞になっている。で

CamScannerでスキャン

あるからには当然[S (be) C]の形をとることになります。

goという動詞は、時の進行そのものを表すようなところがあります。

It's going to be.　　これからだ。
It's going on.　　やってる、やってる。
It's going.　　消えていく。
It's gone.　　消えてしまった。

どれもbe動詞が付いて、時間との関わりを述べています。自らが「去りつつある」goingとは別に、何かが「継続中」を示すgoing on、「来たるべき」ことを示すgoing to beという基礎表現も掲げておきました。

上の4つの文は4つの異なる事態を表しますが、その表現をgoとbeという2つの動詞を不定詞にしたり分詞にしたりして、驚くほど効率的にこなしている。2音節から5音節の、こんなに小さな文で、これだけの言い分けをやってのけているのです。

It's gone.に関して言うと、この'sはisでもありえるけれど、hasでもありえます。isは日本語の「いる」に近く、hasは本書では基本的に「ある」と訳しています。

It's gone.は「消えている」。現在の状態です。It has gone.は「消えてある」──古語の「消えてあり」は「消えたり」を経て「消えた」となりました。

動詞の代表であるdo（する）について見ていきましょう。「まだ」「いま」「もう」の三つの相を表にしてみます。

	これから	いま正に	すでに
do	He is (going) to do it.	He is doing it.	He has done it.
する	する。	している。	した。してある。

日本語の段を見てください。「これから」に続く形は「する」が普通です

CamScannerでスキャン

ね。これは一般に「現在形」と呼ばれていますが、現在「している」ときには使いません。時の流れが意識されるときは、「して・いる」か「して・ある」か、まだ「して・いない」かのどれかでしょう。

「する」は、暗に「まだしていない」を含意します。すなわち「未然」。「している」でも「してある」でもなく、時間から浮いている状態です。これは英語の不定詞 to do に相当する概念です。to do は不定詞 (infinitive) と呼ばれますが、不定とは「縛りのないこと」。時間的な縛りもありません。何も定まっていない、「これから」のことは to do で表現します。

「まだ」「いま」「もう」を〈時の三相〉として捉えると、テンス (時制) の考え方も変化しそうです。日本語では「今します」と「明日します」はどちらも「します」なので、テンスに「未来」を設けず、「過去」と「非過去」に整理するのが通例ですが、この点は英語も同様でしょう。

i) 荷物は明日つきます。	The package arrives tomorrow.
ii) 荷物は明日つくだろう。	The package will arrive tomorrow.

i) と ii) の違いは、それが確実と思っているかどうか、すなわち mood (法) の問題です。テンスとは、それとは違う。しかし、では、何なのでしょう？　本章では、テンスをコミュニケーションの指標と捉えます。

今に絡む話 (現在時制)	物語としての話 (過去時制)
彼はよく勉強をします。	彼はよく勉強をしました。
He is a serious student.	He was a serious student.
これからパンを食べます。	きのうはパンを食べました。
I'm going to eat bread.	I ate bread yesterday.

フランス語やラテン語の動詞は未来形を持ちますが、英語にそれはありません。第1章 (p. 50) で述べた通りです。現実を過去・現在・未来に三分することが言語にとって正しいのかどうか、私は疑問に感じています。

CamScannerでスキャン

それはともかく、本書は

テンス（時制）とアスペクト（時相）は別である

という立場をとります。going と gone は時相が違う。現在時制の進行相は is going などとなり、過去時制の進行相は was going となる。

そのように言い直すことで、「過去進行形」に「現在分詞」が使われるという、生徒を混乱させるような文法用語も排することができそうです。going は動詞 go に継続または進行のアスペクトを付したもので、「現在」とも「過去」とも関係しません。

本書は「現在分詞」「過去分詞」という呼称を排し、現代の代表的な学習文法書の『ロングマン現代実例英文法』（*Longman Student Grammar of Spoken and Written English*［2002］）に倣って「ING分詞」「ED分詞」と呼ぶことにします。

これらの分詞は文脈によって品詞を変えます。

iii) He came *running*. He is always *running*.
彼は走ってきた。彼はいつも走っている。

iv) *Running* is what he does all the time.
走るのは、彼が年中やっていること。

iii）の場合、副詞とも言えるし、形容詞とも言える。補語Cにそもそも品詞性は希薄だということを私たちは観察してきました〔3-3〕。iv）の場合は、一般に「動名詞」と呼ばれます。構文中Nの働きをすることは間違いありません。すなわち「走るの」または「走ること」。「走るさま」をイメージさせるのは、様態詞としての iii）の用法です。

CamScannerでスキャン

5-2

継続と完了のアスペクトを感じ取る。

前回の要点を繰り返します。**時制（テンス）とは、ザックリ言って、話の内容が今の現実に関わることか、それとも過去の物語かを区分けする枠組みのこと。時相（アスペクト）は、それぞれの動詞が、それぞれの位置で、どのように時間と関わっているかを示すもの。**「ING分詞」は、その動作が継続中であることを、「ED分詞」は、その動作が完了したことを表示します。eat の動作は、今クチャクチャと進行しているのか（eating）、それともペロリと食べちゃった（eaten）のかを -ing と -en で表示し分けるということです。

動詞によっては、know（知っている）やsee（見えている）など、わざわざ-ingを付けなくても、それ自体「～している」という意味になるものがあります。

I am knowing it. とは言いません。西洋の伝統的な認識論では「知」は精神（魂）の世界に属し、魂は永遠に発して、時間の動きに乗らないのです。

I am seeing it. というのは、幻など、消えてしまいそうな物が「いまは見えている」状態。

継続相のない、その都度起こることを表す、learn（新たに知る）やlook（視線を向ける）などの動詞は、-ingを付け、learning, lookingの形で、それぞれ「学びが途中である」こと、「今そこを見ている」ことを示すわけです。そこに存在するものが普通に「見えている」場合は、I see it. が正しい表現。seeは「行い」ではなく「状態」を表す（継続相を持つ）動詞です。

CamScannerでスキャン

英語として正しいのはどちらでしょう

①彼は少々お金を必要としています。

a) He's needing some money.　b) He needs some money.

②そのこと、忘れていた。

a) I was forgetting about that.　b) I forgot about that.

これは、いやらしい問題です。論理的にすっきり考えたい人は、a)の進行形を否定するでしょう。「必要か必要じゃないかは、事実に関することだ」と。それでも、必要だと感じる心は、時に沿って進行します。1時間前も必要とした。今も金がなくて困っている。そういうひしひしとした切迫感はHe's needingという言い方によってこそ伝わるものだと思います。

②のI was forgettingを弁護する人は多くないでしょう。forgetは記憶から落ちてしまうことで、ある時点でforgotしたら、以後はforgottenであるはず。forgettingなんて変だ、と。しかし、同じ事を何度も忘れることもありますね。I keep forgetting it.はよくあること。「忘れっぽい」人は、He's always forgetting.と言われても仕方ありません。

で、私は2問とも両選択肢を正解とします。

さて、goingやsellingなど、進行の相を持つ語は、それぞれ「行け行けの状態」「売れ売れの状態」が続いていくことを示す様態詞となり、be動詞とともに〈SVC〉の文をつくります。

These items are selling extremely well.
これらの品はとてもよく売れています。
You are going strong.
まだまだお元気ですね。

一方、完了のアスペクト付きで語られる世界は、ある動きが済んだあとの状況を示す。自動詞のgoneならば「行ってしまった→もういない」で一

CamScannerでスキャン

義的に意味が決まりますが、他動詞のsoldの場合、beにつなぐか、haveにつなぐかで意味が分かれます。

- 「売れてしまった」のか——It's (been) sold.　完了した状態（受動）
- 「我々が売り終えた」のか——We have sold it.　行為の完了（能動）

sold itの状態が、主語Sの下にあるときは ……… S has sold it.
それがsoldの状態にあるときは ……………………… It is sold.

haveとbeとの対比が現れました。haveは所有者を主語に立て、完了した行為が誰の下にあるかを言います。

The boss has told me to leave.　社長は私に去るように告げた。
（社長の通達行為が完了した）

一方のbeは主語の置かれた——受動的な——状況を言います。

I was told to leave.　去れという通達を受けてしまった。

has toldは、一つのdoing、つまり行為です。それが「完了」の状態になったことには行為者がいる。主語がある。

was toldは、一つのbeing、ありさまです。ある行為が「完了」し、私はその状態にいる、と言っています。

SVOの世界観とCの世界観が、ここにも明快な一対となって、現れました。Haveと共に用いるV-edには能動の意味が、Beと共に用いるV-edには受動の意味が絡むということを、ここで強調しておきましょう。

CamScannerでスキャン

「いる」と「ある」がbeとhaveに対応する。



初級英語でbe動詞の意味を「ある、である」と教え、haveの意味を「持つ」と教えるのは賢いやり方とは言えません、進行形や完了形を字句通りに理解することを難しくしてしまうからです。

ちょっと考えてみてください。進行と完了のアスペクトを、日本語ではそれぞれ「いる」「ある」という補助動詞で表しますよね。

i) I'm cooking.	私は料理している。
ii) I've baked potatoes.	ジャガイモは焼いてある。
iii) Dinner is being served.	夕飯を配膳している。
iv) Dinner has been served.	夕食はすでに配膳した。

iv)は「お出ししてある」などとも言いますが、完了の助動詞としては「た」の使用がもっとも頻繁です。「た」は古文では「たり」となり、その元は「て・あり」。つまりその成立過程に「ある」を含意している。日本語の進行と完了は、「いる」と「ある」の対比によって表されているのです。

i)、iii)の「いる」は「いま・ここに」いること。時間の中をうごめくこと。その「いる」を本動詞「書く」に接続したものが「書いて・いる」。英語のis writingと語順が違うだけです。

ii)の「ある」は、動かなくなったものや、山河のように威風堂々と存在するものに使います。「書いてある」は、書いた結果が動かぬ形で「ある」ということ。時の動きの中にあるものは「いる」、時を制して動かぬものは「ある」。この使い分けが日本語の動詞のアスペクトを仕切っていると考えられます。

CamScannerでスキャン

たびたび引用する金谷武洋はこう言っています。——テンスとはすべての現象を収める時間の枠組だから、虫の視点でやっている日本語はどうしてもアスペクト中心の時間表現になる。いわば「アスペクトを借りて、テンスを間に合わせている」(『日本語と西欧語』より)。

本当にそうかどうか、確かめてみましょう。以下の英語を日本語に訳していきます。

	PRESENT	PAST
φ	I sleep.	I slept
未然	I am (going) to sleep.	I was (going) to sleep.
継続	I am sleeping.	I was sleeping.
完了	I have slept (long).	I had slept (long).
継続完了	I have been sleeping.	I had been sleeping.

	現在	過去
φ	寝る。	寝た。
未然	寝よう。	寝ようとした。
継続	寝ている。	(その時) 寝ていた。
完了	(長く) 寝た。	(長く) 寝た。
継続完了	(今まで) 寝ていた。	(それまで) 寝ていた。

やはり日本語には、手持ちのコマが欠けています。テンスもアスペクトも英語のように明瞭に分離されていません。現在完了も「寝た」だし、単純過去も「寝た」。現在時制の継続完了 (I have been sleeping.) が「寝ていた」で、過去時制の継続 (I was sleeping.) も「寝ていた」。日本語にテンスがないとは言えませんが、アスペクトとどう違うのか明瞭な区別がない。完了形を教えるのが難しいはずです。

CamScannerでスキャン

さらに厄介なことに、一つの出来事を立体的に表現するには、複数の動詞が必要になります。ここで、Jack が Jill のもとを去って行く状況を、両者の視点から go, leave, lose という 3 つの動詞を使って表現してみます。

doの相	これから	Jack is (about) to leave Jill.	Jill is (afraid) to lose Jack.
	いま現在	Jack is leaving Jill.	Jill is losing Jack.
	すでに	Jack has gone. He has left Jill.	Jill has lost Jack.
beの相	事実	Jack is gone.	Jill is left alone.
		Jack is no longer with Jill.	Jack is lost to Jill.

A が去り、B が残されるという状況で、

A is gone. は A がいなくなったさま、

B is left. は B が残されたさま、

A is lost. は、残された物にとって A が失われたさま

を表すわけですね。

消失を意味する lost や gone は、「もうない／いない」を意味する様態詞となる。一方で、「やり終えた」を意味する finished や done も、物事の終了だけでなく行為者の気持ち（終わった！）も表します。「いる」が am と、「ある」が have と重なる点に注目してください。

I've finished eating.	食べ－終わっ/た（have finished）
= I'm finished.	終わっ/て－いる（am finished）
I've done my homework.	宿題は・し/て－ある（have done）
= I'm done.	もうすん/で－いる（am done）

CamScannerでスキャン

次に、be動詞の補語になったり、形容詞化する「ED分詞」——より正確には「完了相の様態詞」——にはどのようなものあるか。以下、簡単にまとめておきます。次に並べたED分詞はみな完了した状態が結果として残るもの。なので、形容詞になりやすいのでしょう。

1）成長、成就、完成を意味するもの

a **grown** man　大人になった男、大人（a grownup）

developed (underdeveloped) countries　先進（低開発）国

2）知覚、伝達、理解、記憶にかかわるもの

well-**informed** person　情報通の人

songs long **forgotten**　長く忘れられていた歌

3）心・身体・物への持続的影響を表すもの

Jill is **hurt**.　ジルは傷ついた。

The glass is **broken** to pieces.　ガラスがこなごなに割れた。

4）関心や関係を表すもの

We're distantly **related** to each other.　遠い親戚関係にある。

I'm **concerned** with her future.　彼女の将来が気がかりだ。

7）保存や消失にかかわるもの

gone, lost, saved, well-tended（手入れの行き届いた）など。

完了のアスペクトを付けて、be動詞とともに（　　　）に入れなさい。

(1) 彼の作品は長いこと忘れ(forget)られていた。
His works have long (　　　)(　　　).

(2) 私は彼女の新しいコートに魅了(fascinate)されはしない。
I won't (　　　)(　　　) by her new coat.

(3) 多くの命が助(save)かったが、1つ失(lose)われた。
Many lives (　　　)(　　　), but one (　　　)(　　　).

(1) been forgotten　(2) be fascinated　(3) were saved, was lost

CamScannerでスキャン

英語のテンスは「現在」と「過去」の2つだけ。

文は、現在か過去か、どちらかのテンスを選ばなくてはなりません。「今」に関係しない話を、私たちは「物語」として語りますが、その物語文の述語動詞は、通例、全部過去のテンスになります。これが「時制の一致」または「時制の貫徹」という原理です。

(　　　)の中に過去のテンスの動詞を入れて、下の日本語文の意味にしなさい。

The wind (　　　) blowing and I (　　　) it (　　　) going to rain, but it (　　　).
風が吹いていて、雨が降るのではないかと私は思ったが、降らなかった。

blowingとかgoingとかの分詞に煩(わずら)わされる必要はありません。とにかく述語動詞を片っ端から過去形にすればいい。The wind *was* blowing and I *thought* it *was* going to rain, but it *didn't*.が正解です。

今回もまた耳新しいかもしれないお話をしていきます。まず——
動詞の活用を覚えるときに、現在—過去—過去分詞を一緒に覚えますが、概念区分を守るなら、正しいペアで覚えましょう。

テンス（現在／過去）	アスペクト（継続／完了）
go – went	going – gone
give – gave	giving – given

CamScannerでスキャン

アスペクト（時相）からテンス（時制）を切り分けておけば、下表のように時制を12も作る必要はなくなります。

	過去	現在	未来
基本形	It rained.	It rains.	It will rain.
進行形	It was raining.	It is raining.	It will be raining.
完了形	It had rained.	It has rained.	It will have rained.
完了進行形	It had been raining.	It has been raining.	It will have been raining.

一見、きれいに整理されているかに見えます。ただ、willを時制に入れるのは、英文法の過去の伝統とはいえ、世界の趨勢にならって、そろそろやめた方がいいと思います。

willは法助動詞であって、法助動詞は第1章で見たとおり、現在形が真実や事実を主張してしまうのを抑える働きをします。It will rain. は It should rain. や It may rain. の仲間で、そのどれもが、It rains.（雨が降る）という主張を和らげ、まだ起こっていない出来事をさまざまな形で推量しながら述べる言い方です。

「未来」は、過去と現在の向こうに「テンス」としてあるのではなく、完了と進行の向こうに、「アスペクト」としてある[*1]。〈英語〉は「未来」をそう見ている。

未来は、東京地方のアクセントでは「み」が高くなりますが、そうではなく「みらい」とフラットに読みます。「みらい」という時空ではく「未だ来ていないこと」「これからのこと」を意味します。紛らわしければ「未然」と言い直しましょう。

I was told to leave.

という文において、「言われた」のは過去だからwasは過去時制。とはいえ「去

---

*1　未来は「未だ存在しない」以上、〈時〉の中にはありません。動詞は未来を進めません。TO不定詞（名詞の一種）として、いわば蕾（つぼみ）のように閉じて、現在や過去のテンスに身を置くしかないものです。それも一つのアスペクトのありようだ、というのが本書の立場です。

CamScannerでスキャン

る」のは「それから」なので、未然のアスペクトを付けてto leaveと表現する。toの持つ方向感を「その先」を示す矢印として感じ取ってみてください。

「すでに完了」「いま進行中」とともに「これから（未然）」のアスペクトを作って、英語における時の表現をまとめてみました。

		テンス	
		現在時制	過去時制
アスペクト	φ（なし）	I do it.	I did it.
	これから	I'm（going）to do it.	I was（going）to do it.
	いま最中	I'm doing it.	I was doing it.
	行為の完了	I have done it.	I had done it.
	継続の完了	I've been doing it.	I'd been doing it.

「これから」のことに対して（going）を括弧（かっこ）書きしておきました。これは1つの代表例で、この括弧にはwilling（する気がある）、ready（いつでもできる）、about（今ちょうどしようとしている）等、異なったニュアンスの語が入る。何も入れなければ、"I'm to do it."となって、自分の意志に関係なく、これからすべきことを表すことになります。

次に掲げるのは、動詞句がテンスとアスペクトから成ることを示す図です。時に関する英語の文法は、そんなにややこしいものでもないのですね。

	S	V		O
		テンス	アスペクト	
φ（なし）	He	does/did	φ	it.
これから		is/was	（　　）to do	
いま最中		is/was	doing	
行為の完了		has/had	done	
継続の完了		has/had	been doing	

CamScannerでスキャン

ただ、テンスの問題にこれでケリをつけるわけにもいきません。述語動詞（それぞれの節の、テンスを付けるべき動詞）はこれでいいとしても、不定詞や分詞にテンスを持たせたい場合は、どうしたらいいのか。

それはアスペクトでテンスを代用するのです。

アンは歌った。 Ann sang.
アンは歌ったかもしれない。 Ann may have sung.

「歌った」を、その時制込みでmayの後に入れようとしても、原形不定詞にテンスの印は付かないので、単純過去のsangを現在完了と同一視してmay have sungとします。

ハドルストンとプラムによる、21世紀のスタンダードな英文法書*The Cambridge Grammar of the English Language*（2002）では、動詞句の内部に設けられたこのようなテンスを、第二次のテンス（secondary tense）として説明しています。不定詞や分詞を過去にしたいときは、完了形の「have + ED分詞」の形にするというルールです。もっとも次の対比では、完了の意味合いがしっかり生きていますね。

そのメロディを口ずさみながら、アンは外へ出て行った。
Singing that song, Ann went outside.
その歌を歌い終えると、アンは外へ出て行った。
Having sung that song, Ann went outside.

CamScannerでスキャン

受け身になる動詞とならない動詞がある。

英語の動詞句はテンス（現在／過去）、アスペクト（継続／完了）、ムード（命令／叙述／仮想）、ヴォイス（能動／受動）の別を備えている。英文法の本はそう説きます。本書の記述もそれにしたがっていますが、これまでヴォイスに触れていませんでした。

動詞の中には、「抱く」(hold, hug)「殴る」(hit, punch)「責める」(nag, criticize)「褒める」(praise, admire) など対人行為を述べる他動詞が多く存在します。それらの行為は、〈した〉側と〈された〉側の対照が明確です。

一つのアクションを、「する側」と「される・られる側」の両方から見てみましょう。誰かが誰かの手をつかむ、という場面。それを英語では1人と1本の手ではなく、2人の人間の間の出来事として捉えるのが普通です。

Bluto held Olive by the hand.
ブルートがオリーブの手をつかんだ。

この英語文では、ブルートがつかんだのはオリーブです。対象 (O) はOlive、後に空間詞を付けて、どこをつかんだのかを言うわけですね。

つかまれたのはオリーブです。オリーブは別に何もしていません。ある状態に置かれただけです。これはbe動詞で表現すべきこと。Olive wasのあと、補語はどうするか？

ここにholdの完了相の様態詞heldを使うわけです。

CamScannerでスキャン

Olive was held by Bluto.
オリーブがブルートにつかまれた。

さて、英文法は、態（voice）を基本的な動詞句の4つの文法カテゴリーの1つに数えているので、どんな文も、能動態（active voice）か、受動態（passive voice）のどちらかに属するという考えが広まっています。これを鵜のみにしないでください。「文として成立する」ことと、「英語として自然である」ことは違います。能動態でしか使われない動詞は多く、受動態でこそ意味を持つ表現も多数あります。また受動態を作るのはbe動詞ばかりではありません。

能動態・過去時制
i）The balls hit him.

受動態・過去時制
ii-a）He was hit by the balls.
ii-b）He got hit by the balls.

「球が（複数個）当たった」――これを彼の状態として述べたのがii）の2例です。ii-b）のgetは「（行為を）受ける」「（状況を）得る」というイメージ。行為者（agent）はby（～によって）で示します。

marryは他動詞で、I will marry him.という形で使うのが基本。言ってみましょう。

[　　　]にうまく入るのは、marry, be married, been married, get married, got marriedのうちどれか。

(1) 彼は誰と結婚するの？　Who will he [　　　]?
(2) あなたたち、結婚はいつ？　When will you [　　　]?
(3) 結婚してどれくらいですか？　How long have you [　　　]?
(4) 彼、前に奥さん居たのかな？　I wonder if he's [　　　] before.

CamScannerでスキャン

(1)この用例は、他動詞marryの持ち場。Who will he marry?

(2)「結婚式を挙げる」という意味では、get married, be marriedのほか、自動詞のmarryもよく使います。

(3)「be married」の状態が、いままで何年続いたか。beを完了相にしてbeen marriedとします。

(4)「いま妻帯者なのか」を問うならif he's married、過去のことならif he was married.、「過去に結婚していたことがあるかどうか」はif he's (= he has) been married. です。

能動態―受動態のスイッチは、わりあい機械的に出来る作業で、英語の授業では伝統的に好まれますが、

X V-ed Y. ⇒ Y was V-ed by X.

という単純変換があてはまるケースは、他動詞の大多数というわけでもありません。marryという動詞にしても、他動詞だからといって、"Jim will marry Jane."を"Jane will be married by Jim."と言い換えるわけにはいかない。JaneはJimによって「結婚をされる」わけではないからです。「〜と結婚している」には方向・到達を表すtoを使って、Jane is married to Jim. と言います。

文脈を入れて考えていきましょう。次の文章で、受動態で書き換えて大丈夫なのは下線を引いた3つに限られそうです。

(A) Bluto tugs Olive into his arms.
Olive fights him, but Bluto is too big. Her arms are too slender. Then Popeye sees them. He jumps and dashes to them.
(B) Popeye punches Bluto right in the eye. (C) The blow knocks Bluto down, face first.

A) Olive was tugged into Bluto's arms.

CamScannerでスキャン

B) Bluto was punched right in the eye.

C) Bluto was knocked down, face first, by the blow.

ここで注意すべきこと、それは受動態で表現しやすい出来事とそうでない出来事があるということです。Olive fights him. とあるので、オリーブはきっと手をバタバタさせ相手の胸を叩いたりしたのでしょう。しかしブルートは意に介さない。「叩かれた」といえる状態にない。ブルートを主語にして

Bluto was fought (back).

と言うのは、文法的に正しくても、出来事のありさまを偽ってしまいます。それと同様に、ポパイが二人を見た時、二人はポパイによって「見られた」のでしょうか。日本語でも「二人は見られた」と言うと、二人が一緒に何か、人に見られたくないことをしていたニュアンスがありますが、それは英語でも同様です。

They were seen by Popeye.

という英語自体に間違いはなくても、それはこの情景を述べるのにふさわしい発想ではありません。**能動態と受動態は主語が違う。その違いを無視すると、物語が伝える情報の流れがかき乱され、筋の混乱を招きます。**

次のうち受動態にしたらおかしな文になるのはどれか。

(1) Janet walks her dog. ⇒ Her dog is walked.
(2) I'll get some cold drink. ⇒ Some cold drink will be gotten.
(3) You can eat the cake safely. ⇒ The cake can be eaten safely.

(1)と(2)は普通、受動態にしない。(3)は問題ありません。

CamScannerでスキャン

5-6

have は do に似せて be をかたる。



能動態は本書が追いかけてきたSVOの世界、受動態はCの世界です。

i) I lost it.　I lost a million dollars.　SVO
ii) Lost.　A million dollars was lost.　S—C

このii)を、Iを主語にして言い換えます。そこで必要とされるのがhave。このトリッキーな動詞は、「ある」というだけのことを、まるで「する」ことのように、SVOの文型で語るのです。

iii) I have lost a million dollars.　百万ドルを失った（失いてあり）。

haveは「持つ」ではなく、ここではとにかく「ある」と訳します。

iv) My wallet was stolen.　私の財布は盗まれた。
v) I have the misfortune.　その災難が私にある。
vi) I have {my wallet stolen}.　私には {財布—盗まれ} がある。

vi)は、[3-10] で検討したネクサス文です。

	S	V	O	C
vii)	I	have	my wallet	stolen.
viii)	It	made	my day	miserable.
				それは僕の一日を悲惨にした。

CamScannerでスキャン

ここでvii）の文をiii）と見比べてください。iii）は普通の完了文ですが、vii）を一部倒置した、[SVCO]という形で見えてこないでしょうか。目的語を揃えて、並置してみます。

S[V—C] O	S V O C
I have lost my wallet.	I have my wallet stolen.
I have lost two teeth.	I have two teeth missing.

右側の文は受動的です。haveの目的語が{my wallet was stolen.}{two teeth are missing}というbe動詞の世界（状態文）になっています。

語順を変換した左側の文は、do動詞の世界（行為文）になります。何かがなくなった事態を、自分を主語に立てて、あたかも自分が何かをしたかのように言い換えています。

I [have-C]-Oの認識		I have {O-C}の認識
「俺がなくした」	⇐⇒	「財布がなくなった」
do動詞の世界観		be動詞の世界観

しかしhaveが他動詞であるなら、名詞でなく様態詞であるはずのCを目的語のように直接したがえるというのは強引という他ありません。このことはうまく説明できないので、「have＋ED分詞」で1つの動詞のテンス（現在完了形）だとされてきたわけですが、どうしてこういう語の配置になりえたのか、haveの根っこというか、元々の意味から考えていきましょう。

「あるモノが、あるトコロにある」という、英語の言い方を列挙します。

CamScannerでスキャン

		SとO	例文
①	be動詞の世界観 (There, something.)	不明瞭	• In the park is [an oak grove]. • There is [an oak grove] in the park.
②	be動詞の世界観 (That, there.)	Sは明瞭	[The oak grove] is in the park.
③	do動詞の世界観 (That has this.)	S, Oとも明瞭	[The park] has [an oak grove].

oak groveとは「オークの木立」ということ。例文の欄では、モノを[　]で囲い、トコロに下線を付してあります。トコロとモノの関係が、①から③に向けてどう移行しているか見てください。①②③の順に、注目がトコロからモノに移っていませんか？　文の主語が何なのか①の段階では漠然としていますが、②になると明瞭化します。③では目的語も明瞭化しています。

「何がどこに」の認識をI haveで始まる文で示しなさい。

(1) in my pocket / a pen ⇒

(2) in the bank / no money ⇒

(3) with her / a problem ⇒

(4) by tomorrow / fifty pages to go ⇒

(1) はポケットにペンがある。I have a pen in my pocket. 以下、どれも同じ語順で並べてください。(2) は口座に金がない。(3) は彼女との関係にうまくいかないところがある (4) は明日までに、進むべき50ページがある。(4) は「もの」というより「すべきこと」があるわけですが、英語のパターンは同じです。同じ形で発想できることが、haveという基本動詞をマスターすることにつながっていきます。

CamScannerでスキャン

5-7

haveは主語を要する動詞ではなかった。

英語を習いたての頃、haveという動詞に出会って私も衝撃を受けました。なにしろ英語では「私たちの学校は素敵なプールを持っています」、「彼女は顔に大きな目を持っています」と言うのですから。

単に「目がある」だけなのに、どうして「持っている」なんて言うのでしょう？　いやこれは発問が間違っています。単に存在することを言うのに、なぜ「私」を主語に立てるのかと問うべきです。

	私には	ある	2つの目が
i）	To me	are	two eyes
ii）	I	have	two eyes.

i）の文はだいぶ舌足らずな感じがします。この文型でareに存在の意味を担わせるのは、英語では強引です。しかしラテン語には、こういう言い方がありました。

Est	*mihi*	*liber.*
（is）	（to me）	（book）

意味は、I have a book.なのだそうです。「私」を与格（～に）のmihiにして、主格のegoにしないのです。これは「私が所有している」の発想からは遠い。そして——門外漢の私がonline etymology dictionary等によって理解した限りでは——古英語の時代にhabbanを不定詞とするhaveの先祖は、主格ではなく与格から文を始めた。つまりhaveは所有ではなく、私において所在

CamScannerでスキャン

する、担われる、の意味で使われていたらしい。

haveだけではありません。現代ではI thinkと言いますが、「〜と思う」というとき、主体としての自分（ラテン語のego）が思考を行っていると考えるのは、一つの認識に過ぎません。「私が考える」のか、「考えが出てくる」のか。イギリスではシェイクスピア（1564–1616）の時代になってからも、I thinkの代わりにMethinksという言い方を使っていました。与格のmeから始まって、三人称単数のthinksとつながるところは、I thinkよりIt seems to meに近い語感だったのでしょう。近代以前のイングリッシュ・スピーカーは、自分の考えを主体的に述べるのを避け、（第1章で見たように）事実と確認できないことは仮想法で述べる、控えめな表現者だったのでしょうか。

I have this, I have that. と主格のI（エゴ）を突き出して、さまざまなO（オブジェクト）を所有の目的とする近代人は、haveの原意が「所有」ではなく「所在」であり、その主語は「〜に」という、ロケーションを示していたことを学び直す必要があるかもしれません。

古代人の生活にとって所有とはなんだったか、根拠のない想像をしてみます。

原始の人間にとって、世界は脅威に満ちているはず。次の瞬間、何が起こるかわからない。その世界に対して、手をもって働きかけ、周囲を平定していくこと、自分の「所に有る」と言えることがどれほど重要だったか。動かぬ世界を手にして、自分たちの制御のもとに収めることがどれほど重要だったか。

火をおこしているとします。	We are building a fire.
火がおこって我々のもとにあるなら	We have built a fire.
燃焼が安定すれば	We have a fire.

buildやmakeには直接的に「手」が関わっているけれど、手を放しても大丈夫、安定しているというときにhaveが使えます。

CamScannerでスキャン

いまやっている　―　もうやってある
(手が離れない)　　　(手が離れた)
I'm doing it.　　　I have done it.

さて、我らが古代人が鹿を射止めました。現代ドイツ語では、その事態を、この語順で言います。下は古英語の語順を現代英語でなぞったものです。

Ich	*habe*	*ein Reh*	*getötet*
I	have	a deer	killed.

それが、11世紀以降、北フランスの言語を持ち込んだノルマン王朝の征服者たちの影響で、英語がフランス語風になっていくのです。フランス語では、「私は鹿を殺した」を英語の現在完了にあたる「複合過去」で表現します。

j'ai　tué　un cerf
I have killed a deer.
我・あり－殺して・鹿。

こうしてみると、日本語の「鹿、殺したり」も「殺してあり」ですから、ヨーロッパ語の完了形とは、語順が違うだけで、発想はほぼ同じですね。違うのは、ここでも、SVOの世界認識です。日本語は、過去の出来事を収めるSVOの構文がありません。

CamScannerでスキャン

5-8

完了と継続以外にも、時相はあるだろう。

時相は2つだけでいいのでしょうか？「もうすんだ」(完了)と、「いましてる」(進行)の他、もう一つ「まだしていない」があると便利ですよね。

もうすんだ。	I've done it.	完了
いましてる。	I'm doing it.	継続中
まだしていない (A)	I haven't done it yet.	未
まだしていない (B)	I have yet to do it.	未
これからしよう。	I'm going to do it.	未

done itを完了相と呼び、doing itを継続相と呼びながら、to do itを未了相とか未然相とか呼ばないのは、いくつかの理由があると思われます。

①to doは2語からなる句であり、-ingや-edを付けた動詞の屈曲形ではない。

②to doは全体で「不定詞」であり、不定詞は名詞相当だから「相」は持たない。

③不定詞の用法は数多くあり、「予定」を表しはするが、それだけに焦点を当てるべきではない。

④「未来」は、助動詞willの担当範囲と決めてある。

でも、ちょっと抵抗してみましょう。

「すでにしたこと」が　things doneで、
「今していること」が　things I'm doingで、

「これからすること」が　　things to doだったら、

少なくとも学習者にとって、to doという形に時間的なイメージを与えても悪くないのではないか。むしろ有益ではないか。

しかも「to do」はtoとdoに分解してみれば、文字通り「doへ向かっている」ということになるではないか。

to doという形には未然のアスペクトを与えるべきかを議論する前に、不定詞（infinitive）とは何かという問題を、少し踏み込んで考えることが必要です。

日本では、分かりやすさのために、「TO＋動詞の原形＝不定詞」とも教えられてきました。実は「動詞の原形」は、それ自体で不定詞（「原形不定詞」）なのです。次の例文で、下線を付けたのが不定詞ですが、どれも構文内のはたらきは名詞です。

i）<u>Sleep</u> *is* both a verb and a noun.
　Sleepは名詞でもあり、動詞でもある。

ii）All he needs to do now *is* <u>sleep</u>.
　彼に今必要なのは、眠ることだ。

斜字体の動詞は述語で、SVC構文のVに位置していますが、不定詞と呼ばれるものは、TOが付くものも付かないものも、S、O、Cといった名詞の持ち場に収まるものです。

原形不定詞、またはbare infinitive（ハダカ不定詞）は、その動詞の「名前」のようなものと考えてもいいでしょう。辞書の項目になるのがこれです。goの意味を調べたいときは、goまでページをめくって、goのところを読むわけで、このとき、あなたは“go”を名詞として扱っています。

toの付いた「TO不定詞」（to- infinitive）はさらに活動範囲が広く、名詞になったり、形容詞になったり、副詞になったり、自由自在に動き回ります。この「定まらない性質」を指して「不定詞」というのだと私は解釈していま

CamScannerでスキャン

す。動詞の意味を持ちながら、

①「主語」の限定がない（人称変化しない）

②「時制」に縛られない（テンスを持たない）

そのようなことは、述語動詞Vにはありえません。Vは必ず主語と結ばれ、現実の時間に埋め込まれる。**だからこそ、いまだ起きていない出来事は、"will come"と言うにせよ、"is to come"と言うにせよ、不定詞で語るしかないのではないか。不定詞はその本来の性質からして「未然」のアスペクトが読み取れるべき存在なのではないか、と考えるのです。**

ここでTO不定詞を使った代表的なフレーズである"have to 〜"について考えてみましょう。

haveに完了のアスペクトが付いたdoneを続けると、動詞の現在完了形ができるのでした。to doを付けると、どうなるか。

私たちはhave toをひとかたまりにして、mustと同義の助動詞のように扱いますが、元をたどれば、この表現は

have＋TO不定詞　　これからすべきことが自分にある
　　　　　　　　　未然の（TO不定詞の）「する」がある

ということ。「これから」の感覚が「TO→動詞原形」という不定詞の形に内在していると見ることには異論もあるでしょう。しかし、

You have to do this.

という表現の意味が、「未然のto do thisが君のもとにある」であることに疑いはありません。

haveの原意に立ち返って、これらの非常に基礎的な意味伝達を整理して考えるのは、大きな知的挑戦ですね。

CamScannerでスキャン

haveの意味を汲んで、次の文を解釈してみよう。

i) I have to make a few phone calls.

ii) I have a few phone calls to make.

iii) What do you have to do this afternoon?

「何本か電話を入れる」が、make a few phone calls.

i) では「すべきこと」として to make a few phone call が「私にある」と言っています。

ii) は、私にあるものとして、a few phone calls と言ってから、その calls に関して「これからする」と形容詞句で説明しています。

なんだか、私の説明、変ですよね。意味のない区別に立ち入ったからでしょうか。i) と ii) で「意味が違う」のでしょうか。iii) を見てください。iii) は「午後にすべきこととして何がありますか」と訳しますか？　それとも「午後に何をしなくてはならないのですか？」と訳しますか？　同じです、どちらでも。

次に、この〈have + TO不定詞〉という表現を、完了の〈have + ED分詞〉と比べてみます。どちらにも共通した「haveの意味」を考えてみてください。

未然	I have to do it.	I have something to do.
完了	I have done it.	I have something done.

未然と完了を並べてみたので、「継続」はないのか、という疑問が湧くかもしれません。I have doing it. はないのか？　ありません。have の本意は「不動」「平定」にあります。動く世界を相手にするなら be動詞、I am doing it. となるわけです。

CamScannerでスキャン

5-9

「TO不定詞」は未来を向く。

TO不定詞のさまざまな用法は「どのように同じか」という問題を考え進めていきましょう。次の2つの文を見比べてください。

i) He went to New York to study Jazz.
ii) He stayed there for a year, only to learn some basic English.

i)は「ジャズを勉強するためにNYへ行った」(目的の用法)、ii)は「1年間留まったが、基礎的な英語がいくらか身についたにすぎなかった」(結果の用法)。そのように区別されて教えることが多いと思います。それで正しいのですが、TO不定詞の感覚を養うためには「目的」と「結果」に分けるのは、うまくない面もあります。問題は、どちらもフォーカスが効きすぎているという点。もっとぼやかさないとうまくないのです。

i)の2つのtoを矢印に置き換えてみましょう。

He went → New York → study Jazz

場所に付く→は、当然ながら空間の移動を示します。

では動詞(不定詞)の前の→は何を示すのか。

TO不定詞の根本的な機能を「足りないを補う」ことだという説明が、『一億人の英文法』にありました。そこで話が終わらないから前に進める、その印(→)がtoなのだと。これは心理の深層をついた真実の言葉だと思いますが、言葉を――特に副詞句や形容詞句を――発すること自体「足りないを補う」ことなので、その真実は、ちょっと真実すぎる(同義反復になってい

る）気もします。著者たちはまた、TO不定詞に「これからのニュアンス」があることも強調しています。むしろそちらを押し立ててみましょう。

先の例文に即して言えば、NYに行ってどうするか、どうなるか、どうなったか。物語は時間に沿って進むとすれば、i）のto studyにもii）のto learnも同様に「これから」「それから」のニュアンスがつきまとうのは当然ですね。「ニューヨークに行く」と言った時点で未来への視座が生まれる。プロスペクトが広がる。そのような「心の向き」を動詞に付与したTO不定詞が「未然の時相（アスペクト）を持つ」のは自然なことではないでしょうか。

TO不定詞には、たしかに次のような用法もあります。

iii）To know her is to love her.
　　彼女を知ることは、彼女を愛することに等しい。

このtoに特に「これから感」はありません。toが持っていた「→」のニュアンスが消えて、単なるマーカーになっています。何をマークするのかといえば、動詞でないこと、命令法の文でないことです。Know her で文を始めると文意が一瞬混乱するので、toを付けて交通整理をしていると考えることができます。

より日常的な（何気ない）TO不定詞は

iv）I want you to know ...　　君に知ってほしい
v）I tried to call you ...　　君に電話しようとした
vi）I came here to listen ...　　ここに聞きに来た

などの文脈に現れます。どのtoも→に置き換えてみると、その意味が見えやすくなります。

iv）は「you→know」（君が「知る」へ向かうこと）を望む表現ですし
v）にはcallの成就を目指した「tried→」がある。

CamScannerでスキャン

vi) は「ここに来た、さあ一」という意向の展開がある。

どの例にも、意向や事の流れがtoの1語によって効率的に示されていま す。そうした「向き」や「流れ」のうちのある部分は、TO不定詞に、「未然の時相」を与えていると、そしてその「相」は、ING分詞の「継続」や、ED分詞の「完了」と並置してよいものだ、と私は考えています。確認していきましょう。

ハンバーガー店のカウンターで決まって聞かれる質問：

For here or to go?　　店内でお召し上がりか、お持ち帰りか。

まだ手渡されていないときなら、	These burgers are *to go*.
そのバーガーを手にして歩き出せば、	They're *going*.
道に出れば、店内から見て、	The burgers are *gone*.

これからやること	things *to do*
今やっていること	things I'm *doing*
やり終わったこと	things (that are) *done*

どうでしょう、英語学習の効率のために、TO不定詞の持つ「これから感」を、動詞のアスペクトの1つとして掲げることは。

TO不定詞（未然相）	He is (ready, going, yet) to fly.
ING分詞（進行相）	He is flying.
ED分詞（完了相）	He has flown.

いきなりですが、エクササイズをやってみましょう。英語で「昇進する」は、受動態でbe promotedと言います。

CamScannerでスキャン

英語で言ってください。

(1) 私は昇進した。(完了)　I [　　　] promoted.
(2) いま昇進がかかっている。(進行)　I am [　　　] promoted.
(3) 昇進が予定されている。(未然)　I am [　　　] promoted.
(4) まだ昇進の予定はない。(未然)　I'm yet [　　　] promoted.
(5) そもそも昇進はない。(未然)　I'm not [　　　] promoted.

正解は、(1) have been、(2) being、(3) to be、(4) to be、(5) to be

もう一例。「彼に～させる」というとき、使役動詞としてget, have, makeを使います。また「させておく」というときに、let, leave, keepを使います。それぞれどう違うのか、テストしてみましょう。

次の3つの文意を、アスペクトの観点から説明しなさい。

① Get him to do it.　彼にやらせなさいよ。
② Let him do it.　彼にやらせてあげて。
③ Leave him doing it.　彼にやらせておけば。

ちょっと難問でしょうか。①のdoは、toを付けて「未然」の時相にあります。彼をその行為へ向かわせないといけない。その「これから感」がtoに現れていると解釈できるでしょう。

②Let（ゆるす）の内容は、「彼がやっている」状態ではなく、「彼がする」すなわち{him-do-it}というコトです。このコトに、時間の相は付いていません。doは原形不定詞です。

③は、現状彼がそれを「している」ので継続のアスペクトが付きます。その点は、Leaveの代わりにKeepを入れても同じですが、ただしleave（放っておく）とkeep（見守って維持する）では、関わり方が正反対。

同じ「やらせておく」でも、Keep him doing it.は「彼が作業を止めないように見張っていて」。Leave him doing it.は、「彼のしていることに割って入るな」となります。

CamScannerでスキャン

TO不定詞の「未然」の相を開拓する。

TO不定詞に「未然」のアスペクトを与えることができたら、英語のテンスに関する私たちの理解は、よりスッキリしたものになると信じて、説明を続けます。

TO不定詞は、ING分詞とよく比較されます。同じように使えるケースもあれば、対照的なケースもある。

次のケースはV-ingとto-Vではっきり意味が異なります。

V　N	V1 → V2
I stopped smoking.	I stopped to smoke.
喫煙をやめた。	立ち止まってタバコを吸った
	(タバコを吸うために立ち止まった)

V1 同時に V2	V1 → V2
He went upstairs singing.	He went upstairs to sing.
歌いながら上階へ行った。	歌を歌いに上階に行った。

現在進行中のことは介入が可能なので、ING分詞に対してはそれを目的語(名詞)としてVNの関係に組み込むことができます。TO不定詞は、今まだ目の前に存在していないことなので、欲望や希望や意志や目標としてしか対象化できません。

CamScannerでスキャン

次の文頭の後にはどんなアスペクトを付けた動詞がはまるか。"see him"を適切な形にして続けなさい。

i) I want　　ii) I hope

iii) I'm willing　　iv) I'm trying

どれにもto see himが付くわけですね。それぞれ欲望、希望、意志、目標を代表する動詞で、気持ちが未来に向かっている限り、これらの動詞は未然の事態を目的語にします。

I want to see him.
(この先) 彼に会いたい。
I'm willing to do anything to see him.
彼に (今後) 会うためだったら (今から) 何でもする。

これらの動詞がING分詞を付けたらどうなるでしょう。欲望の対象が現在に出現します。

I want some loving.　　愛がほしい (愛をよこせ)。

というのは、愛に餓えてloving (＝愛し、愛の行動) を求める言葉です。TO不定詞の場合と対照させてみてください。loveに進行の時相を付けると名詞化します。未然に保つと、いまだ実現されないことが{主語・述語}のネクサスとなって表現されます。

I want your loving.
I want {you to love me}.

というわけで、繰り返しになりますが、3つの時相を整理しましょう。

CamScannerでスキャン

	現在時制	過去時制
未然相	We are to talk about it.	We were to talk about it.
進行相	We are talking about it.	We were talking about it.
完了相	We have talked about it.	We had talked about it.

完了は動かぬ世界。haveによって取り押さえられます。進行は時の中。be（いる）との結合が重要です。未然は前向きの視野（プロスペクト）の中に可能性として広がる。ですからそれを、We are to talk about it.で代表させるわけにもいきません。これからのことなのに、それでは行き先が決まっている感じがします。

未来は希望、欲望、目標、意志、企画の対象だということを忘れてはいけません。TO不定詞のtoの前にどんなフレーズを置くか、そこに前を向いて生きる人間としての生き様がかかってくるわけです。

下のランキングは、Googleの検索ボックスにそれぞれの表現を引用符で括って全文検索して得たヒット件数を、多い順に並べたものです。検索ページの絞り込みもしていませんし、推定数を出す演算のしくみも分かっていませんから、件数の引用はやめておきますが、Iを主語にして、toの後を決めずにやった結果は、トップの"I have to"（否定形を含む）で23億ほどありました。TO不定詞の前に並んだ、欲望・希望・必要の動詞群から、現代人の心象をある程度覗くことができそうです。

	S	V	X（未然相）
1	I	have /don't have	to (do)
2	I	want /don't want	to (do)
3	I	'd like	to (do)
4	I	'd love	to (do)
5	I	hope	to (do)
6	I	've got	to (do)
7	I	need	to (do)
8	I	mean / don't mean	to (do)
9	I	plan	to (do)
10	I	'll try	to (do)

実は単純なやり方でいくと、"I am to（+ I'm to）"の語列が上位に入りました。ですがこれは外し、I'mのあとに、予想される

さまざまな様態詞を付けてヒット件数を見たのが次の表です。

	S be	様態	X（未然相）
1	I'm	going	to (do)
2	I'm	trying	to (do)
3	I'm	looking	to (do)
4	I'm	glad	to (do)
5	I'm	ready	to (do)
6	I'm	not able	to (do)
7	I'll be	happy	to (do)
8	I'm	not ready	to (do)
9	I'm	not supposed	to (do)
10	I'm	starting	to (do)

I'm going toをトップに、さまざまな心模様の未来表現が得られました。精度は貧弱ながら、結果を表にします。こちらも現代人のポジティブな心の設定（マインドセット）を——禁止されることへのこだわりを含め——映し出しています。どのフレーズがどのフレーズよりランキングが上かということに意味はありません（これらより頻度の高い表現をきっと見落としています）。ただ、みなさんがbe going toに、一種の助動詞のような役割を与えているとしたら、他にも助動詞のような感覚で使える表現はいくつもあるという点に気づいてほしかったのです。たとえば、

S	aux（助動詞）	V	
I	'm not allowed to	do	：させてもらえない助動詞
I'	m not supposed to	do	：いい子で我慢の助動詞

という気持ちをこめて、I cannotの代わりに使えるようになるといい。TO不定詞の前に来る頻出フレーズの「助動詞化」は、英語のスピーキング能力の向上を促すでしょう。定型のフレーズで、メインの動詞の前をすんなり埋めるテクニックが、あなたのスピーキングを優美にします。

第6章

コトバに上達するとは、意識を無意識へとつなぐこと。



6-1

見つめ合わず、一緒に同じ方を見る。



『星の王子さま』で知られるアントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリが愛について述べた名言があって、学生時分、フランス語の書き取りテストに出たのを覚えています。

> *Aimer, ce n'est pas se regarder l'un l'autre ...*
> (To love, it's not gazing at each other)

と、その文は始まります。「愛するとは、互いを見つめることではなく」の後は、「一緒に同じ方向に目を向けること」と続きます。

> *c'est regarder ensemble dans la même direction.*
> (it's looking [outward] together in the same direction.)

「愛する」という動詞の不定詞*aimer*（エメ）を主題に立てて、「でない (it's not)」に当たる*ce n'est pas*（スネパ）と続ける。最初にガツンと否定して、AでなくてBだと言う。愛の真実を問い、

(A) 互いを見つめること
(B) 一緒に外に目を向け同じ方向を見ること

の二択を設け、(A) を否定し (B) を肯定する。愛を命題となし、Yes／Noで対応する。

最後の章をこの文の引用から入ったのは、「英語やフランス語を話すとは、お互いと向かい合うことではなく、一緒に同じ世界を見ようとするこ

CamScannerでスキャン

と」というテーマを、本書も共有しているからです。

日本語は、冒頭で述べた「はい／いいえ」の用法からしても「対人言語」としての性格を持っています[1-1]。対して英語文は「事実の確定」に向いたつくりをしている。直説法の文は「命題」のつくりをしていると私は書きました[1-3]。

もちろん、事の真偽を述べる点では日本語も同様で、その機能に劣る点はない、と言われればその通りかもしれません。どこも劣ってはいないどころか、西欧型の言語文化との衝突・受容を経験したことで、日本語ネイティブの論理意識は高まっているようにも見えます。言語は柔軟であり、適応性に富んでいます。命題になろうとすれば日本語文もちゃんと命題になる。

それを認めた上で、言語の基本ポジションとして、**近代英語は事実志向性が強く、日本語は、大きな変化を遂げた後の現代も、話者の思いの吐露に適した形をしています。**

I love you.　　好きだ。
I want you.　　君がほしい。

Iとyouという2つの代名詞を明示したうえで、両者の間に起こることを動詞で表す英語のやり方と、対人的な感情を表す語をそのまま吐き出すことができる日本語とでは、やはり作法がずいぶん違います。

「好きだ」は、学校文法では「形容動詞」という品詞のグループに入るのでした。「きらい」「へん」「むり」「エッチ」などと一緒。「〜だ」の代わりに「〜な」を付けると名詞を修飾するので、外国人向け日本語クラスではこれらを「ナ形容詞」として教えています。

「ほしい」は「形容詞」に入ります。「むなしい」「せんない」「ひもじい」の仲間。これら「イ形容詞」は「ナ形容詞」の語幹とともに、内なる感情を表に出す表現として使われる。「いい（ぞ）」「すごい（な）」「ヘン（だよ）」「絶対ムリ（φ）」。

CamScannerでスキャン

一言で感嘆するやり方は英語にも珍しくありません。先の4例もそれぞれ、

Good.　Fantastic.　Strange.　No way.

などと訳せます。しかし、「好き」とか「ほしい」とかの二者関係を表現するときは、その二者を明記して動詞でつなぐのが英語の方法。I love you.の気持ちを表現できる形容詞が英語にはない。なぜでしょう。

［2-8］の内容に即して言えば、〈内なる私〉がいないから。互いを覗っていないから、と言っても同じでしょう。「好き」に当たる形容詞を英語に求めて、loveを形容詞にして、lovelyと言ってみても、

You are lovely.

は、「あなた」という外的存在の形容にしかなりません。

You are my favorite.

とも言えますが、それも基本的には，自分の趣味について述べることにしかならず、ナマの感情の表現になりません。「好き」の気持ちを伝える一語がない。それで不自由しないのは、I love you.自体が「好き」という感情を露わにする文だからです。

逆に言えば、「好き！」の意味なのに、命題と変わらない格好をしている。

愛する主体と愛の対象が動詞を挟んで対面するI love you. (SVO)の構文は、話し手も聞き手も、一緒に、同じ方を向いて同じ事態をシェアするのに適しています。そこは一人称も二人称も三人称も、単数の存在も複数の存在も、平等に表象される言語空間です。

それと同様の言語空間を日本語でつくり上げるのは、どうにも大変そうです。「私」と「あなた」のシンボルを主語と目的語にして他動詞に結びつけるやりかたは日本語向きではありません。それでは、昂揚する気持ちをぶつける「好きよ」「好きです」「好きなんだからもう！」の代わりは務まりません。互いに向かい合った関係の中で、自分の「うち」なる思いを伝える「好き！」のメッセージが伝わりません。

CamScannerでスキャン

「見つめ合う」日本語方式と「同じ方向を見る」英語方式、どちらがより合理的だとかいうことはありません。どちらもが、それぞれのやり方で、100パーセント機能しているわけです。ただ、英語に堪能になろうとするなら、相手を見て思いを吐き出すような姿勢はかなぐり捨てるのが得策だとは言えるでしょう。**誰にとっても同じに見える空間に物事を配して、ちゃんとSVOに思いを乗せる構えでいくことが結局近道になる**——そうした効率主義の立場から、本書は英語という言語に備わった形式を普通の日本語で書き表すことに努めてきました。

その中で重要なポイントが、否定文の作り方にあることにも触れました[1-2]。否定文を肯定文から切り分ける技術は、簡単なようで、実は奥深い。notがうまく使えるようになることで、否定文だけでなく肯定文も英語らしく輝いてきます。

最終章では、しばらくこのnotにこだわってみます。

6-2

自然は否定を知らない。

ケネス・バーク（1897–1993）というアメリカの文芸評論家が、人間の言語活動について文学的に考察しています。彼は言語学者ではありませんが、著書『象徴行動としての言語』（*Language as Symbolic Action*, 1966）に書いた「人間の定義」は今もよく引用されます。そのリストには、「シンボルを使う」とか「道具によって自らを自然の状態から切り離した」など予想どおりの説明とともに「否定の発明者」という定義が出ています。

人間は否定を発明した。どういうことでしょう。後に続くリストを併せて読むと見えてきます。言語を獲得し、notを抱え持ったことで、人間は自然から浮き上がった存在になった。そういう、いわば「ねじれ者」としての人間像を、バークはアイロニカルに表現したわけです。

人間はリンゴを前にして、ただ実を齧（かじ）るだけでなく、その果実を名付け、シンボル化し、理想化もし、「リンゴらしいリンゴ」を欲し、「こんなのはリンゴではない」と現実を否定し、「もっと美味しいリンゴがあったら」と仮想し、よりよきリンゴをより多く手にする道具と手段を考案し、利益を生んで人の上に立ち、より完全な栽培者への道をひた走る。そういうことをゴリラはしません。

自然の営みを、自然の側から考えてみたとき、そこに否定がないことに気づきます。雲が出て日が隠れるのは、雲が日光を否定したからではありません。雲も太陽も、何も「打ち消し」てはいません。水は流れるコースを流れるだけ。高所を否定して低所に流れるのではない。水と油が混ざらないのは、それぞれの性質を全うしているだけであって、どちらも「混ざらない」とか「排斥する」とかの否定的な動きには関与してはいません。

CamScannerでスキャン

「否定」は、私たち人間の側で、自然から得たイメージを言語というシンボルに変換する際に生じること――少なくともバークはそう考えました。

でも、真実はどうなんでしょう。動物たちは本当に否定を知らないのでしょうか。

近づいていったら犬に吠えられた――Grrrrr, bow-wow!

この「発声」をDon't come near me.と翻訳したら確かに行きすぎでしょう。まず犬にmeという自意識があるかどうか。たとえあったとしても、come near meのように単語に切り分けられたメッセージはbow-wow!に含まれそうもありません。しかし、犬のbow-wow!には少なくともDon't.の意は含まれていそうです。

人間から動物にDon'tを伝えることは、相手が哺乳類や鳥類であるなら容易ですね。満員電車で押すヤツがいたら、「フム！」と喉を鳴らしさえすればいい。それだけで“Don't.”の伝達になる。この「喉鳴らし」をする人は、人間が言語を持つ以前の祖先と同じコミュニケーション行動をとったのだといえるでしょう。喉を鳴らすだけで相手を斥(しりぞ)ける、これは1つの象徴行動(symbolic action)です。

第4章で、言語構造を植物の生長になぞらえたグレゴリー・ベイトソンのひらめきを援用しました。ベイトソンの思考実践は多くの領域に及びます。次に載せるのは、彼が実娘のメアリー・キャサリンをモデルにした少女と、架空の会話をしているという設定のメタローグ「本能とは何か」からの抄訳（拙訳）です。（『精神の生態学へ』所収）

娘　動物の行動にnotはないの？　つまりね、I will not bite you.ということを、仕草で伝えることはできるの？

父　噛(か)む意志のないことを、どうやって仕草で伝えるか。それは、噛まないんだ。噛まないことをする。

娘　でも、他にだって、していないことはたくさんあるでしょう？「噛

むことはしない」と言うときはどうするの？

父　なんらかの方法で、噛むことを話題にしなくてはならない。

娘　はじめに牙をむく仕草をして、それで噛まないとか？

父　そういうことだね。

娘　でもそれだと二匹の動物がお互いに「噛まない」って言い合うときは、両方が牙をむくことになるでしょう？

父　そうだな。

娘　だったら誤解して、ほんとのケンカになってしまわない？

「噛まない」意志を伝えようとする犬に心を寄せてみましょう。

手話をする人間と違って、犬は噛む行為を別の仕草で表す（represent＝代行させる）ことはできません。噛まずに「噛む」を表すための象徴的な行動がとれればいいのですが、それが難しいのです。ただ、すでに「仲良し」の関係になっている二匹では「噛むことと同じ仕草をして噛まない」——つまり「噛みっこ」をする——行為が観察されます。そのときお互いの間に、二重のメッセージが交わされている、とベイトソンは考えました。

人間語に翻訳したら

これはアソビだ、タタカイではない。

この「牙をむく行為」はタタカイの場で持つ意図を持たない。

となるような「not付きのメッセージ」が交わされているぞ、と。

notの登場と定着によって、思考の中に「である／でない」の境界を引くことが可能になるだろう、でもそこから言語——事態をシンボル（単語）に抽象化した観念体系——までは、道のりが遠そうです。

動物や鳥の鳴き声は、関係、場、空気のゆらめきを伝える。二者の関係、群れとの関係。相手と自分とが今という流れの中で、どういう場（コンテクスト＝文脈）を共有しているのか。動物にとってコミュニケーションは常に現在進行形。いつも抜き差しならない緊張をはらんでいることが想像できます。

人間たちも、関係の流れにとらわれているところは同様です。私たちの

感情(ハート)と生理(ボディ)とは、声高な口調や赤面や半ば無意識の身振りでもって、場の空気や個人の感情についての情報を伝え合っています。関係のゆらめきに応じて、次第に甘ったれた口調になったり、握りしめた拳が次第に震えてきたり、やがて悲しげな沈黙に埋もれたりします。

こうしたアナログ的コミュニケーションが人間において退化したわけではありません。そちらも続けながら（もしかしたらどんな霊長類動物より豊かに行いながら）、それと並行して、コトバを操っているのです。語(words)という、意味を代行する記号を連ねることで、意図したことを伝え、嘘をついて騙したりもする。それとともに表情も精緻化しました。人生の悲しみを、チャップリンのようにユーモラスに伝えるという高度なテクニックも、人は使いこなすことが可能です。

「コトバ」とは単に語句（words）の連なりによってできているのではなく、**ハートとボディによる口調・表情・身振りの染みこんだコミュニケーションが機能していて、それ全体のデジタルな側面をコトバが受け持っている。**「デジタル」とは「不連続」と同義。アルファベット26文字はそれぞれくっきり別物です。a から o へ連続的に変化するような発声を言語は用いません。

加えて、言語記号（意味するもの）とその意味とは別物です。「カナシイ」は悲しくありません。「悲しそうな顔」は、フェイクでなければ「悲しさの一部」ですが、「カナシイ」という発話のうち、悲しさを伝えるのは、その発話に絡む声のアナログ的な（口調やトーンと呼ばれる）要素の方です。逆に言うと、**それ自体はちっとも悲しくない「カナシイ」を口にすることで、想像上の悲しみを伝えることが言語記号を持つ人間にはできるのです。**

この、人間には当たり前のことが、犬にはできない。犬は悲しそうな鳴き声を立てることしかない。その悲しげな「クーン」の発声は「悲しくある」ことの、切り離せない一部です。

CamScannerでスキャン

6-3

コトバは夢にも根ざしている。

notが使えないのは動物だけではありません。睡眠中の人間も、夢を見ながら、なかなかそれを否定できません。「これは夢だ、ホントじゃない」と意識したとたん、夢は覚めてしまうものです。

夢の思考はカテゴライズされるのを嫌います。なんだかボヤッとして、概念にきっちりとした輪郭がありません。

赤い色が印象的な夢を想像してみましょう。その赤は、いつも具体的です。ドロドロしてたり、パリッと乾いていたり、ポタポタ垂れていたりする。色目の具合も独特で、どす黒かったり、鮮紅色だったり。

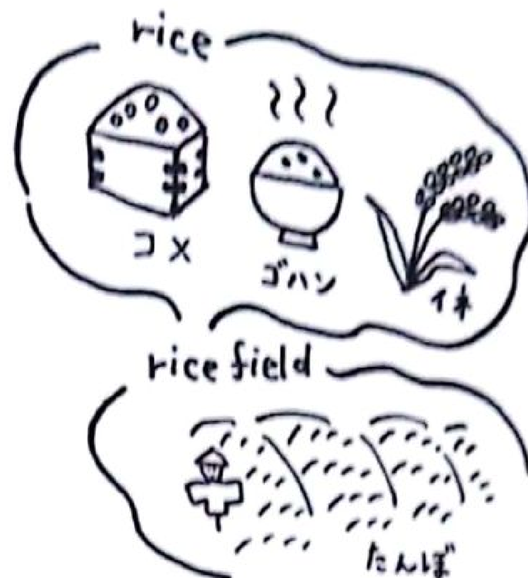
覚醒した思考は「アカ」という記号を用います。その「アカ」に、夢の生々しさはありません。「アカ」は世界をいくつかの色に分割したカテゴリーの1つ。限られた数のクレヨンや蛍光マーカーのセットのようなものです。アカい―アオい、シロい―クロい、そうした対照によって世界を分割し、そのモザイク片をつないで、私たちは話をしています。

英語でも日本語でも、それぞれの語が、集合論の丸い囲いのような境界線によって、「ソレであるもの」を「ソレでない」ものから括りとっているわけです。ここにすでに否定の働きが入り込んでいます。アオはアカくないものですし、ユメはゲンジツでないもの。ミズはオユでないものです。

ところが、そうした差異の境界線は異なる言語の間で同じではありません。英語ではたとえ沸騰していても、waterはwater。単にboiling waterというだけです。日本語で、冷たい油も、天ぷらをジュージュー揚げている油も、どちらも「アブラ」なのと同じで、waterがhot waterを閉め出すわけではありません。ですからそのwaterに、ミズのもつヒンヤリとした瑞々(みずみず)しさのイ

CamScannerでスキャン

メージはありません。



何を何と差異づけるかということには人々の暮らしと文化が作用します。一つの概念を囲いとる意味のフィールドは、それぞれの言語と文化によって大きくなったり小さくなったりするものです。

もう一歩、探求の探り針を落としていきましょう。

それぞれの観念が「であるもの」と「でないもの」とを仕切る（差異づける）ことで成り立っているなら、notのない世界で名詞を使うことはできるでしょうか。形容詞は？

notを持たない生き物が、大きいものに接して、「うわぁ、大きい」と感じることは、可能でしょう。山を前にして、その偉容に打たれ、神として讃えることは、そこから遠くありません。神は、考えるのではなく、信じる対象です。信じるということは、それが嘘になる可能性を抑止するということ。信仰は感嘆の上に築かれます。

この「感嘆」を心のモード（直説法による叙実や反実仮想と並ぶ「ムード」）として見ていくことはできないでしょうか。

アカイを括りとる線の外側は「アカくない」ですから、概念の輪郭は否定の意を内包します。notの概念がない心（たとえば夢の中にいる人）に概念の輪郭線は引けないという理屈になります。

コトバの誕生について考えると、原始人たちが石ころを拾い上げてそれを「いし」と呼んだり、岩を仰ぎ見てそれを「いわ」と呼んだりするイメージが浮かびやすいですが、それは誤り。実体が先にあって、名前があとからついてくるのではありません。

6-4

叙実以前に感嘆がある。

人間のコトバの、より無意識に近い部分に、感嘆とか畏怖とか呼ばれる心の動きがあります。「わ、すごい！」と驚きのコトバを発するのは、「これはすごいことなのである」と言い述べることとどこが違うのか。

まずムード（心のモード）が違います。記述文は、理性的に主語を述語と結びつけようとするし、感嘆文は、感嘆すべき対象に呼びかけたり、述語だけ強調しようとしたりします。

明治大正昭和にわたる日本語学の重鎮に山田孝雄（よしお）（1875–1958）という人がいました。日本語四大文法の一つに数えられる「山田文法」を打ち立てた人ですが、その山田文法では、日本語の「句」(基本構造を備えたユニット文）を二分して、「述体句」と「喚体句」に分類します。[*1]

山中の青葉うつくし。——これは述体。
ああ山中の青葉のうつくしさよ。——これは喚体。

国学者としてスタートした山田は、想像するに、明治以降の文法学の営みが、欧風の前提をもって日本語をいじるものであることに抵抗を感じたのでしょう。彼は西洋語にはない終辞に注目し、そこに明らかな詠嘆の辞があるのを見て、日本語には「もののあはれ」を表現する「喚体」という形式があることを主張しようとしたのかもしれません。

＊1　滝浦真人『山田孝雄——共同体の国学の夢』(2009)を参考にした。

CamScannerでスキャン

ただ、どうなのでしょう、「感動の句」と「説明の句」を、句中の語の違いに区別することには限界があるのではないか。

「あなたのお子さん、かわいい」は述体か喚体か、考えると分からなくなります。英語でも同様。

Your daughter is cute.

は述体（叙実文）だとしても、「かわいい！」の思いが先に立つと、英語でも主語が消えてしまう。

Such a pretty baby!　How adorable!

これは喚体（感嘆文）と呼びたいですね。しかし、She is so cute! と、主語述語を付けて言っても同じでしょう。感嘆と叙実とは、心の動き（心理的ムード）の問題で、声の大小や、イントネーションの高低のような、言語のアナログ的（量的）な特徴に関すること。言語研究では扱いにくいものなのです。

私たちは学校で「感嘆文」の形式を習いました。

What an angel she is!　　何という天使なのだ、彼女は！
How beautifully she dances!　　何と美しく彼女は踊るのだ！

感嘆文の動詞に「感嘆法」特有の形はありません。命令文の動詞は、「命令法」という（原形不定詞と同じ）形をとって直説法と区別されますが、感嘆文は上記の is! も dances! も、「ほんとにそうだ」という心のモード、すなわち「直説法」に留まります。

というか、コトバの進化を想像すれば、はじめに感嘆法（虚偽を生み出せない感嘆と信仰の心）があり、そこに not が入り込んで、事実／虚偽から事実を選ぶ直説法の「叙実文」が成立したと考えるのが正しい順番でしょう。

「法」(mood) に関しては、第1章で扱いました。英文法では基本的に3つの「法」を区別します。これに「感嘆法」を加えてみます。

CamScannerでスキャン

(1) 命令法 (imperative)

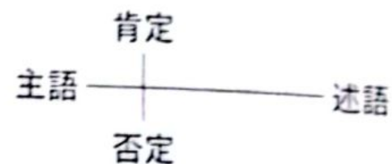
- 相手に向かって、してほしいことを、ハダカの動詞で提示する。
- 主語は基本的に付けない。
- 時制がない。
- 否定は文頭にDon'tを付けて示す。

(2) 感嘆法 (exclamative)

- 感情・印象・感動をそのままぶつける。
  How cold (the wind is) !
- 動詞は直説法。過去形、進行形、完了形もあり。
- 否定はない (How not blue! とは言わない)。
- 主語+動詞 (SV) はオプショナル。

(3) 直説法 (indicative)

- 現在の事態や過去の事実を把握し、
  推定される未来についても述べる。
- 疑問文を含む。
- 主語を述語に繋(つな)げ、その際に
  肯定か否定のどちらかを選択する。



(4) 仮想法 (subjunctive)

- 仮定上のことや、自分の想いを口にするとき
  それを事実だとは思っていないことを明示する法。
- [1-4] で扱った以外に、まだ決まっていないことを
  事実めかしてはまずいというときにも使う。
  I suggest that he *wear* a mask.
  彼はマスクをした方がいいですよ。(wearsとはしない)

(2) の感嘆法は否定のないモード、

(3) の直説法は否定か肯定かを選ばなくてはならないモード、

(4) の仮想法は、直説法が選んでしまう「否定」または「肯定」を打ち消すモードと見ることができます。(2) から (3)、(3) から (4) と、否定を伴う意識の次元が強くなっていくのが分かるでしょう。

CamScannerでスキャン

6-5

日本語は、主観的な思いの積み上げを許容する。



言語とは直説法（叙実のモード）の文ばかりから成るものではありません。感嘆から反実仮想に至る心のスペクトル全体を反映するものです。

それは日本語でも同じはず。こんな状況を思い描いてみましょう。——大草原に立って、見上げると、青い空に真っ白な雲が、ポッカリ浮かんでいる。感動が言葉になって口をつく。

「広いなあ。空が青い」、「雲、まっしろじゃないの、綿菓子みたい！」

ムードは感嘆です。これを叙実のモードに変換します。

i）大草原の青い空に、真っ白な雲が、綿菓子みたいに浮かんで

（どこに）（なにが）（どのように）と来て、述語「浮かんで」と来ても、まだ文は浮いたまま。最後に「いた」という結びが来て、そこで初めて確定される——と思いきや、「……いた、というのは間違いで」と続くかもしれない。

対人言語である日本語は、事実を確定しようとする構造を欠いている——いや、事実を確定せずなるべく相手の判断に委ねる構造を発達させてきた——んだろうと思います。

今の「いた」は、動詞＋助動詞で、「た」は完了の助動詞「た」の終止形とされますが、「終止形」と「連体形」に形の違いはありません。「一つの文が終止した」のは、句点を置く区切りがついたということであって、そこで述べたことが真実として言明されたわけではないのです。日本語の述語は、いわば、その陳述を「真」とする確定機能を必要としないのです。

CamScannerでスキャン

直説法の英語にはこれがあるということを、本書は一つのテーマにしてきました。is や was、does や did が現れるたび、その英文は、一種の確定キーを押しているのです。

i)の文を英語にすると、性質がどう変わるでしょうか。

S　V　C
Pure white clouds —— were floating　[like] cotton candy
C　C
[in] the blue sky　[over] the open grassy field.

SVを言い終えれば、文を終わらせることができます。あとはいわゆる「副詞句」(副えて文意を補う詞)で情報を補えばよい。

この文では副詞句(C)が3つ。Cの位置は基本的に自由です。たとえば、こんなふうにも——

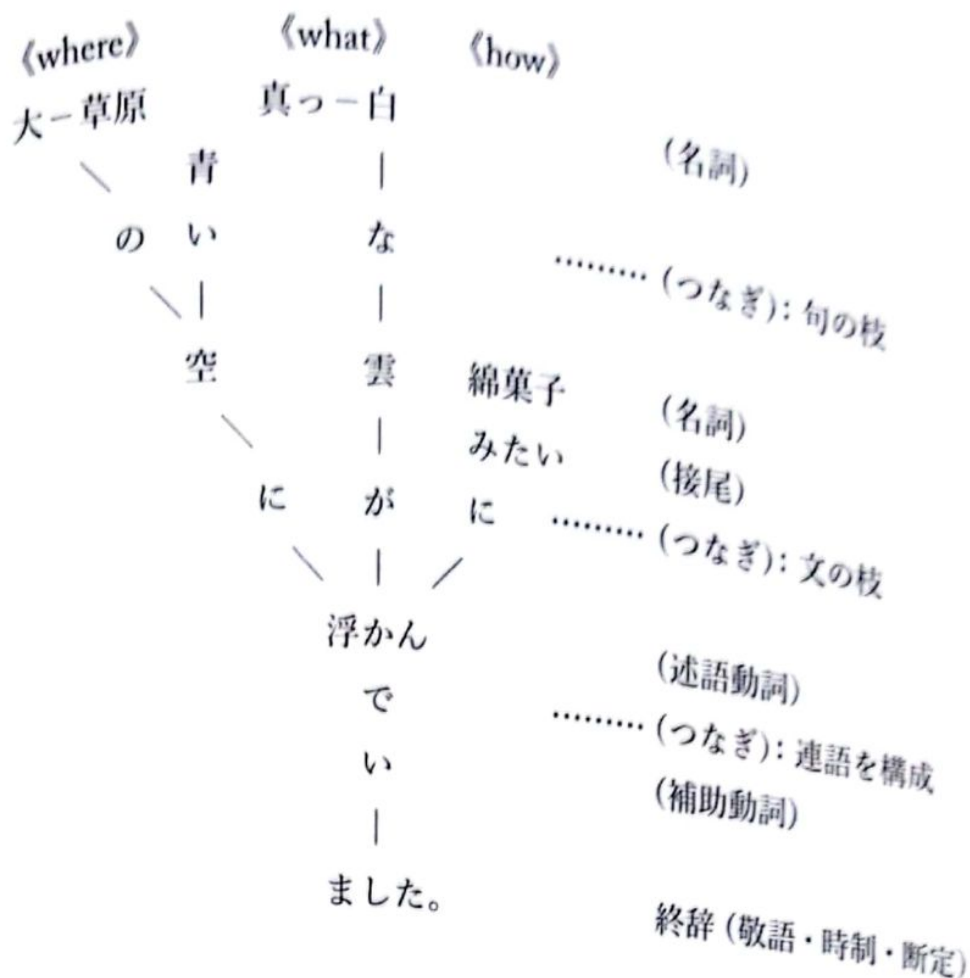
C … C, S —— V … C.

C　C
[Like] cotton candy … [in] the blue sky,
S　V　C
pure white clouds —— were floating … [over] the open grassy field.

副詞句が放置される(明示的なつながりから切れていられる)という点に注目。これらの句は動詞句につながるわけでも、名詞句につながるわけでもない。英語の前置詞句は連用形と連体形の形を持たず、特定の句とのつながりに無関心のまま、文中に浮遊するのです。

それに比べると、日本語のやり方はずいぶん違います。

CamScannerでスキャン



至るところ、つなぎの小辞がたくさん。根本の幹（述語）へは「どこで／何が／いかに」等の情報が、「に」や「が」のような「格助詞」を介して接続されています。それらの枝に、さらに小枝が「の」「い」「な」のような小辞を介してつながっています。

このツリーには、日本語文の形態について、改めて考えさせられる点がいくつもあります。学校の文法では扱われない点に限って、以下にリストしておきましょう。これは私自身への課題です。

(1) いわゆる「てにをは」は文（樹木）の構成要素（大枝）をつなぐが、その先に「の」「い」「な」など、連体機能を持つ（つなげて名詞句をつくる）単音の小辞が大活躍している。「い」は形容詞の終止形とされているが、日本語の形容詞というカテゴリーをめぐっては、専門家の意見も割れている。このような樹形図をもとに、いったん形容詞という品詞を立てるのを中止し、名詞（実体である必要はない）と助詞のみによる組み立てを考えてはど

うだろう。

(2) 枝を切って終辞につなげると、文が成立する。

大草原——よ。

まあ、青い空——(φ)。

真っ白な雲——だわね。

綿菓子みたい——だ。

これらの文に「叙実」の性格は強くない。叙実しているようでもあり、感嘆しているようでもある。自分の得た感覚的な情報を相手に届ける、というあたりが妥当だろうか。

(3) 終辞の選択は、話者が相手との(上下・遠近)関係をどのように認識しているかで変化する。そして、ここが重要なのだが、**関係の認識をコトバにしないまま文を終えることは日本語では不可能である**(書き言葉でも、「です・ます調」「である調」などの選択から逃れられない)。日本語で敬語は大事な「文法カテゴリー」なのだ。

(4) 細かい情報をさんざつなげてしゃべっていながら、その結論は最後まで保留しておけるのが日本語。SをVにつないでしまったらメッセージがほとんど確定してしまう英語の流儀を学ぶには、その点に特化した訓練が必要である。特に英語では動詞句の頭、助動詞の部分に、日本語なら文尾に細やかな心の表現が来るので、そこは英語学習のポイントとなるだろう。

この点は5章の最後で考えたことと同じである[**5-10**]。I'm going toやI'd like toを覚えた生徒には、次のような準助動詞的な表現を次々と与えていく訓練が、特に英語を話す力をつけるのに効果的だろう。

(例) I was just going to say how thankful I am.

ただ感謝を伝えようとしたんです。

I wouldn't have dreamed of receiving such a nice present.

あんな素敵なプレゼントをいただくとは夢にも思っていなくて。

CamScannerでスキャン

6-6

1語文にも、文構造と法がある。

小さな子供や外国人だけでなく、ネイティブの大人も、けっこうワン・ワード・センテンスで会話しています。

次の1語文の品詞は何か。

(1) See?　(2) Apparently.　(3) Depends.

(1) は、「ね？」「(私が言ったとおり) でしょう？」という感じ。動詞1語による疑問文で、Did you see? (見て分かりました？) の省略形です。

(2) は、「そのようだ」。「見た限りは」という副詞1語で、相手の発言に応対しているわけです。

"Hey, somebody is in here" (ねえ、誰か中にいるよ) と言われたりしたときには "Apparently." とか "Seemingly." などと返すだけで十分でしょう。

"I don't think anybody is in here." (誰もいないんじゃないかな) に同意するには "Apparently not." と not が加わります。**notを付けて、相手の否定的言辞への賛同を示すわけです。**

(3) は、「場合によりけり」という意味の "It depends." の略。直説法の動詞は主語を必要としますが、It depends. の it は曖昧な弱い音。なので、depends の頭の破裂音と一体になったのでしょう。It's wonderful. が「スワンダフル」の発音になって、ジャズ・ボーカルの名曲になったのと一緒ですね。It は軽く、吹けば飛ぶような存在です。

これらの「一語文」は単に「フル・センテンス」の代わりをしているにすぎないのであって、コトバの「原初的」な姿を宿しているわけではありません。その品詞も、文のタイプ（叙実文、命令文などの別）もすぐに判別できます。

もう一段、問のレベルを深くしましょう。

一語文を成す各語の品詞と、
メッセージの性格（＝法）を線で結びなさい。

(1) Run. •	• 名詞 •	• 命令 (imperative)
(2) Fire. •	• 動詞 •	• 直説 (indicative)
(3) Liar. •	• 形容詞 •	• 隠喩 (metaphoric)
(4) Hot. •	• 間投詞 •	• 感嘆 (exclamative)

これらの発言から想像する状況は人それぞれでしょうが、多くの人が、だいたいこんな感じで意見の一致を見るのではないでしょうか。

(1) 野原でボールを放って、イヌにRun! と言えばイヌは喜んで走り出すでしょう。往年のパソコンは、ファンクション・キーの「F5」が run（実行）の指令でした。こちらのRunも、プログラムに向かって「走れ！」と言っている点では同じ。いずれのRun. も動詞ととるのが普通で、発話のモードは「指示・命令」、文法家の言う「インペラティブ」です。

(2) 戦闘映画のファンはこのFire. を「射て！」の号令にとるかもしれません。それより「火事」の情景を思い浮かべる人の方が多いでしょうか。「発砲（火を噴け）」の意味にとるなら、このFireは動詞ですが、「火事」の意味なら名詞になります。ただ名詞であるとしても、この文の働きが

- 叙述なのか——“There’s a fire.” “A fire is buning.”
- 実質的な指令なのか——“Look at that fire!” “Hey, fire. Run!”
- 感嘆なのか——“Oh, what a fire!” “Amazing.”

CamScannerでスキャン

は分かりません。そのように分類できるものなのかも分かりません。

(3) これは感情的な対面シーンを想起させます。liarには冠詞もないし、罵り(ののし)として、相手に投げつける言葉の相貌をしています。

罵り合いのことをname-callingといいます。バカ、カバ……を始めとするさまざまな侮蔑語を投げつける。その様は、まるでケンカする猿が吠え合うようです。ヒトは、単に吠え合うだけのときも、「ウォー」とか「ギャー」とか言う代わりに、シンボルを投げつけるのですね。

冷静さを欠いて罵るとき、その心からnotが剥げ落ちていることに注目してください。「オタンコナス」という罵倒は、相手が実際オタンコナスであるかどうかの判断が停止したところから出てきます。

相手を指して、そいつが「バカ」だろうと「カバ」だろうと関係ない、という気持ちで使用される「カバ」は、言語的シンボルとは別物です。それは概念を括りとる輪郭を持ちません。「カバならざるもの」との境目がありません。

(4) 暑いとき、ただ一言「暑い！」といいます。英語だと、It's hot.と形式主語を付けることが多い。他人はともかく自分は暑いのだというときは、*I'm* hot.となるでしょう。SVCの構造をかなぐり捨てて、吐き出すようにHot!と言うと、もっと直接的な表現になります。犬が舌を出してハァハァやるのと近いような――痛いときにOuch!と言うのともあまり変わらないような――感嘆というより、むしろ喘(あえ)ぎの一部であるような"Hot!"を人は口にします。

エクササイズの解答としては、(1) が動詞・命令、(2) が動詞・命令のほか、名詞・機能不詳（命令／直説／隠喩／感嘆）。(3) は名詞による（「感嘆」というのも変ですから）感情吐露。(4) は形容詞による感嘆または感情吐露といったところでしょうか。

英文法では、動詞に「法」があるとし、命令法、直説法、仮想法の3つを切り出すわけですが、すでに私たちは「感嘆法」をモードとして加えました。さらに「隠喩法」を加えて、コトバの本源を探る旅の一助にしたいと思います。

CamScannerでスキャン

6-7

隠喩は深い真実だ。



前回のエクササイズでやった（2）Fire. という発話は、もしかしたら、目の前の相手の、ヤル気満々の燃え盛るような姿を前にした感嘆文だったかもしれません。だとしたらそのfireは隠喩の言葉遣いです。ball of fire（火の玉）というのは、辞書に載っているクリシェーで「やり手」の人間を指します（それをタイトルにしたバーバラ・スタンウィック主演の映画*Ball of Fire*［1941］がありました）。

隠喩法の例として、前回いきなり「バカ、カバ」を出して品格を疑われたかもしれません。"You pig!"（豚め！）とか "Son-of-a-bitch"（牝犬の息子）などの「なぞらえの罵倒」は、研究分野としては面白そうですが、ここではもう少しまともな例を扱いましょう。

カトリックの伝統的な「主の祈り」は、祈願法で綴（つづ）られた文が続きます。

Our father, who art in heaven,	天にまします我らの父よ
Hallowed be thy name;	ねがわくは御名（みな）をあがめさせたまえ
Thy kingdom come;	御国（みくに）を来たらせたまえ

thyはyour（単数）の古語。主格はthouで、それに呼応するbe動詞の現在形がartです。thy nameにisではなくbeが、Thy kingdomにcomesではなくcomeが続いていますが、これは「祈願法」と呼ばれます。「仮想法現在」とも言えるでしょう。祈りの内容は未だ実現していないので直説法では語れません。

1行目のartは現在のareに当たります。主語Thouに対するbe動詞の直説

CamScannerでスキャン

法現在形で「実際に天にいる」ことを示します。「天にまします」は信仰のコトバであって、「天にいないかもしれない」という可能性は、最初からありません。そして「天」も「父」も、世俗の論理に属する概念ではなく、線引きされた輪郭を持ちません。それは比喩ではあるのですが「比喩であって本当ではない」の「ない」は抑止されます。抑止されないと祈りが成立しません。

比喩にすぎないことを明確にしながら、主の祈りをやってみましょう——

まるであなたが生きていて人格を持っているふうですので、言葉で話しかけますが、あなたは、まるで空の彼方にいらっしゃるように感じられ、あたかもわたしたちの父のごとき存在であられるかのようです……[*2]

この「まるで」や「あたかも」を取り去って、直説法の思考から隠喩法の思考に切り替えることが、信仰に入るということなのでしょう。

直喩（これは比喩だと明示される比喩）はしばしば仮想法をとります。

He talks as if he *knew* everything.
まるで何でも知ってるかのような口ぶりだ。

隠喩は言葉遣いというよりも、心の様態の問題です。単なるレトリックでも、言い回しでもありません。私たちの思考が本源的に未分化な無意識とつながっている限り、隠喩的な思考モードはつねに身近なところにあります。

愛国者はなぜ国旗に神聖さを感じるのでしょう。

国旗掲揚は、醒めた目で見れば、模様を描いた布を、空間の高い位置に配するだけのことですが、愛国的な儀礼空間では、「国旗は国そのものではない」という直説法のモードは押し沈められています。The flag is *not* the country. という理解から not が消えることで、国旗自体に国そのものの神聖

＊2　グレゴリー・ベイトソンの1980年の講演 "Evernal Verity" より引用。

さが宿ります。そしてそうなれば、単なる物理空間だった「上の方」が神聖さを孕むようにもなるでしょう。

いや、順番をいうなら、世俗化の過程を語るのが筋かもしれません。見上げる山が、もともと神そのものだったとすれば、山を語るときは、神を語るように祈るモードになるしかなかったと想像されます。山を目的語において、主格のIを主語に立て、SVOでI have climbed the mountain.などという文を口にするのは不敬なことと思われたでしょう。

山は山であり、神は神である。山は神ではない。──このnotの導入によって、直説法の叙実が可能になります。隠喩から醒めるにしたがって、アイデンティティというものが生まれ、単語の意味が固まり、直訳が可能になる。しかしそれは事後的な状況で、ことばの初めにあるのは隠喩の方です。

何も神秘めいたことを言っているわけではありません。基本動詞を考えてみましょう。そしてrunならrunの「たくさんの意味」に共通の単一のイメージがあることを考えてみましょう。

学習用の中辞典にも、動詞runの「意味」は何十も記載されています。前項で、コンピュータ・プログラムに「走れ」の指示をしましたが、Run.という命令文は、想像力の及ぶ限り、あらゆるシチューエーションに適用可能です。

Run, faucet. Run!　　蛇口よ、走れ(水道の水よ、出ろ)！
Come on, snot. Stop running!　　もう、鼻水ったら。出るのやめて！
Oh please, run that great show again!
ねえお願い、またあの素敵なショーを上演して！

英語に親しむとは、結局、**それぞれのrunの用法の違いをなくし、その基本語が抱えているイメージの泉に心をあずける**ことではないでしょうか。もちろん、心をあずけるときには、日本語の「走る」という限定的な訳語は脳裏から消えていることでしょう。

CamScannerでスキャン

本書ではまた、haveを「持つ」という日本語から解放し、単一の言語記号が担う、深く隠喩的な意味を感じとることに務めました。助動詞と本動詞にまたがって、所有と平定（コントロール）の他動詞として多大な支配力を発揮するに至ったhave。その用法の変化と拡張について考えることは、私たちの人間の文明について、生態学的な視野で考えることにも通じていくのではないでしょうか。

隠喩から叡智（えいち）を汲み取る思考家を、私たちは詩人と呼びます。

We are such stuff as dreams are made on,

人間は夢の織り糸か？　シェイクスピアの『テンペスト』に出てくる魔術師プロスペロは、そうだと肯（うなず）きます。われわれは夢が作られるstuff（素材、マテリアル）のようなものだ、と。人間たちはいろいろと動き回って歴史を作っている気になっているが、実のところはそうやって織られていくのは夢にすぎない。そしてプロスペロはこう続けます——

and our little life is rounded with a sleep.

我々のちっぽけな命は眠りに囲まれている、明確な輪郭はない、一つの大きな眠りの海に浮いているのだ、と、直説法のisで堂々と言い切るのです。

CamScannerでスキャン

6-8

隠喩法は言語研究を推進する。

この本を書きながら、私も「隠喩」の世話になりっぱなしでした。英語の「背骨」と「尾ひれ」を語り、英語動詞の「発芽」を語りました。述語の動詞は「根を必要とする」が、根を失えばネクサスになって「茎から生える」ことができるとか、隠喩の語りを臆面もなく繰り返しました。

コトバはモノではない。名詞的存在ではない。モノになぞらえるのは悪しき隠喩に染まることだ、とどうしても思ってしまうからです。モノであるなら、その科学的な研究法は決まっています。凝視し、パーツに分類し、名付けて整理していけばいい。

ところがコトバはパターンです。コネクトする性格を持つパターン。NがVとつながり、VがNとつながり、空間詞prepがNとつながりCとなって、そのCがNVN連結と緩くつながる。句はつながって節を成し、節は関係詞によって句に丸め込まれる。これが言語のパターンです。植物が葉を伸ばすときのように、同じパターンが小さな視野でも大きな視野でも繰り返される。その模様をこの本の随所で明らかにしようとしてきました。

「道具としての英語」という発想があります。コトバは使えてこそナンボだと。それもそうなのですが、その比喩が、コトバを「そこにある」モノのように扱わせてしまうなら要注意です。コトバは話者とともに「いる」存在なのですから。

文を語句に分け、語を音素に分け……と、解剖学のように腑分けしても仕方ない。そうすることで、ある側面は見えるようになるだろうけれど、それはコトバの物理的な（死んだ）側面だろうと思います。**私たちに必要なのは「コトバと生きる」ための知恵です。**

CamScannerでスキャン

英語の研究は今もたいへん盛んで、英語史家、語用論者、言語学者、辞書編纂者、英語教育の理論家、英語教育史家が、日々大量の知を生み出しています。日本の英語学習環境について、辞書も教材もメディア環境も、素晴らしくよくなってきていると私は感じています。英語のあらゆる側面について、細かな知見が積み重ねられている。ただ文法や語法についての記述は、どこまで細かく精確にやっても、空しいところがあります。**むしろカメラを引いて遠ざかって、言葉のツリー全体を、その背景（文脈）と一緒に見るようにしないと、教育の現場に生かせるような知はなかなか生まれない。**大つかみの感覚をシンプルかつキッチリと伝える説明は生まれません。

言語は私たちより大きく、その客観的な姿を目の前にすることがそもそもできないものだと思います。客観視（準客観視）できるのは、1つの文がどのようなパーツからできているかとか、この関係性の中でこのフレーズの品詞は何かとか、そんな点に限られてしまう。「文法」についての思考はどうしても細かな話に限られて、英語という言語が、ことばのシステムとして、日本語とどのように違う作動のしかたをしているのか——というマクロな話にはなかなかなりません。でも、もしその種のことがちゃんと感覚でき、それを語れたとしたら、日本人の英語学習も、かなりスマートなものになっていくだろうと思うのです。

言語の構造は、私たちの思考や信念を織り上げている構造そのものである。その構造が日本語と英語でずいぶん違う。どのくらい違うのか？　実は同じところもけっこうあるのか。——英語と日本語の違いに関するたしかなイメージを持って、英語にアプローチしていくことは、大いに時間と労力の節約になる——という信念から本書は書かれました。

いや、ちょっとそれは大言壮語が過ぎるかな。私のマインドは今もほとんど母語の日本語で動いています。母語で考えながら、異言語の英語をキャッチし、その上に乗るしかない。乗ろうとしてひっくり返る。それを繰り返しているだけです。かれこれ60年も。

幸運にも自分は、ピンチョンやベイトソンを含む、創造的な知性が生み出す思想や表現と格闘しそれを日本語に訳出する機会に恵まれました。も

CamScannerでスキャン

しも彼らが日本語に堪能であったら、この文はどんな風にプレイするだろうと想像して、自分でやってみることが修行になりました。

日本語と英語の間に「深くて暗い間隙（かんげき）」があります。その大きなギャップを渡って翻訳が成り立つときは、何かが降りてきたかのように感じることがあります。

4つのアルファベットが並んだ「5文型」は、私にとってその間隙へ下りていく足掛かりのようなものでした。それを頼りにさらに下りていくと、5つの文型に見えたものからbe動詞が遊離し、それとともに、Cの見え方が変わってきました。そして残りの文型がSVOと基本的に同じ物——そのちょっとした変異体——であるように見えてきたのです。

そのお話——動詞を核とした英語文の動的な構造とその捕まえ方、乗り方の話——が本書のほぼ半分を占めています。残りの半分では、もう少し大きな話と小さな話をしました。動詞句内部の「小さな」話では、英語学習者が多くのエネルギーをとられる「時制」に対して、「TO不定詞」の新解釈を含む新しいアプローチを提示することを試みました。

「いままでと違う」ことに戸惑う読者も少なくないと思います。ただ、学校で文法はやったのだけど、いまひとつピンとこなかったという方には、ぜひこちらの考え方を試してほしいと思います。また、学校その他で英語を教えている方たちの励みになるような本を書きたいという願望も、私はつねに持っています。生徒たちの「なぜ英語ではこうなるんですか」という質問に答えるには、ぶ厚い文法書や英語史の知識が必要、と思ってこられた先生方にも、英語の基本的発想そのものにズカズカ踏み込んでいって大丈夫、素朴なフィーリングに基づいた説明が、実は役に立つんですよというメッセージを届けられたら、と思っています。

CamScannerでスキャン

おわりに

私はこれまで英語または英語教育について、いろいろな場でお話ししたり、エッセイを書いたりする機会がありましたが、ここまで踏み込んだ議論をするのはこれが初めてのことです。直接のきっかけは2012年の『ENGLISH JOURNAL』に「英語ができない病」という連載の場を用意していただいたことでした。私たちは単に英語ができないだけではなく、ある特定の種類のできなさを、教育を通して習得しているのだという実感に基づいて、ではどうしたらいいのかということを考えた論考です。その仕掛け人の永井薫さんに引っ張られるようにして、10年後の今日、最初から書き下ろす形でこの単行本にたどり着くことができました。

2012年の私は大学を早期退職し、テレビの英会話番組も降板して、何年かけても終わらないピンチョンの『重力の虹』の翻訳に打ち込んでいる時期でしたが、その後、お声掛けいただいて放送大学に着任し、英語の基礎を学び直す市民向けに『英語事始め』という教材を作ったり（大橋理枝先生との共著）、大学院で『異言語との出会い』という教材を、主任講師の滝浦真人先生ほかの方々と共同制作したりしました。本書の中には、これら2冊の教材に書かせてもらった内容が形を変えて入り込んでいます。

雑誌連載としては、古く1980年代の「英語基本動詞研究」(『GS――たのしい知識』)と「翻訳魔術論」(『翻訳の世界』)もありました。前者は、人はいかにしてhaveを心に抱え持つようになったのかとか、knowを知るとはどういうことかなど、当時の流行語で言うところの「知のパラドックス」と戯れる試みでしたが、後者ともども、力及ばずしてまとめあげることができていませんでした。

『英文法を哲学する』という題の本ができるまでには、このように長い期間にわたるさまざまな企画があり、折々にお世話いただき、ご迷惑をかけた方々は、故人を含んでかなりの数に及びます。こうして、2020年代の「未来」に、読者のみなさんのお役にも立ちそうな本として出版されることを、驚きと感謝をもって受け止めています。

CamScannerでスキャン

参考文献

＊以下は本書で言及した書物を中心に、入手しやすい日本語参考文献と、古典として重要な書および関連する英文法書を並べたものです。
＊旧版の再刊や文庫版は、改題したものを含め、新版のみの情報を掲げます。

朝尾幸次郎『英語の歴史から考える 英文法の「なぜ」』(大修館書店 2019)

阿部公彦『病んだ言葉、癒やす言葉、生きる言葉』(青土社 2021)

安西徹雄『英語の発想』(ちくま学芸文庫 2000)

イェスペルセン、オットー『文法の原理』[上・中・下] 安藤貞雄訳 (岩波文庫 2006) ／ *The Philosophy of Grammar* (1924)

池上嘉彦『英語の感覚・日本語の感覚：〈ことばの意味〉のしくみ』(NHKブックス 2006)
──『日本語と日本語論』(ちくま学芸文庫 2007)

今井むつみ『ことばと思考』(岩波新書 2010)

ウォーフ、B・L／池上嘉彦訳『言語・思考・現実』(講談社学術文庫 1993) ／ *Lanuage, Thought, and Reality* (1956)

江利川春雄『日本人は英語をどう学んできたか：英語教育の社会文化史』(研究社 2008)

大野 晋『日本語の文法を考える』(岩波新書 1978)

加賀野井 秀一『日本語の復権』(講談社現代新書 1999)
──『日本語は進化する：情意表現から論理表現へ』(NHKブックス 2002)

金谷武洋『日本語に主語はいらない：百年の誤謬を正す』(講談社選書メチエ 2002)
──『日本語文法の謎を解く：「ある」日本語と「する」英語』(ちくま新書 2003)
──『日本語と西欧語：主語の由来を探る』(講談社学術文庫 2019)

加藤重弘『日本語統語特性論』(北海道大学出版会 2013)

ゲーテ、ヨハン・ヴォルフガング・フォン『ゲーテ形態学論集 植物篇』木村直司訳 (ちくま学芸文庫 2009)

左藤良明『これが東大の授業ですか。』(研究社 2004)
──(大橋理枝共著)『英語事始め』(放送大学教育振興会 2017)
──『ビートルズde英文法』(放送大学教育振興会 2021)

ピア、エドワード『言語：ことばの研究序説』安藤貞雄訳 (岩波文庫 1998) ／ *Language: An troduction to the Study of Speech* (1921)

田宏『言葉の海へ』(新潮文庫 1984)

浦真人『山田孝雄：共同体の国学の夢』(講談社 2009)

克彦『ことばとは何か：言語学という冒険』(講談社学術文庫 2009)

誠記『日本文法 口語篇・文語篇』(講談社学術文庫 2020)

中島文雄『日本語の構造：英語との対比』（岩波新書 1987）

バーマン、モリス『デカルトからベイトソンへ：世界の再魔術化』柴田元幸訳（文芸春秋 2019）／*The Reenchanment of the World* (1981)

ピンチョン、トマス『ヴァインランド』世界文学全集 Ⅱ-11、佐藤良明訳（河出書房新社 2009）／*Vineland* (1990)

フォークナー、ウィリアム『アブサロム、アブサロム！』世界文学全集 Ⅰ-09、篠田一士訳（河出書房新社 2008）／*Absalom, Absalom!* (1936)

ベイトソン、グレゴリー『精神と自然』佐藤良明訳（岩波文庫 2022）／*Mind and Nature* (1979)
——『精神の生態学へ』［上・中・下］佐藤良明訳（岩波文庫 2022 刊行予定）／*Steps to an Ecology of Mind* (1972)

ポランニー、マイケル『暗黙知の次元』高橋勇夫訳（ちくま学芸文庫 2003）／*The Tacit Dimension* (1966)

本田勝一『〈新版〉日本語の作文技術』（朝日文庫 2015）

三浦つとむ『日本語はどういう言語か』（講談社学術文庫 1976）

三上章『象は鼻が長い：日本文法入門』（くろしお出版 1960）

森田良行『日本語の発想、日本語の表現：「私」の立場がことばを決める』（中公新書 1998）

大西泰斗、ポール・マクベイ『一億人の英文法』（東進ブックス 2011）
——『ハートで感じる英文法 決定版』（NHK出版 2018）

斎藤秀三郎『実用英文典』中村捷 訳述（開拓社 2015）／*Practical English Grammar* (1898–99)

細江逸記『英文法汎論（英文法統辞論摘要）』新版（篠崎書林 1971）

Douglas Biber, Susan Conrad & Geoffrey Leech, *Longman Student Grammar of Spoken and Written English* (Pearson, 2002)

Rodney Huddleston & Geoffrey K. Pullum, *The Cambridge Grammar of the English Language* (Cambridge University Press, 2002)

Randolph Quirk, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech & Jan Svartvik, *A Comprehensive Grammar of the English Language* (Pearson, 1985)

CamScannerでスキャン

佐藤良明

1950年生まれ。東京大学名誉教授・放送大学客員教授。専門はアメリカ文学、ポピュラー音楽、メディア文化論。1990年代、東京大学教養学部における英語教育改革を主導。全学共通の英語テキスト『The Universe of English』(東京大学出版会)シリーズは学外から反響を呼んだ。2000年以降はNHKの英会話番組「リトル・チャロ」の放送教材制作、「1000時間ヒアリングマラソン」の総合監修(アルク)、放送大学で「ビートルズ de 英文法」等の授業を担当する。著書に『ニッポンのうたはどう変わったか：増補改訂 J-POP進化論』(平凡社ライブラリー)、『佐藤君と柴田君の逆襲』(柴田元幸との共著、河出書房新社)、『これが東大の授業ですか。』(研究社)など。訳書に『重力の虹』『ヴァインランド』(トマス・ピンチョン／新潮社)、『The Lyrics 1961–1973』『同 1974–2012』(ボブ・ディラン／岩波書店)、『精神と自然』(グレゴリー・ベイトソン／岩波文庫)ほか。

英文法を哲学する

発行日　2022年 1月24日(初版)

著者　佐藤良明
編集　株式会社アルク 出版編集部
校正　挙市玲子
デザイン　山口桂子(atelier yamaguchi)
イラスト　山元かえ
DTP　山口桂子(atelier yamaguchi)
印刷・製本　図書印刷株式会社

発行者　天野智之
発行所　株式会社アルク
〒102-0073　東京都千代田区九段北4-2-6 市ヶ谷ビル
Website：https://www.alc.co.jp/

• 乱丁本、落丁本は弊社にてお取り替えいたしております。
Webお問い合わせフォームにてご連絡ください。
https://www.alc.co.jp/inquiry/
• 本書の全部または一部の無断転載を禁じます。
• 著作権法上で認められた場合を除いて、
本書からのコピーを禁じます。
• 定価はカバーに表示してあります。
• 製品サポート：https://www.alc.co.jp/usersupport/





©2022 Yoshiaki Sato / Kae Yamamoto / iStock.com/ilbusca / ALC PRESS INC.
Printed in Japan.
PC：7021040
ISBN：978-4-7574-3939-9

CamScannerでスキャン